

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2012-12505

(P2012-12505A)

(43) 公開日 平成24年1月19日(2012.1.19)

(51) Int.Cl.	F I	テーマコード (参考)
C09D 11/00 (2006.01)	C09D 11/00	2C056
C09B 67/46 (2006.01)	C09B 67/46 A	2H186
B41J 2/01 (2006.01)	B41J 3/04 I O I Y	4J039
B41M 5/00 (2006.01)	B41M 5/00 E	
C09B 33/12 (2006.01)	C09B 33/12	
審査請求 未請求 請求項の数 11 O L (全 71 頁)		

(21) 出願番号 特願2010-150603 (P2010-150603)
 (22) 出願日 平成22年6月30日 (2010. 6. 30)

(71) 出願人 306037311
 富士フイルム株式会社
 東京都港区西麻布2丁目26番30号
 (74) 代理人 100115107
 弁理士 高松 猛
 (74) 代理人 100132986
 弁理士 矢澤 清純
 (72) 発明者 小澤 孝
 神奈川県足柄上郡開成町牛島577番地
 富士フイルム株式会社内
 (72) 発明者 今村 弥佳
 神奈川県足柄上郡開成町牛島577番地
 富士フイルム株式会社内

最終頁に続く

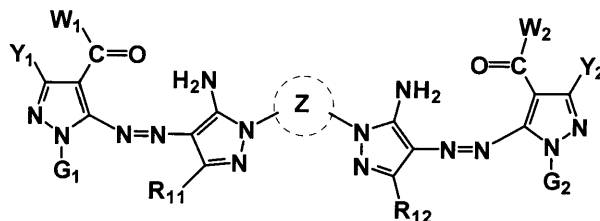
(54) 【発明の名称】 インクジェット記録用水性インク

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】 コゲーション防止、インクの加温保存安定性、メンテナンス性に優れ、印字においては耐擦性、耐光性を実現できるインクジェット記録用水系顔料インクを提供する。

【解決手段】 A及びBを含有する着色剤、特定の多価アルコール及びアセチレングリコール系界面活性剤を含むことを特徴とする。A：下記一般式(1)で表されるアゾ顔料、B：特定の構造を有する疎水性構造単位と、親水性構造単位とを含むビニルポリマー。

一般式(1)：



(一般式(1)中、Zは5又は6員のヘテロ環を表す。)

【選択図】 なし

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

A 及び B を含有する着色剤、多価アルコール及びアセチレングリコール系界面活性剤を含むインクジェット記録用水性インクであって、

該多価アルコールが、ポリグリセリン及び下記一般式 (3) で示される化合物から選ばれることを特徴とするインクジェット記録用水性インク。

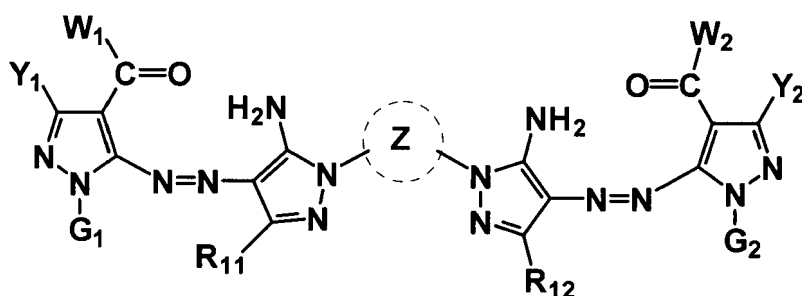
A：下記一般式 (1) で表されるアゾ顔料、その互変異性体、それらの塩又は水和物

B：下記一般式 (I) で表される疎水性構造単位 (a) と、親水性構造単位 (b) とを含むビニルポリマー

【化 1】

10

一般式 (1)：

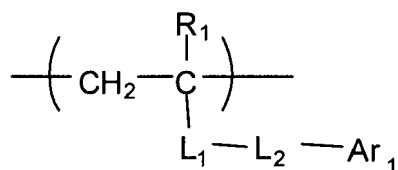


20

(一般式 (1) 中、Z は 5 又は 6 員のヘテロ環を表し、Y₁、Y₂、R₁₁、R₁₂ は、それぞれ独立に水素原子又は置換基を表し、G₁、G₂ は、それぞれ独立に水素原子、アルキル基、アラルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基又はヘテロ環基を表し、W₁、W₂ はそれぞれ独立にアルコキシ基、アミノ基、アルキル基又はアリール基を表す。)

【化 2】

一般式 (I)：

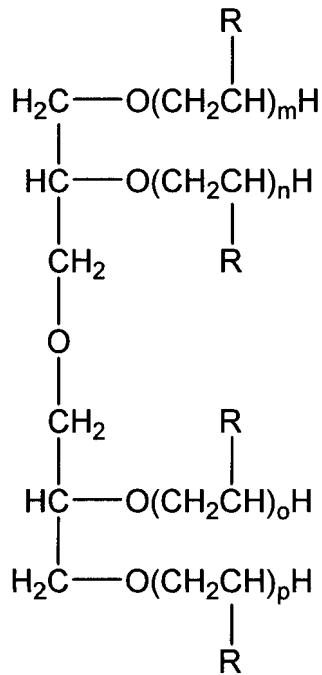


30

(一般式 (I) 中、R₁ は水素原子、メチル基又はハロゲン原子を表し、L₁ は -COO-、-OCO-、-CONR₂-、-O- 又はフェニレン基を表し、R₂ は水素原子又はアルキル基を表す。L₂ は単結合又は 2 価の連結基を表す。Ar₁ は芳香環から誘導される 1 価の基を表す。)

【化 3】

一般式 (3) :



10

20

(一般式 (3) 中、R は、それぞれ独立に、水素原子又は炭素数 1 ～ 5 のアルキル基を示し、m、n、o 及び p は、いずれも整数であり、かつ、m + n + o + p は 0 ～ 200 である。)

【請求項 2】

一般式 (1) 中、W₁、W₂ が、それぞれ独立に総炭素数 1 ～ 3 のアルコキシ基、アミノ基、又は総炭素数 1 ～ 3 のアルキルアミノ基であることを特徴とする請求項 1 に記載のインクジェット記録用水性インク。

【請求項 3】

30

一般式 (1) 中、G₁、G₂ が、それぞれ独立に総炭素数 1 ～ 3 のアルキル基であることを特徴とする請求項 1 又は 2 に記載のインクジェット記録用水性インク。

【請求項 4】

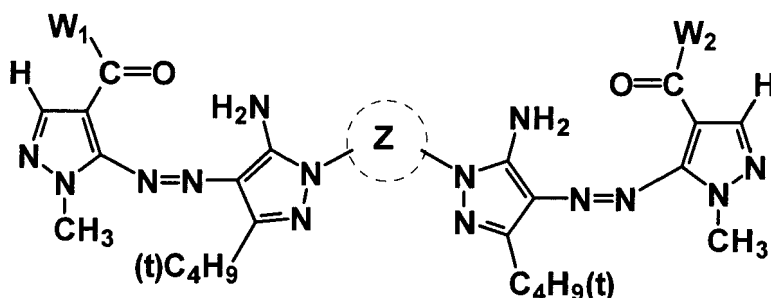
一般式 (1) 中、Z が、6 員含窒素ヘテロ環であることを特徴とする請求項 1 ～ 3 のいずれか 1 項に記載のインクジェット記録用水性インク。

【請求項 5】

一般式 (1) で表されるアゾ顔料が、下記一般式 (10) で表されることを特徴とする請求項 1 ～ 4 のいずれか 1 項に記載のインクジェット記録用水性インク。

【化 4】

一般式 (10) :



40

50

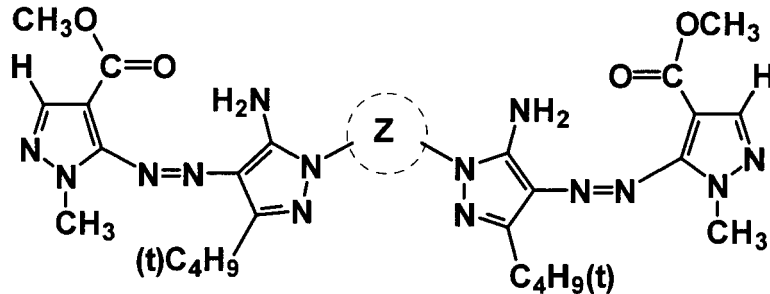
(一般式(10)中、Zは5又は6員の含窒素ヘテロ環を表し、W₁、W₂はそれぞれ独立にアルコキシ基、アミノ基、アルキル基又はアリアル基を表す。)

【請求項6】

一般式(10)で表されるアゾ顔料が、下記一般式(11)で表されることを特徴とする請求項5に記載のインクジェット記録用水性インク。

【化5】

一般式(11)：



10

(一般式(11)中、Zは6員含窒素ヘテロ環を表す。)

【請求項7】

前記ビニルポリマーが、更に、アクリル酸又はメタクリル酸の、アルキルエステルに由来する疎水性構造単位(a2)を含むことを特徴とする請求項1～6のいずれか1項に記載のインクジェット記録用水性インク。

20

【請求項8】

前記疎水性構造単位(a)がフェノキシエチル(メタ)アクリレートに由来の構造単位及びベンジル(メタ)アクリレートに由来の構造単位より選択される少なくとも一つを総量でビニルポリマー全質量に対して20質量%以上含み、前記親水性構造単位(b)がアクリル酸及びメタクリル酸に由来の構造単位より選択される少なくとも一つを総量でビニルポリマー全質量に対して30質量%以下含むことを特徴とする請求項1～7のいずれか1項に記載のインクジェット記録用水性インク。

30

【請求項9】

前記疎水性構造単位(a)が、フェノキシエチル(メタ)アクリレートに由来の構造単位を総量でビニルポリマー全質量に対して20質量%以上含むことを特徴とする請求項1～8のいずれか1項に記載のインクジェット記録用水性インク。

【請求項10】

前記アゾ顔料が、ソルトミリングによって後処理された顔料であることを特徴とする請求項1～9のいずれか1項に記載のインクジェット記録用水性インク。

【請求項11】

サーマルインクジェット記録用であることを特徴とする請求項1～10のいずれか1項に記載のインクジェット記録用水性インク。

40

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、インクジェットプリンターに使用されるインクジェット記録用水性インクに係り、より詳細には、インク自体の加温保存安定性に優れ、インクジェットプリンターのヘッドにおけるコゲーション防止及びメンテナンス性に優れ、形成された画像の耐擦性及び耐光性に優れる、新規なアゾ顔料を含むインクジェット記録用水性インクに関する。

【背景技術】

【0002】

インクジェット用被記録媒体として様々な媒体が使用されてきており、インクジェット

50

専用紙のみならず、市販の普通紙、上質紙やコート紙やアート紙などの印刷媒体でも高品位の画質が求められている。普通紙や印刷媒体で耐水性や耐光性等の堅牢性を与えるインク色材として顔料が好ましく、コストの観点も含めて水性顔料インクでの検討が種々行われている。その中で、インクジェット記録用のイエロー顔料としてアゾ系顔料が好ましく使用されている。

しかし、長期間あるいは高温で経時されたインクにおいて濃度ムラ及び筋ムラが生じることが判明した。

インクジェット記録用水系インクとして、C. I. ピグメントイエロー 74 とアニオン性基含有有機高分子化合物を含有する水性顔料分散体を有するインクジェット記録用水分散体が開示されている（例えば、特許文献 1 参照）。具体的には、顔料として C. I. ピグメントイエロー 74 と、分散剤としてメタクリル酸 n-ブチルとアクリル酸 n-ブチルとメタクリル酸 2-ヒドロキシエチルとメタクリル酸及びスチレンとの共重合体とを用いることで、分散性と分散安定性及び鮮明な画像を形成することができるとされている。

また、アゾ基に結合した炭素原子に隣接する炭素原子に、分子内水素結合を形成可能なカルボニル基で置換したヘテロ環を有するアゾ顔料に、特定の構造を有するビニルポリマーを用いて着色粒子を形成することにより、長期間保存後あるいは高温に曝された後であっても、吐出精度に優れ、濃度ムラ及び筋ムラの発生を抑制することが可能なインクジェット記録用水系インクが開示されている（特許文献 2 参照）。

【0003】

また、インクジェットプリンターの方式については、小型の家庭用プリンターの主流となっているオンデマンド型においてピエゾタイプやサーマルタイプなどの方式が知られている。そのなかでも熱エネルギーを作用させて液滴を形成し記録を行うサーマルタイプのものは、他方式のプリンターと比べると、低コストで高速印刷、高解像度など多くの利点があるため、多くの需要が存在している。

このサーマルインクジェットプリンターに好適に用いられるインクとして、顔料と多価アルコール系化合物を含むインク組成物が提案されている。該インク組成物は、熱が急激に加えられても安定した分散性を有し、画像抜け、画像むらのない良好な画質が得られ、各種の記録紙に対して定着性が良好で、画像の乾燥が速いという効果を有する（特許文献 3 参照）。

【先行技術文献】

【特許文献】

【0004】

【特許文献 1】特開 2000-239594 号公報

【特許文献 2】特開 2010-77400 号公報

【特許文献 3】特開平 10-168373 号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

しかしながら、特許文献 1 に記載の顔料水分散体を用いて構成したインクジェット記録用水系インクは、長期間保存あるいは高温で経時された後に使用すると、濃度ムラ及び筋ムラの点（加温保存安定性）で満足できるレベルでないことが判明した。

【0006】

一方、サーマルインクジェットプリンターに用いられるインクにおける問題点として、コゲーションと呼ばれる現象が知られている。これはプリンターヘッドの抵抗素子において、数十万回、数百万回にも及ぶ反復加熱によってインクが分解されることによって、抵抗素子の表面が汚損され、ヒーター表面にこれらの成分が付着してコゲを生ずるという現象であり、これに起因して、プリンターヘッドの不吐出が起り易くなる。したがって、コゲーションの抑制はインクジェット記録用水系インク、特にサーマルインクジェット記録用のインクでは重要である。しかし特許文献 1 や 2 に記載のインクでは、コゲーションの抑制についての対策がなされていない。

【0007】

またインクジェットヘッド等にはその使用状況に応じて、インクを構成する成分が付着し、これによりインクの吐出性が低下する場合もある。その場合には付着したインク成分を除去するメンテナンスを行う必要があるので、付着した場合のインク成分の除去性が良好であること、すなわちメンテナンス性に優れることがインクジェット記録用水性インクには求められる。しかし特許文献1～3に記載のインクでは、メンテナンス性についての対策がなされていない。

更に、インクジェット記録用水性インクでは、インクによって形成された画像の耐擦性や耐光性が良好であることが求められるが、それらについても特許文献1～3に記載のインクは課題を残している。

10

【0008】

本発明はインクジェット記録用水性インクにおける上記課題に着目してなされたものであって、その目的は、コゲーション防止、インクの加温保存安定性、メンテナンス性に優れ、印字においては、記録媒体の非記録部に傷が付く程の強い圧力を加えて爪で引っ掻いた場合でも色材が殆ど削れ落ちない画像の耐擦性と耐光性を実現できるインクジェット記録用水系顔料インクの提供することにある。

【課題を解決するための手段】

【0009】

本発明の発明者等は、上記目的を達成するため鋭意検討を重ねた結果、特定の構造を有するアゾ顔料と特定の構造を有するビニルポリマーを含む着色剤、特定の多価アルコール、及びアセチレングリコール系界面活性剤を用いることにより、コゲーション防止、保存安定性、メンテナンス性、画像の耐擦性と耐光性に優れたインクジェット記録用水性インクを得られることを見出し、本発明を完成するに至った。

20

即ち、以下の手段により本発明の目的は達成される。

【0010】

[1]

A及びBを含有する着色剤、多価アルコール及びアセチレングリコール系界面活性剤を含むインクジェット記録用水性インクであって、

該多価アルコールが、ポリグリセリン及び下記一般式(3)で示される化合物から選ばれることを特徴とするインクジェット記録用水性インク。

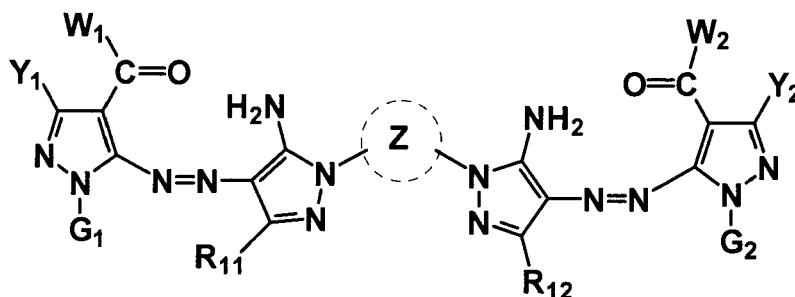
30

A：下記一般式(1)で表されるアゾ顔料、その互変異性体、それらの塩又は水和物

B：下記一般式(I)で表される疎水性構造単位(a)と、親水性構造単位(b)とを含むビニルポリマー

【化1】

一般式(1)：



40

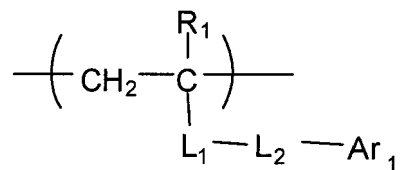
(一般式(1)中、Zは5又は6員のヘテロ環を表し、Y₁、Y₂、R₁₁、R₁₂は、それぞれ独立に水素原子又は置換基を表し、G₁、G₂は、それぞれ独立に水素原子、アルキル基、アラルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基又はヘテロ環基を表し、W₁、W₂はそれぞれ独立にアルコキシ基、アミノ基、アルキル基又はアリール基を

50

表す。)

【化 2】

一般式 (I) :

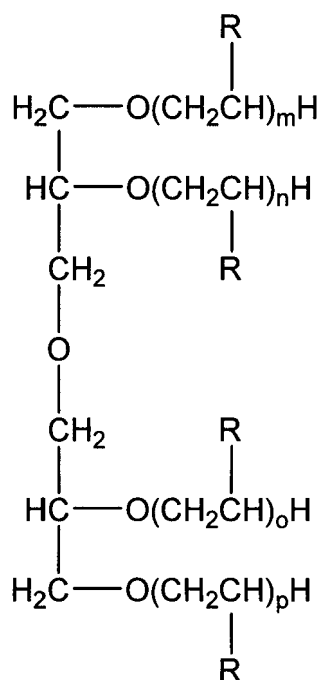


10

(一般式 (I) 中、 R_1 は水素原子、メチル基又はハロゲン原子を表し、 L_1 は $-\text{COO}-$ 、 $-\text{OCO}-$ 、 $-\text{CONR}_2-$ 、 $-\text{O}-$ 又はフェニレン基を表し、 R_2 は水素原子又はアルキル基を表す。 L_2 は単結合又は 2 価の連結基を表す。 Ar_1 は芳香環から誘導される 1 価の基を表す。)

【化 3】

一般式 (3) :



20

30

(一般式 (3) 中、 R は、それぞれ独立に、水素原子又は炭素数 1 ~ 5 のアルキル基を示し、 m 、 n 、 o 及び p は、いずれも整数であり、かつ、 $m + n + o + p$ は 0 ~ 200 である。)

[2]

40

一般式 (1) 中、 W_1 、 W_2 が、それぞれ独立に総炭素数 1 ~ 3 のアルコキシ基、アミノ基、又は総炭素数 1 ~ 3 のアルキルアミノ基であることを特徴とする上記 [1] に記載のインクジェット記録用水性インク。

[3]

一般式 (1) 中、 G_1 、 G_2 が、それぞれ独立に総炭素数 1 ~ 3 のアルキル基であることを特徴とする上記 [1] 又は [2] に記載のインクジェット記録用水性インク。

[4]

一般式 (1) 中、 Z が、6 員含窒素ヘテロ環であることを特徴とする上記 [1] ~ [3] のいずれか 1 項に記載のインクジェット記録用水性インク。

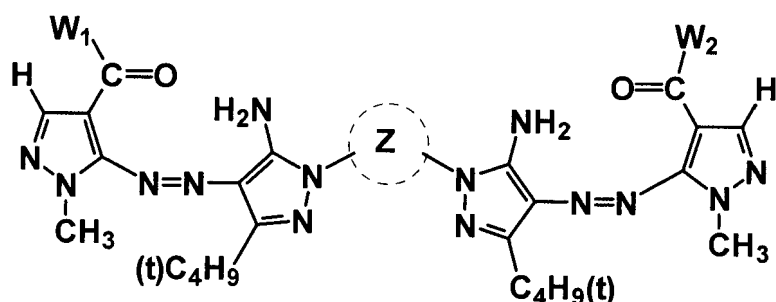
[5]

50

一般式（１）で表されるアゾ顔料が、下記一般式（１０）で表されることを特徴とする上記〔１〕～〔４〕のいずれか１項に記載のインクジェット記録用水性インク。

【化４】

一般式（１０）：



10

（一般式（１０）中、Ｚは５又は６員の含窒素ヘテロ環を表し、 W_1 、 W_2 はそれぞれ独立にアルコキシ基、アミノ基、アルキル基又はアリール基を表す。）

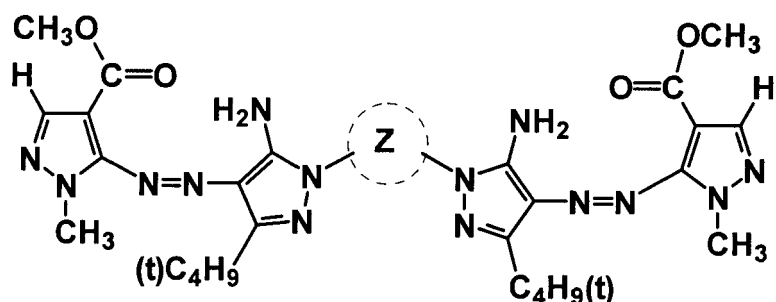
〔６〕

一般式（１０）で表されるアゾ顔料が、下記一般式（１１）で表されることを特徴とする上記〔５〕に記載のインクジェット記録用水性インク。

20

【化５】

一般式（１１）：



30

（一般式（１１）中、Ｚは６員含窒素ヘテロ環を表す。）

〔７〕

前記ビニルポリマーが、更に、アクリル酸又はメタクリル酸の、アルキルエステルに由来する疎水性構造単位（ａ２）を含むことを特徴とする上記〔１〕～〔６〕のいずれか１項に記載のインクジェット記録用水性インク。

〔８〕

前記疎水性構造単位（ａ）がフェノキシエチル（メタ）アクリレートに由来の構造単位及びベンジル（メタ）アクリレートに由来の構造単位より選択される少なくとも一つを総量でビニルポリマー全質量に対して２０質量％以上含み、前記親水性構造単位（ｂ）がアクリル酸及びメタクリル酸に由来の構造単位より選択される少なくとも一つを総量でビニルポリマー全質量に対して３０質量％以下含むことを特徴とする上記〔１〕～〔７〕のいずれか１項に記載のインクジェット記録用水性インク。

40

〔９〕

前記疎水性構造単位（ａ）が、フェノキシエチル（メタ）アクリレートに由来の構造単位を総量でビニルポリマー全質量に対して２０質量％以上含むことを特徴とする上記〔１〕～〔８〕のいずれか１項に記載のインクジェット記録用水性インク。

〔１０〕

前記アゾ顔料が、ソルトミリングによって後処理された顔料であることを特徴とする上

50

記〔１〕～〔９〕のいずれか１項に記載のインクジェット記録用水性インク。

〔１１〕

サーマルインクジェット記録用であることを特徴とする上記〔１〕～〔１０〕のいずれか１項に記載のインクジェット記録用水性インク。

【発明の効果】

【００１１】

本発明によれば、長期間保存後又は高温に晒された後であっても、濃度ムラ及び筋ムラの発生が抑制されるよう加温保存安定性に優れ、また、コゲーション防止、メンテナンス性、画像の耐擦性と耐光性にも優れたインクジェット記録用水性インクを提供することができる。

10

【発明を実施するための形態】

【００１２】

以下、本発明について詳細に説明する。

本発明のインクジェット記録用水性インクは、Ａ及びＢを含有する着色剤、多価アルコール及びアセチレングリコール系界面活性剤を含み、該多価アルコールは、ポリグリセリン及び下記一般式（３）で示される化合物から選ばれる。

Ａ：下記一般式（１）で表されるアゾ顔料、その互変異性体、それらの塩又は水和物

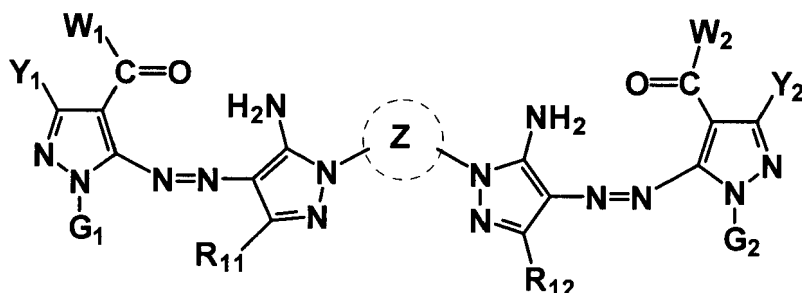
Ｂ：下記一般式（Ｉ）で表される疎水性構造単位（ａ）と、親水性構造単位（ｂ）とを含むビニルポリマー

【００１３】

【化６】

20

一般式（１）：



30

【００１４】

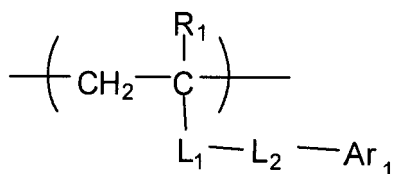
一般式（１）中、Ｚは５又は６員のヘテロ環を表し、Ｙ_１、Ｙ_２、Ｒ_{１１}、Ｒ_{１２}は、それぞれ独立に水素原子又は置換基を表し、Ｇ_１、Ｇ_２は、それぞれ独立に水素原子、アルキル基、アラルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基又はヘテロ環基を表し、Ｗ_１、Ｗ_２はそれぞれ独立にアルコキシ基、アミノ基、アルキル基又はアリール基を表す。

【００１５】

【化７】

40

一般式（Ｉ）：



【００１６】

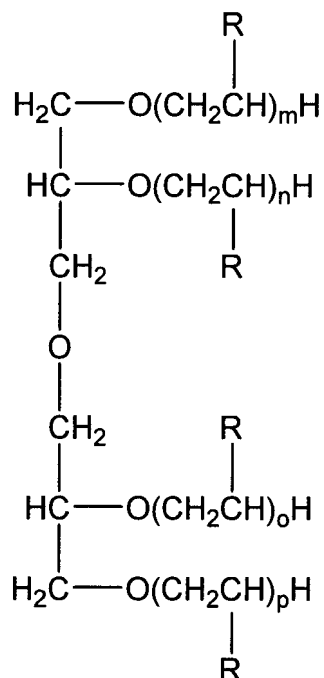
50

一般式（１）中、 R_1 は水素原子、メチル基又はハロゲン原子を表し、 L_1 は $-COO-$ 、 $-OCO-$ 、 $-CONR_2-$ 、 $-O-$ 又はフェニレン基を表し、 R_2 は水素原子又はアルキル基を表す。 L_2 は単結合又は２価の連結基を表す。 Ar_1 は芳香環から誘導される１価の基を表す。

【００１７】

【化８】

一般式（３）：



10

20

【００１８】

一般式（３）中、 R は、それぞれ独立に、水素原子又は炭素数１～５のアルキル基を示し、 m 、 n 、 o 及び p は、いずれも整数であり、かつ、 $m+n+o+p$ は ０～２００である。

30

【００１９】

上記構成によれば、理由は明確ではないが発熱素子表面への堆積が抑制されるため、コゲーション防止及びメンテナンス性に優れる。また、分散性に優れていて、凝集が抑制されるため、インクの加温保存安定性に優れる。更に、ポリマーで保護されるため、画像の耐擦性と耐光性に優れる。

【００２０】

<アゾ顔料>

本発明に用いられるアゾ顔料は、一般式（１）で表される。

まず、下記一般式（１）で表されるアゾ顔料について説明する。

40

一般式（１）で表される化合物は、その特異的な構造により色素分子の分子内・分子間相互作用を形成しやすく、水又は有機溶媒等に対する溶解性が低く、好ましい形態のアゾ顔料とすることができる。またその平均一次粒子径は １０～１００ nm であることが好ましく、より好ましくは ２５～９０ nm である。

顔料は、水や有機溶媒等に分子分散状態で溶解させて使用する染料とは異なり、媒体中に分子集合体等の粒子として微細に分散させて用いるものである。

【００２１】

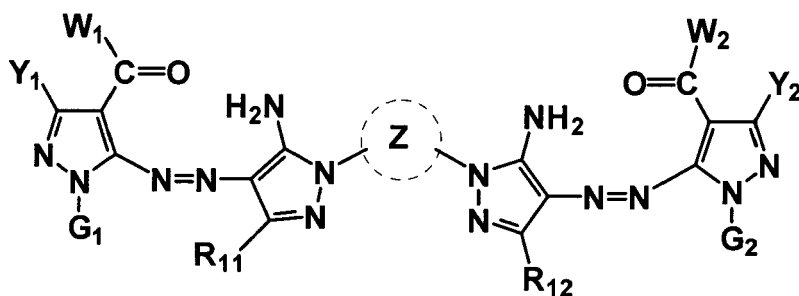
以下、一般式（１）により表されるアゾ顔料、その互変異性体、それらの塩又は水和物について詳細に説明する。

【００２２】

50

【化 9】

一般式 (1) :



10

【0023】

W_1 、 W_2 はそれぞれ独立にアルコキシ基、アミノ基、アルキル基又はアリアル基を表す。

W_1 、 W_2 で表されるアルコキシ基としては、好ましくは、炭素数 1 から 30 の置換若しくは無置換のアルコキシ基が挙げられ、その中でも特に炭素数 1 から 8 の置換若しくは無置換のアルコキシ基が好ましく、更に炭素数 1 から 4 の置換若しくは無置換のアルコキシ基が好ましく、例えば、メトキシ基、エトキシ基、*n*-プロポキシ基、*i*-プロポキシ基、*n*-ブトキシ基、*i*-ブトキシ基、*s*-ブトキシ基、*t*-ブトキシ基、*n*-オクチルオキシ基、2-メトキシエトキシ基等が挙げられる。特に好ましくはメトキシ基である。

20

【0024】

W_1 、 W_2 で表されるアミノ基としては、アルキルアミノ基、アリアルアミノ基、ヘテロ環アミノ基を含み、好ましくは、アミノ基、炭素数 1 から 30 の置換若しくは無置換のアルキルアミノ基、炭素数 6 から 30 の置換若しくは無置換のアニリノ基が挙げられ、その中でもアミノ基、炭素数 1 から 8 の置換若しくは無置換のアルキルアミノ基、炭素数 6 から 18 の置換若しくは無置換のアニリノ基が好ましく、更にアミノ基、炭素数 1 から 4 の置換若しくは無置換のアルキルアミノ基、炭素数 6 から 12 の置換若しくは無置換のアニリノ基が好ましく、例えば、アミノ基 ($-NH_2$)、メチルアミノ基 ($-NHCH_3$)、ジメチルアミノ基 ($-N(CH_3)_2$)、アニリノ基 ($-NHPh$)、*N*-メチルアニリノ基 ($-N(CH_3)Ph$)、ジフェニルアミノ基 ($-N(Ph)_2$) 等が挙げられる。特に好ましくはアミノ基である。

30

【0025】

W_1 、 W_2 で表されるアルキル基としては、直鎖、分岐、環状の置換若しくは無置換のアルキル基が挙げられ、シクロアルキル基、ビスシクロアルキル基、更に環構造が多いトリシクロ構造なども包含するものである。以下に説明する置換基の中のアルキル基 (例えば、アルコキシ基、アルキルチオ基のアルキル基) もこのような概念のアルキル基を表す。詳細には、アルキル基としては、好ましくは、炭素数 1 から 30 のアルキル基、例えば、メチル基、エチル基、*n*-プロピル基、*i*-プロピル基、*n*-ブチル基、*i*-ブチル基、*s*-ブチル基、*t*-ブチル基、*n*-オクチル基、エイコシル基、2-クロロエチル基、2-シアノエチル基、2-エチルヘキシル基等が挙げられ、シクロアルキル基としては、好ましくは、炭素数 3 から 30 の置換又は無置換のシクロアルキル基、例えば、シクロヘキシル基、シクロペンチル基、4-*n*-ドデシルシクロヘキシル基等が挙げられ、ビスシクロアルキル基としては、好ましくは、炭素数 5 から 30 の置換若しくは無置換のビスシクロアルキル基、つまり、炭素数 5 から 30 のビスシクロアルカンから水素原子を一個取り去った一価の基、例えば、ビスシクロ [1, 2, 2] ヘプタン-2-イル基、ビスシクロ [2, 2, 2] オクタン-3-イル基等が挙げられる。

40

【0026】

W_1 、 W_2 で表されるアリアル基としては、好ましくは、炭素数 6 から 30 の置換若し

50

くは無置換のアリール基が挙げられ、その中でも、炭素数6から18の置換若しくは無置換のアリール基が好ましく、更に炭素数6から12の置換若しくは無置換のアリール基が好ましく、例えば、フェニル基、p-トリル基、ナフチル基、m-クロロフェニル基、o-ヘキサデカノイルアミノフェニル基等が挙げられる。

【0027】

好ましい W_1 、 W_2 としては、それぞれ独立にアルコキシ基、アミノ基又はアルキル基が挙げられ、中でもアルコキシ基、又はアミノ基が好ましく、総炭素数1～5のアルコキシ基、アミノ基(—NH₂基)、総炭素数1～5のアルキルアミノ基が更に好ましく、総炭素数1～3のアルコキシ基又は総炭素数1～3のアルキルアミノ基が特に好ましく、その中でもメトキシ基が最も好ましい。 W が総炭素数1～5のアルコキシ基、アミノ基、総炭素数1～5のアルキルアミノ基の場合、色素分子が分子内及び分子間で相互作用(水素結合や π - π スタッキング)を強固に形成しやすくなり、より安定な分子配列の構造(例えば3次元ネットワーク)を構成しやすくなることで、良好な色相、高い堅牢性(耐光・耐ガス・耐熱・耐水・耐薬品)の点で好ましい。

【0028】

一般式(1)において、 R_{11} 、 R_{12} はそれぞれ独立に水素原子又は置換基を表し、 R_{11} 、 R_{12} が置換基を表す場合の置換基としては、炭素数1～12の直鎖又は分岐鎖アルキル基、炭素数7～18の直鎖又は分岐鎖アラルキル基、炭素数2～12の直鎖又は分岐鎖アルケニル基、炭素数2～12の直鎖又は分岐鎖アルキニル基、炭素数3～12の直鎖又は分岐鎖シクロアルキル基、炭素数3～12の直鎖又は分岐鎖シクロアルケニル基(例えばメチル、エチル、n-プロピル、i-プロピル、n-ブチル、i-ブチル、sec-ブチル、t-ブチル、2-エチルヘキシル、2-メチルスルホニルエチル、3-フェノキシプロピル、トリフルオロメチル、シクロペンチル)、ハロゲン原子(例えば、塩素原子、臭素原子)、アリール基(例えば、フェニル、4-*t*-ブチルフェニル、2,4-ジ-*t*-アミルフェニル)、ヘテロ環基(例えば、イミダゾリル、ピラゾリル、トリアゾリル、2-フリル、2-チエニル、2-ピリミジニル、2-ベンゾチアゾリル)、シアノ基、ヒドロキシ基、ニトロ基、カルボキシ基、アミノ基、アルキルオキシ基(例えば、メトキシ、エトキシ、2-メトキシエトキシ、2-メチルスルホニルエトキシ)、アリールオキシ基(例えば、フェノキシ、2-メチルフェノキシ、4-*t*-ブチルフェノキシ、3-ニトロフェノキシ、3-*t*-ブチルオキシカルボニルフェノキシ、3-メトキシカルボニルフェニルオキシ)、アシルアミノ基(例えば、アセトアミド、ベンズアミド、4-(3-*t*-ブチル-4-ヒドロキシフェノキシ)ブタンアミド)、アルキルアミノ基(例えば、メチルアミノ、ブチルアミノ、ジエチルアミノ、メチルブチルアミノ)、アリールアミノ基(例えば、フェニルアミノ、2-クロロアニリノ)、ウレイド基(例えば、フェニルウレイド、メチルウレイド、N,N-ジブチルウレイド)、スルファモイルアミノ基(例えば、N,N-ジプロピルスルファモイルアミノ)、アルキルチオ基(例えば、メチルチオ、オクチルチオ、2-フェノキシエチルチオ)、アリールチオ基(例えば、フェニルチオ、2-ブトキシ-5-*t*-オクチルフェニルチオ、2-カルボキシフェニルチオ)、アルキルオキシカルボニルアミノ基(例えば、メトキシカルボニルアミノ)、アルキルスルホニルアミノ基及びアリールスルホニルアミノ基(例えば、メチルスルホニルアミノ、フェニルスルホニルアミノ、p-トルエンスルホニルアミノ)、カルバモイル基(例えば、N-エチルカルバモイル、N,N-ジブチルカルバモイル)、スルファモイル基(例えば、N-エチルスルファモイル、N,N-ジプロピルスルファモイル、N-フェニルスルファモイル)、スルホニル基(例えば、メチルスルホニル、オクチルスルホニル、フェニルスルホニル、p-トルエンスルホニル)、アルキルオキシカルボニル基(例えば、メトキシカルボニル、ブチルオキシカルボニル)、ヘテロ環オキシ基(例えば、1-フェニルテトラゾール-5-オキシ、2-テトラヒドロピラニルオキシ)、アゾ基(例えば、フェニルアゾ、4-メトキシフェニルアゾ、4-ピバロイルアミノフェニルアゾ、2-ヒドロキシ-4-プロパノイルフェニルアゾ)、アシルオキシ基(例えば、アセトキシ)、カルバモイルオキシ基(例えば、N-メチルカルバモイルオキシ、N-フェニルカルバモイル

10

20

30

40

50

オキシ)、シリルオキシ基(例えば、トリメチルシリルオキシ、ジブチルメチルシリルオキシ)、アリールオキシカルボニルアミノ基(例えば、フェノキシカルボニルアミノ)、イミド基(例えば、N-スクシンイミド、N-フタルイミド)、ヘテロ環チオ基(例えば、2-ベンゾチアゾリルチオ、2, 4-ジ-フェノキシ-1, 3, 5-トリアゾール-6-チオ、2-ピリジルチオ)、スルフィニル基(例えば、3-フェノキシプロピルスルフィニル)、ホスホニル基(例えば、フェノキシホスホニル、オクチルオキシホスホニル、フェニルホスホニル)、アリールオキシカルボニル基(例えば、フェノキシカルボニル)、アシル基(例えば、アセチル、3-フェニルプロパノイル、ベンゾイル)、イオン性親水性基(例えば、カルボキシ基、スルホ基、ホスホノ基及び4級アンモニウム基)が挙げられる。

10

【0029】

一般式(1)において、好ましい R_{11} 、 R_{12} はそれぞれ独立に、置換若しくは無置換の総炭素数1~8のアシルアミノ基、置換若しくは無置換の総炭素数1~12のアルキル基、置換若しくは無置換の総炭素数6~18のアリール基、又は置換若しくは無置換の総炭素数4~12のヘテロ環基であり、より好ましくは、総炭素数1~8の直鎖アルキル基又は分岐アルキル基、置換若しくは無置換の総炭素数6~18のアリール基であり、その中でも総炭素数1~8の直鎖アルキル基又は分岐アルキル基が好ましく、更に詳細にはメチル基、i-プロピル基又はt-ブチル基が好ましく、特にi-プロピル基又はt-ブチル基が好ましく、その中でもt-ブチル基が最も好ましい。

R_{11} 、 R_{12} を総炭素数の小さい(炭素数1~4)直鎖アルキル基又は分岐アルキル基にすることで、色素分子配列が立体的に制御(一定の距離・角度で配列)しやすくなる。その結果、色素分子が安定な分子内・分子間相互作用(水素結合や π - π スタッキング)を有する構造が形成されやすく、より安定な分子配列の構造(例えば3次元ネットワーク)を構成しやすくなることで、良好な色相、着色力、高い画像堅牢性(耐光・耐ガス・耐熱・耐水・耐薬品)の点で好ましい。

20

【0030】

一般式(1)において、Zは5又は6員のヘテロ環基を表し、それらは更に縮環していてもよい。Zとして好ましくは、5又は6員の置換若しくは無置換のヘテロ環基であり、より好ましくは、6員含窒素ヘテロ環基であり、特に好ましくは、炭素数3から10の6員含窒素ヘテロ環基である。

30

【0031】

前記Zで表されるヘテロ環基の例には、置換位置を限定しないで例示すると、ピリジル、ピラジニル、ピリダジニル、ピリミジニル、トリアジニル、キノリニル、イソキノリニル、キナゾリニル、シンノリニル、フタラジニル、キノキサリニル、ピロリル、インドリル、フリル、ベンゾフリル、チエニル、ベンゾチエニル、ピラゾリル、イミダゾリル、ベンズイミダゾリル、トリアゾリル、オキサゾリル、ベンズオキサゾリル、チアゾリル、ベンゾチアゾリル、イソチアゾリル、ベンズイソチアゾリル、チアジアゾリル、イソオキサゾリル、ベンズイソオキサゾリル、ピロリジニル、ペリリジニル、ペラジニル、イミダゾリジニル、チアゾリニル、スルホラニルなどが挙げられる。

【0032】

好ましいヘテロ環基の例は、ピリジル、ピリミジニル、S-トリアジニル、ピリダジニル、ピラジニル、1, 2, 4-チアジアゾリル、1, 3, 4-チアジアゾリル、イミダゾリルであり、より好ましくは、ピリジル、ピリミジニル、S-トリアジニル、ピリダジニル、ピラジニルであり、特に色相、着色力、画像堅牢性の点から、ピリミジニル、S-トリアジニルが好ましく、更に4, 6-に置換基を有するピリミジニル、2位に炭素数1~4のアルコキシ基を有するS-トリアジニルが色相と画像堅牢性の点から好ましく、その中でも特に4, 6-に置換基を有するピリミジニルが良好な画像の光堅牢性向上の点から最も好ましい。

40

【0033】

Zをピリミジニル基、S-トリアジニル基にすることでビス型アゾ色素がアミノ基、含

50

窒素6員ヘテロ環とで分子内水素結合を形成しやすくなり、色素分子配列が立体的に制御（一定の距離・角度、平面性で配列）しやすくなる。その結果、色素分子が安定な分子内・分子間相互作用（水素結合や $\pi-\pi$ スタッキング）を有する構造が形成されやすく、より安定な分子配列の構造（例えば3次元ネットワーク）を構成しやすくなることで、良好な色相、着色力、高い画像堅牢性（耐光・耐ガス・耐熱・耐水・耐薬品）の点で好ましい。

【0034】

G_1 、 G_2 は、それぞれ独立に、水素原子、アルキル基、アラルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基又はヘテロ環基を表し、特に好ましくは、水素原子、メチル基、エチル基、 n -プロピル基、 i -プロピル基、 n -ブチル基、 i -ブチル基、 sec -ブチル基、 $tert$ -ブチル基、シクロプロピル基、ベンジル基、2-フェネチル基、ビニル基、アリル基、エチニル基、プロパルギル基、フェニル基、 p -トリル基、ナフチル基、ピリジル基、ピリミジニル基、ピラジニル基が好ましく、更に水素原子、メチル基、フェニル基、ピリジル基、ピリミジニル基、ピラジニル基が好ましく、その中でも総炭素数1~8の直鎖アルキル基又は分岐アルキル基、2-ピリジル基、2,6-ピリミジニル基、2,5-ピラジニル基が好ましく、総炭素数1~3のアルキル基がより好ましい。更に色相と画像堅牢性の観点から、水素原子、メチル基が好ましく、その中でも色相と光堅牢性向上の点からメチル基が特に好ましい。

【0035】

Y_1 、 Y_2 が置換基を表す場合の該置換基の例は、ハロゲン原子、アルキル基、アラルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基、ヘテロ環基、シアノ基、ヒドロキシ基、ニトロ基、アルコキシ基、アリールオキシ基、シリルオキシ基、ヘテロ環オキシ基、アシルオキシ基、カルバモイルオキシ基、アルコキシカルボニルオキシ基、アリールオキシカルボニルオキシ基、アミノ基、アシルアミノ基、アミノカルボニルアミノ基、アルコキシカルボニルアミノ基、アリールオキシカルボニルアミノ基、スルファモイルアミノ基、アルキル又はアリールスルホニルアミノ基、メルカプト基、アルキルチオ基、アリールチオ基、ヘテロ環チオ基、スルファモイル基、アルキル又はアリールスルフィニル基、アルキル又はアリールスルホニル基、アシル基、アリールオキシカルボニル基、アルコキシカルボニル基、カルバモイル基、アリール又はヘテロ環アゾ基、イミド基、ホスフィノ基、ホスフィニル基、ホスフィニルオキシ基、ホスフィニルアミノ基、シリル基が例として挙げられる。 Y の例として特に好ましくは、水素原子、アルキル基（例えば、メチル基）アリール基（例えば、フェニル基）、ヘテロ環基（例えば2-ピリジル基）、アルキルチオ基（例えば、メチルチオ基）であり、更に水素原子、総炭素数1~4の直鎖又は分岐アルキル基、フェニル基、メチルチオ基である。更に色相と画像堅牢性の観点から、水素原子、メチル基が好ましく、その中でも色相と光堅牢性向上の点から水素原子が特に好ましい。

【0036】

G_1 、 G_2 、 Y_1 、 Y_2 、 W_1 、 W_2 、 R_{11} 、 R_{12} 、 Z が、更に置換基を有する場合の置換基としては、下記の置換基（以下「置換基J」と称する場合がある）を挙げることができる。

【0037】

（置換基J）

例えば、ハロゲン原子、アルキル基、アラルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基、ヘテロ環基、シアノ基、ヒドロキシ基、ニトロ基、アルコキシ基、アリールオキシ基、シリルオキシ基、ヘテロ環オキシ基、アシルオキシ基、カルバモイルオキシ基、アルコキシカルボニルオキシ基、アリールオキシカルボニルオキシ基、アミノ基、アシルアミノ基、アミノカルボニルアミノ基、アルコキシカルボニルアミノ基、アリールオキシカルボニルアミノ基、スルファモイルアミノ基、アルキル又はアリールスルホニルアミノ基、メルカプト基、アルキルチオ基、アリールチオ基、ヘテロ環チオ基、スルファモイル基、アルキル又はアリールスルフィニル基、アルキル又はアリールスルホニル基、アシ

ル基、アリールオキシカルボニル基、アルコキシカルボニル基、カルバモイル基、アリール又はヘテロ環アゾ基、イミド基、ホスフィノ基、ホスフィニル基、ホスフィニルオキシ基、ホスフィニルアミノ基、シリル基が例として挙げられる。

【0038】

置換基Jの各基について更に説明する。

ハロゲン原子としては、例えば、フッ素原子、塩素原子、臭素原子、又はヨウ素原子が挙げられる。

【0039】

アルキル基としては、直鎖、分岐、環状の置換若しくは無置換のアルキル基が挙げられ、シクロアルキル基、ビスシクロアルキル基、更に環構造が多いトリシクロ構造なども包含するものである。以下に説明する置換基の中のアルキル基（例えば、アルコキシ基、アルキルチオ基のアルキル基）もこのような概念のアルキル基を表す。詳細には、アルキル基としては、好ましくは、炭素数1から30のアルキル基、例えば、メチル基、エチル基、*n*-プロピル基、イソプロピル基、*t*-ブチル基、*n*-オクチル基、エイコシル基、2-クロロエチル基、2-シアノエチル基、2-エチルヘキシル基等が挙げられ、シクロアルキル基としては、好ましくは、炭素数3から30の置換又は無置換のシクロアルキル基、例えば、シクロヘキシル基、シクロペンチル基、4-*n*-ドデシルシクロヘキシル基等が挙げられ、ビスシクロアルキル基としては、好ましくは、炭素数5から30の置換若しくは無置換のビスシクロアルキル基、つまり、炭素数5から30のビスシクロアルカンから水素原子を一個取り去った一価の基、例えば、ビスシクロ[1, 2, 2]ヘプタン-2-イル基、ビスシクロ[2, 2, 2]オクタン-3-イル基等が挙げられる。

【0040】

アラルキル基としては、置換若しくは無置換のアラルキル基が挙げられ、置換若しくは無置換のアラルキル基としては、炭素原子数が7~30のアラルキル基が好ましい。例えばベンジル基及び2-フェネチル基を挙げられる。

【0041】

アルケニル基としては、直鎖、分岐、環状の置換若しくは無置換のアルケニル基が挙げられ、シクロアルケニル基、ビスシクロアルケニル基を包含する。詳細には、アルケニル基としては、好ましくは、炭素数2から30の置換又は無置換のアルケニル基、例えば、ビニル基、アリル基、プレニル基、ゲラニル基、オレイル基等が挙げられ、シクロアルケニル基としては、好ましくは、炭素数3から30の置換若しくは無置換のシクロアルケニル基、つまり、炭素数3から30のシクロアルケンの水素原子を一個取り去った一価の基、例えば、2-シクロペンテン-1-イル基、2-シクロヘキセン-1-イル基等が挙げられ、ビスシクロアルケニル基としては、置換若しくは無置換のビスシクロアルケニル基、好ましくは、炭素数5から30の置換若しくは無置換のビスシクロアルケニル基、つまり二重結合を一個持つビスシクロアルケンの水素原子を一個取り去った一価の基、例えば、ビスシクロ[2, 2, 1]ヘプト-2-エン-1-イル基、ビスシクロ[2, 2, 2]オクト-2-エン-4-イル基等が挙げられる。

【0042】

アルキニル基としては、好ましくは、炭素数2から30の置換又は無置換のアルキニル基、例えば、エチニル基、プロパルギル基、トリメチルシリルエチニル基等が挙げられる。

【0043】

アリール基としては、好ましくは、炭素数6から30の置換若しくは無置換のアリール基、例えば、フェニル基、*p*-トリル基、ナフチル基、*m*-クロロフェニル基、*o*-ヘキサデカノイルアミノフェニル基等が挙げられる。

【0044】

ヘテロ環基としては、好ましくは、5又は6員の置換若しくは無置換の芳香族若しくは非芳香族のヘテロ環化合物から一個の水素原子を取り除いた一価の基であり、更に好ましくは、炭素数3から30の5又は6員の芳香族のヘテロ環基、例えば、2-フリル基、2

ーチエニル基、2-ピリミジニル基、2-ベンゾチアゾリル基等が挙げられる。

【0045】

アルコキシ基としては、好ましくは、炭素数1から30の置換若しくは無置換のアルコキシ基、例えば、メトキシ基、エトキシ基、イソプロポキシ基、*t*-ブトキシ基、*n*-オクチルオキシ基、2-メトキシエトキシ基等が挙げられる。

【0046】

アリールオキシ基としては、好ましくは、炭素数6から30の置換若しくは無置換のアリールオキシ基、例えば、フェノキシ基、2-メチルフェノキシ基、4-*t*-ブチルフェノキシ基、3-ニトロフェノキシ基、2-テトラデカノイルアミノフェノキシ基等が挙げられる。

10

【0047】

シリルオキシ基としては、好ましくは、炭素数0から20の置換若しくは無置換のシリルオキシ基、例えば、トリメチルシリルオキシ基、ジフェニルメチルシリルオキシ基等が挙げられる。

【0048】

ヘテロ環オキシ基としては、好ましくは、炭素数2から30の置換若しくは無置換のヘテロ環オキシ基、例えば、1-フェニルテトラゾール-5-オキシ基、2-テトラヒドロピラニルオキシ基等が挙げられる。

【0049】

アシルオキシ基としては、好ましくは、ホルミルオキシ基、炭素数2から30の置換若しくは無置換のアルキルカルボニルオキシ基、炭素数6から30の置換若しくは無置換のアリールカルボニルオキシ基、例えば、アセチルオキシ基、ピバロイルオキシ基、ステアロイルオキシ基、ベンゾイルオキシ基、*p*-メトキシフェニルカルボニルオキシ基等が挙げられる。

20

【0050】

カルバモイルオキシ基としては、好ましくは、炭素数1から30の置換若しくは無置換のカルバモイルオキシ基、例えば、*N*，*N*-ジメチルカルバモイルオキシ基、*N*，*N*-ジエチルカルバモイルオキシ基、モルホリノカルボニルオキシ基、*N*，*N*-ジー-*n*-オクチルアミノカルボニルオキシ基、*N*-*n*-オクチルカルバモイルオキシ基等が挙げられる。

【0051】

アルコキシカルボニルオキシ基としては、好ましくは、炭素数2から30の置換若しくは無置換アルコキシカルボニルオキシ基、例えば、メトキシカルボニルオキシ基、エトキシカルボニルオキシ基、*t*-ブトキシカルボニルオキシ基、*n*-オクチルカルボニルオキシ基等が挙げられる。

30

【0052】

アリールオキシカルボニルオキシ基としては、好ましくは、炭素数7から30の置換若しくは無置換のアリールオキシカルボニルオキシ基、例えば、フェノキシカルボニルオキシ基、*p*-メトキシフェノキシカルボニルオキシ基、*p*-*n*-ヘキサデシルオキシフェノキシカルボニルオキシ基等が挙げられる。

【0053】

アミノ基としては、アルキルアミノ基、アリールアミノ基、ヘテロ環アミノ基を含み、好ましくは、アミノ基、炭素数1から30の置換若しくは無置換のアルキルアミノ基、炭素数6から30の置換若しくは無置換のアニリノ基、例えば、メチルアミノ基、ジメチルアミノ基、アニリノ基、*N*-メチル-アニリノ基、ジフェニルアミノ基等が挙げられる。

40

【0054】

アシルアミノ基としては、好ましくは、ホルミルアミノ基、炭素数1から30の置換若しくは無置換のアルキルカルボニルアミノ基、炭素数6から30の置換若しくは無置換のアリールカルボニルアミノ基、例えば、アセチルアミノ基、ピバロイルアミノ基、ラウロイルアミノ基、ベンゾイルアミノ基、3，4，5-トリ-*n*-オクチルオキシフェニルカルボニルアミノ基等が挙げられる。

50

【0055】

アミノカルボニルアミノ基としては、好ましくは、炭素数1から30の置換若しくは無置換のアミノカルボニルアミノ基、例えば、カルバモイルアミノ基、N，N－ジメチルアミノカルボニルアミノ基、N，N－ジエチルアミノカルボニルアミノ基、モルホリノカルボニルアミノ基等が挙げられる。

【0056】

アルコキシカルボニルアミノ基としては、好ましくは、炭素数2から30の置換若しくは無置換アルコキシカルボニルアミノ基、例えば、メトキシカルボニルアミノ基、エトキシカルボニルアミノ基、t－ブトキシカルボニルアミノ基、n－オクタデシルオキシカルボニルアミノ基、N－メチル－メトキシカルボニルアミノ基等が挙げられる。

10

【0057】

アリールオキシカルボニルアミノ基としては、好ましくは、炭素数7から30の置換若しくは無置換のアリールオキシカルボニルアミノ基、例えば、フェノキシカルボニルアミノ基、p－クロロフェノキシカルボニルアミノ基、m－n－オクチルオキシフェノキシカルボニルアミノ基等が挙げられる。

【0058】

スルファモイルアミノ基としては、好ましくは、炭素数0から30の置換若しくは無置換のスルファモイルアミノ基、例えば、スルファモイルアミノ基、N，N－ジメチルアミノスルホニルアミノ基、N－n－オクチルアミノスルホニルアミノ基等が挙げられる。

【0059】

アルキル又はアリールスルホニルアミノ基としては、好ましくは、炭素数1から30の置換若しくは無置換のアルキルスルホニルアミノ基、炭素数6から30の置換若しくは無置換のアリールスルホニルアミノ基、例えば、メチルスルホニルアミノ基、ブチルスルホニルアミノ基、フェニルスルホニルアミノ基、2，3，5－トリクロロフェニルスルホニルアミノ基、p－メチルフェニルスルホニルアミノ基等が挙げられる。

20

アルキルチオ基としては、好ましくは、炭素数1から30の置換若しくは無置換のアルキルチオ基、例えば、メチルチオ基、エチルチオ基、n－ヘキサデシルチオ基等が挙げられる。

【0060】

アリールチオ基としては、好ましくは、炭素数6から30の置換若しくは無置換のアリールチオ基、例えば、フェニルチオ基、p－クロロフェニルチオ基、m－メトキシフェニルチオ基等が挙げられる。

30

【0061】

ヘテロ環チオ基としては、好ましくは、炭素数2から30の置換又は無置換のヘテロ環チオ基、例えば、2－ベンゾチアゾリルチオ基、1－フェニルテトラゾール－5－イルチオ基等が挙げられる。

【0062】

スルファモイル基としては、好ましくは、炭素数0から30の置換若しくは無置換のスルファモイル基、例えば、N－エチルスルファモイル基、N－（3－ドデシルオキシプロピル）スルファモイル基、N，N－ジメチルスルファモイル基、N－アセチルスルファモイル基、N－ベンゾイルスルファモイル基、N－（N’－フェニルカルバモイル）スルファモイル基等が挙げられる。

40

【0063】

アルキル又はアリールスルフィニル基としては、好ましくは、炭素数1から30の置換又は無置換のアルキルスルフィニル基、6から30の置換又は無置換のアリールスルフィニル基、例えば、メチルスルフィニル基、エチルスルフィニル基、フェニルスルフィニル基、p－メチルフェニルスルフィニル基等が挙げられる。

【0064】

アルキル又はアリールスルホニル基としては、好ましくは、炭素数1から30の置換又は無置換のアルキルスルホニル基、6から30の置換又は無置換のアリールスルホニル基

50

、例えば、メチルスルホニル基、エチルスルホニル基、フェニルスルホニル基、p-メチルフェニルスルホニル基等が挙げられる。

【0065】

アシル基としては、好ましくは、ホルミル基、炭素数2から30の置換又は無置換のアシルカルボニル基、炭素数7から30の置換若しくは無置換のアリールカルボニル基、炭素数2から30の置換若しくは無置換の炭素原子でカルボニル基と結合しているヘテロ環カルボニル基、例えば、アセチル基、ピバロイル基、2-クロロアセチル基、ステアロイル基、ベンゾイル基、p-n-オクチルオキシフェニルカルボニル基、2-ピリジルカルボニル基、2-フリルカルボニル基等が挙げられる。

【0066】

アリールオキシカルボニル基としては、好ましくは、炭素数7から30の置換若しくは無置換のアリールオキシカルボニル基、例えば、フェノキシカルボニル基、o-クロロフェノキシカルボニル基、m-ニトロフェノキシカルボニル基、p-tert-ブチルフェノキシカルボニル基等が挙げられる。

【0067】

アルコキシカルボニル基としては、好ましくは、炭素数2から30の置換若しくは無置換アルコキシカルボニル基、例えば、メトキシカルボニル基、エトキシカルボニル基、tert-ブトキシカルボニル基、n-オクタデシルオキシカルボニル基等が挙げられる。

【0068】

カルバモイル基としては、好ましくは、炭素数1から30の置換若しくは無置換のカルバモイル基、例えば、カルバモイル基、N-メチルカルバモイル基、N,N-ジメチルカルバモイル基、N,N-ジ-n-オクチルカルバモイル基、N-(メチルスルホニル)カルバモイル基等が挙げられる。

【0069】

アリール又はヘテロ環アゾ基としては、好ましくは炭素数6から30の置換若しくは無置換のアリールアゾ基、炭素数3から30の置換若しくは無置換のヘテロ環アゾ基、例えば、フェニルアゾ、p-クロロフェニルアゾ、5-エチルチオール-1,3,4-チアジアゾール-2-イルアゾ等が挙げられる。

【0070】

イミド基としては、好ましくは、N-スクシンイミド基、N-フタルイミド基等が挙げられる。

【0071】

ホスフィノ基としては、好ましくは、炭素数0から30の置換若しくは無置換のホスフィノ基、例えば、ジメチルホスフィノ基、ジフェニルホスフィノ基、メチルフェノキシホスフィノ基等が挙げられる。

【0072】

ホスフィニル基としては、好ましくは、炭素数0から30の置換若しくは無置換のホスフィニル基、例えば、ホスフィニル基、ジオクチルオキシホスフィニル基、ジエトキシホスフィニル基等が挙げられる。

【0073】

ホスフィニルオキシ基としては、好ましくは、炭素数0から30の置換若しくは無置換のホスフィニルオキシ基、例えば、ジフェノキシホスフィニルオキシ基、ジオクチルオキシホスフィニルオキシ基等が挙げられる。

【0074】

ホスフィニルアミノ基としては、好ましくは、炭素数0から30の置換若しくは無置換のホスフィニルアミノ基、例えば、ジメトキシホスフィニルアミノ基、ジメチルアミノホスフィニルアミノ基が挙げられる。

【0075】

シリル基としては、好ましくは、炭素数0から30の置換若しくは無置換のシリル基、例えば、トリメチルシリル基、tert-ブチルジメチルシリル基、フェニルジメチルシリル基

10

20

30

40

50

等が挙げられる。

【0076】

上記の置換基の中で、水素原子を有するものは、該水素原子が上記の置換基で置換されていても良い。そのような置換基の例としては、アルキルカルボニルアミノスルホニル基、アリールカルボニルアミノスルホニル基、アルキルスルホニルアミノカルボニル基、アリールスルホニルアミノカルボニル基が挙げられる。その例としては、メチルスルホニルアミノカルボニル基、p-メチルフェニルスルホニルアミノカルボニル基、アセチルアミノスルホニル基、ベンゾイルアミノスルホニル基が挙げられる。

【0077】

なお、前記一般式(1)で表される化合物の好ましい置換基の組み合わせについては、種々の置換基の少なくとも1つが前記の好ましい基である化合物が好ましく、より多くの種々の置換基が前記好ましい基である化合物がより好ましく、全ての置換基が前記好ましい基である化合物が最も好ましい。

10

【0078】

本発明の一般式(1)で表されるアゾ顔料として特に好ましい組み合わせは、以下の(イ)～(ホ)を含むものである。

【0079】

(イ) W_1 、 W_2 はそれぞれ独立に、アルコキシ基(例えば、メトキシ基、エトキシ基、i-プロポキシ基、t-ブトキシ基)、アミノ基(例えば、 $-NH_2$ 基、メチルアミノ基、ジメチルアミノ基、アニリノ基)、アルキル基(例えば、メチル基、エチル基、n-プロピル基、i-プロピル基、t-ブチル基、シクロプロピル基)又はアリール基(例えば、フェニル基、p-トリル基、ナフチル基)が好ましく、その中でもアルコキシ基、アミノ基又はアルキル基が好ましく、更にアルコキシ基、アミノ基が好ましく、更に好ましくは、総炭素数1～5のアルコキシ基、アミノ基($-NH_2$ 基)、総炭素数1～5のアルキルアミノ基であり、特に好ましくは、総炭素数1～3のアルコキシ基、アミノ基($-NH_2$ 基)、総炭素数1～3のアルキルアミノ基であり、更に、メトキシ基($-OCH_3$ 基)、エトキシ基($-OC_2H_5$ 基)、アミノ基($-NH_2$ 基)が好ましく、その中でもメトキシ基($-OCH_3$ 基)が最も好ましい。

20

【0080】

(ロ) R_{11} 、 R_{12} はそれぞれ独立に、水素原子、又は置換基(例えば、置換若しくは無置換の総炭素数1～8のアシルアミノ基、置換若しくは無置換の総炭素数1～12のアルキル基、置換若しくは無置換の総炭素数6～18のアリール基、又は置換若しくは無置換の総炭素数4～12のヘテロ環基)が好ましく、より好ましくは、総炭素数1～8の直鎖アルキル基又は分岐アルキル基であり、更にメチル基、i-プロピル基又はt-ブチル基が好ましく、特にi-プロピル基又はt-ブチル基が好ましく、その中でもt-ブチル基が最も好ましい。

30

【0081】

(ハ) Zは、二価の5又は6員のヘテロ環基を表し、それらは更に縮環していてもよい。Zとして好ましくは、5又は6員の置換若しくは無置換の含窒素ヘテロ環が挙げられ、更に好ましくは、6員の置換若しくは無置換の含窒素ヘテロ環である。例えば、ピロール環、ピラゾール環、トリアゾール環、イミダゾール環、チアゾール環、イソチアゾール環、オキサゾール環、イソオキサゾール環、チアジアゾール環、チオフェン環、フラン環、ピリジン環、ピリミジン環、トリアジン環、ピリダジン環、ピラジン環が好ましく、特に好ましくは、6員含窒素ヘテロ環、具体的には炭素数3から10の6員含窒素ヘテロ環基である。更に好ましいヘテロ環の例は、ピリジン環、ピリミジン環、S-トリアジン環、ピリダジン環、ピラジン環であり、より好ましくは、ピリジン環、ピリミジン環、S-トリアジン環、ピリダジン環、ピラジン環であり、更に好ましくは、ピリミジン環、S-トリアジン環であり、特にピリミジン環、S-トリアジン環が好ましく、更に4, 6-に置換基を有するピリミジン環、2位に炭素数1～4のアルコキシ基を有するS-トリアジン環が好ましく、その中でも4, 6-に置換基を有するピリミジン環が最も好ましい。

40

50

【0082】

(ニ) G_1 、 G_2 はそれぞれ独立に、水素原子、アルキル基、シクロアルキル基、アラルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基又はヘテロ環基を表し、特に好ましくは、水素原子、メチル基、エチル基、 n -プロピル基、イソプロピル基、 t -ブチル基、シクロプロピル基、ベンジル基、2-フェネチル基、ビニル基、アリル基、エチニル基、プロパルギル基、フェニル基、 p -トリル基、ナフチル基、ピリジル基、ピリミジニル基、ピラジニル基が好ましく、更に水素原子、メチル基、フェニル基、ピリジル基、ピリミジニル基、ピラジニル基が好ましく、その中でもメチル基、2-ピリジル基、2, 6-ピリミジニル基、2, 5-ピラジニル基が好ましく、メチル基が最も好ましい。

【0083】

(ホ) Y_1 、 Y_2 はそれぞれ独立に、水素原子、アルキル基（例えば、メチル基）アリール基（例えば、フェニル基）、ヘテロ環基（例えば2-ピリジル基）、アルキルチオ基（例えば、メチルチオ基）であり、更に水素原子、メチル基、フェニル基、メチルチオ基であり、その中でも水素原子が最も好ましい。

【0084】

本発明は、一般式(1)で表されるアゾ顔料の互変異性体もその範囲に含むものである。

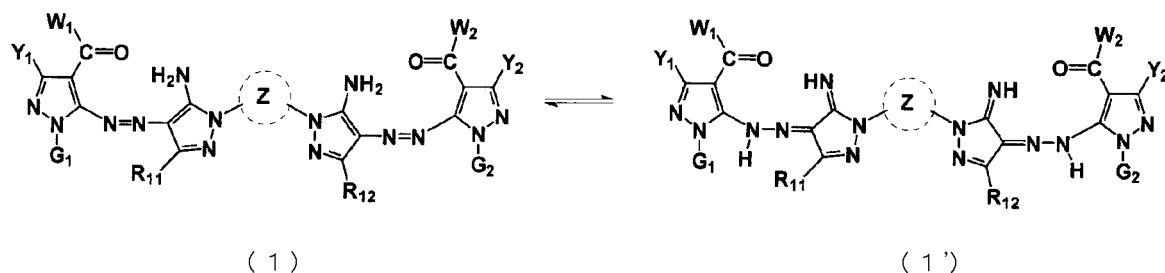
一般式(1)は、化学構造上取りうる数種の互変異性体の中から極限構造式の形で示しているが、記載された構造以外の互変異性体であってもよく、複数の互変異性体を含む混合物として用いても良い。

例えば、一般式(1)で表される顔料には、下記一般式(1')で表されるアゾーヒドrazonの互変異性体が考えられる。

本発明は、一般式(1)で表されるアゾ顔料の互変異性体である以下の一般式(1')で表される化合物もその範囲に含むものである。

【0085】

【化10】



【0086】

(一般式(1')中、 R_{11} 、 R_{12} 、 W_1 、 W_2 、 Y_1 、 Y_2 、 G_1 、 G_2 及び Z は一般式(1)中の R_{11} 、 R_{12} 、 W_1 、 W_2 、 Y_1 、 Y_2 、 G_1 、 G_2 及び Z と同義である。)

【0087】

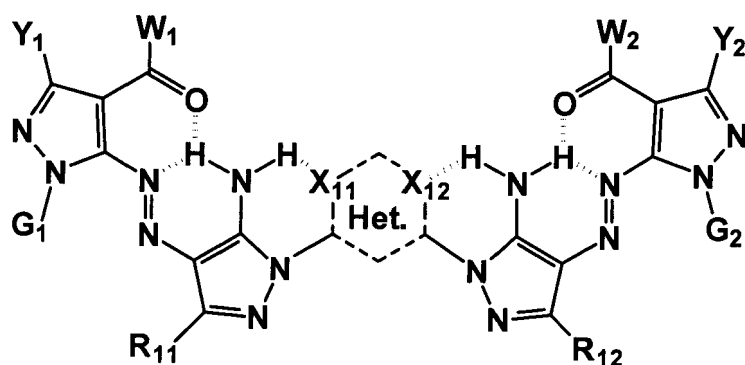
なお、前記一般式(1)で表される化合物の好ましい置換基の組み合わせについては、種々の置換基の少なくとも1つが前記の好ましい基である化合物が好ましく、より多くの種々の置換基が前記好ましい基である化合物がより好ましく、全ての置換基が前記好ましい基である化合物が最も好ましい。

【0088】

本発明の上記一般式(1)で表されるアゾ顔料のうち、好ましくは下記一般式(12)で表されるアゾ顔料である。

【0089】

【化 1 1】



(12)

【0090】

上記一般式(12)中の G_1 、 G_2 、 R_{11} 、 R_{12} 、 W_1 、 W_2 、 Y_1 及び Y_2 は、上記一般式(1)中の G_1 、 G_2 、 R_{11} 、 R_{12} 、 W_1 、 W_2 、 Y_1 及び Y_2 と同義である。

Het. は、上記一般式(1)中のZが構成するヘテロ環を表し、 X_{11} 、 X_{12} はそれぞれ独立にHet. が構成するヘテロ環中のそれぞれヘテロ原子を表す。

【0091】

上記一般式(1)で表されるアゾ顔料において多数の互変異性体が考えられる。

また、本発明において、一般式(1)で表されるアゾ顔料は、分子内水素結合又は分子内交叉水素結合を形成する置換基を有することが好ましい。少なくとも1個以上の分子内交叉水素結合を形成する置換基を有することが好ましく、少なくとも3個以上の分子内水素結合を形成する置換基を有することがより好ましく、少なくとも3個以上の分子内水素結合を形成する置換基を有し、かつ、それらの水素結合の少なくとも2個が分子内交叉水素結合を形成する置換基を有する場合が特に好ましい。

【0092】

一般式(1)で表されるアゾ顔料のうち、前述したように特に好ましいアゾ顔料の一般式の例としては、上記一般式(12)で表されるアゾ顔料を挙げることができる。

【0093】

この構造が好ましい要因としては、一般式(12)で示すようにアゾ顔料構造に含有するヘテロ環を構成する窒素原子、水素原子及びヘテロ原子(アゾ基又はその互変異性体であるヒドラゾン基の窒素原子とカルボニル基の酸素原子又はアミノ基の窒素原子)が少なくとも1個以上の分子内の交叉水素結合(分子内水素結合)を容易に形成し易いことが挙げられる。

更に好ましくは、上記一般式(12)で示すようにアゾ顔料構造に含有するヘテロ環基を構成する窒素原子、アミノ基の水素原子及びヘテロ原子(アゾ基又はその互変異性体であるヒドラゾン基の窒素原子とカルボニル基の酸素原子又はアミノ基の窒素原子)が少なくとも4個以上の分子内水素結合を容易に形成し易く、かつ、少なくとも2個以上の分子内の交叉水素結合を容易に形成し易いことが挙げられる。

その結果、分子の平面性が上がり、更に分子内・分子間相互作用が向上し、例えば一般式(12)で表されるアゾ顔料の結晶性が高くなり(高次構造を形成し易くなり)、顔料としての要求性能である、光堅牢性、熱安定性、湿熱安定性、耐水性、耐ガス性及び又は耐溶剤性が大幅に向上するため、最も好ましい例となる。

【0094】

また、本発明では、一般式(1)及び(12)で表される化合物中に同位元素(例えば、 ^2H 、 ^3H 、 ^{13}C 、 ^{15}N)を含有していても適用できる。

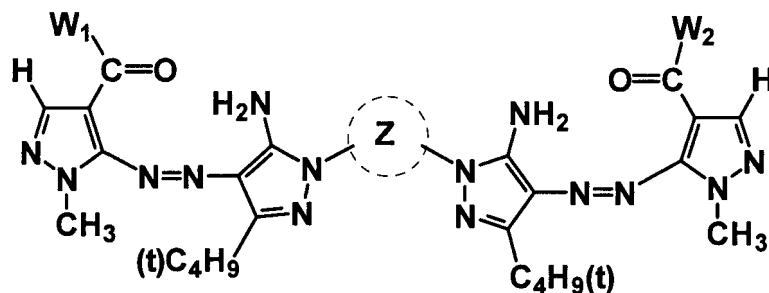
【 0 0 9 5 】

本発明では、効果の点から、一般式（１）及び（１２）で表されるアゾ顔料のうち以下の一般式（１０）で表されるアゾ顔料が更に好ましく、一般式（１１）で表されるアゾ顔料が特に好ましい。

【 0 0 9 6 】

【 化 1 2 】

（１０）：



10

【 0 0 9 7 】

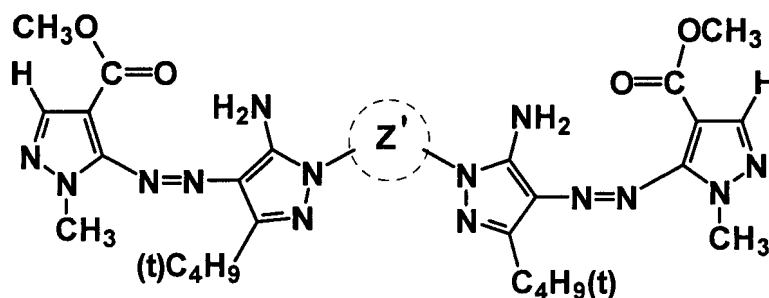
（一般式（１０）中、Zは５又は６員の含窒素ヘテロ環を表し、W₁、W₂はそれぞれ独立にアルコキシ基、アミノ基、アルキル基又はアリール基を表す。）

20

【 0 0 9 8 】

【 化 1 3 】

（１１）：



30

【 0 0 9 9 】

（一般式（１１）中、Z'は６員含窒素ヘテロ環を表す。）

一般式（１１）中、Z'が表す６員含窒素ヘテロ環としては、一般式（１）中のZが表す６員含窒素ヘテロ環と同様のものが挙げられ、好ましいものも同様である。

【 0 1 0 0 】

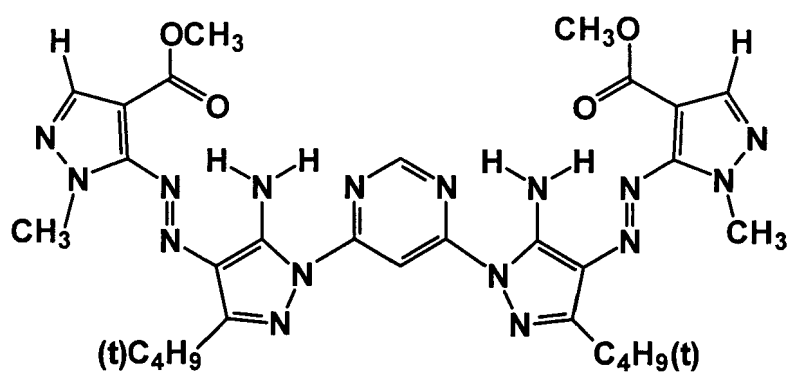
以下に前記一般式（１）及び（１２）で表されるアゾ顔料の具体例を以下に示すが、本発明に用いられるアゾ顔料は、下記の例に限定されるものではない。また、以下の具体例の構造は化学構造上取りうる数種の互変異性体の中から極限構造式の形で示されるが、記載された構造以外の互変異性体構造のものであっても良いことは言うまでもない。

40

【 0 1 0 1 】

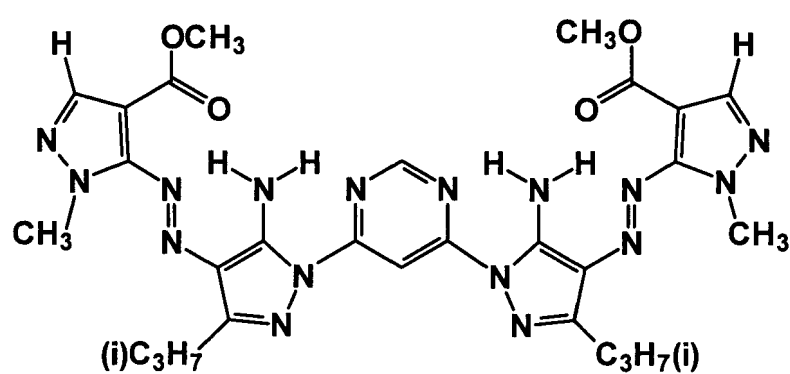
【化 1 4】

P i g . - 1



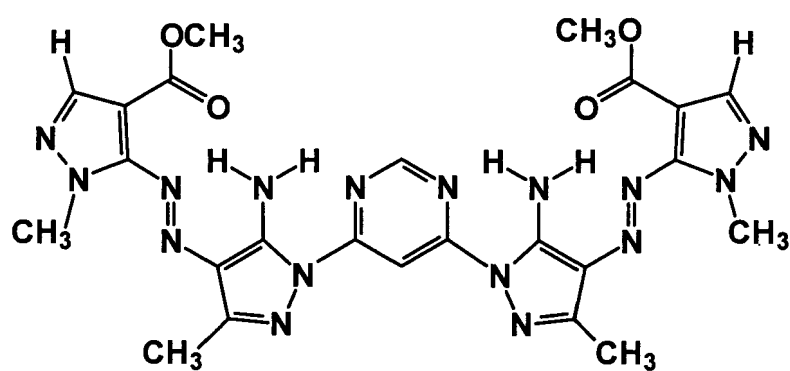
10

P i g . - 2



20

P i g . - 3

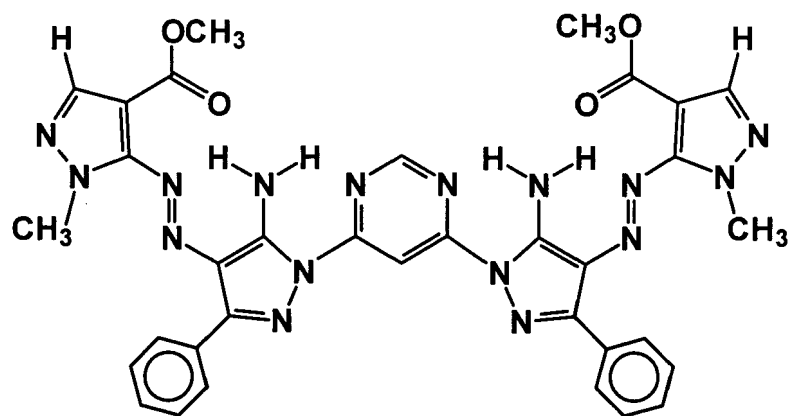


40

【 0 1 0 2 】

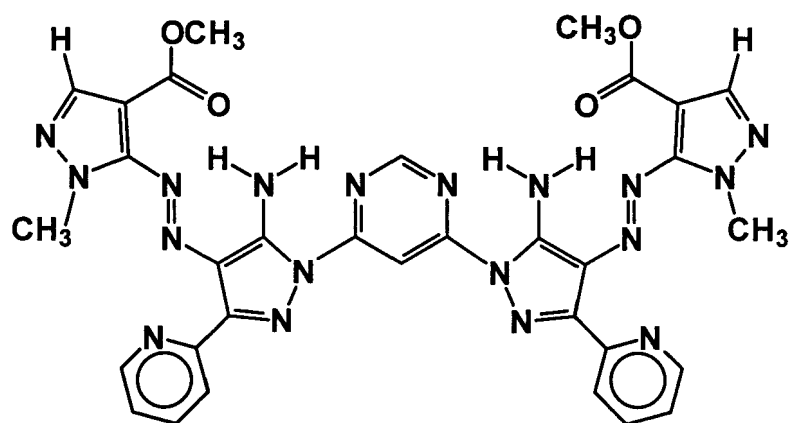
【化 1 5】

P i g . - 4



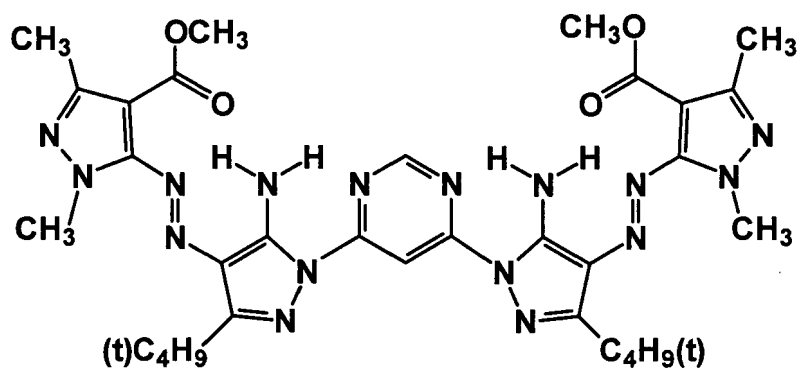
10

P i g . - 5



20

P i g . - 6

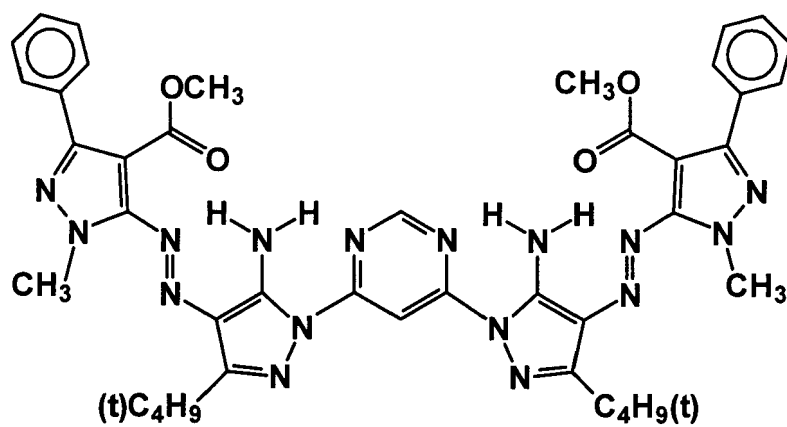


40

【 0 1 0 3 】

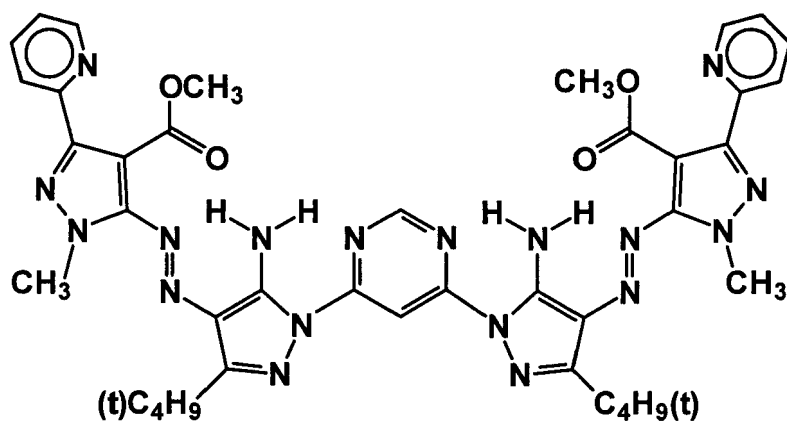
【化 1 6】

P i g . - 7



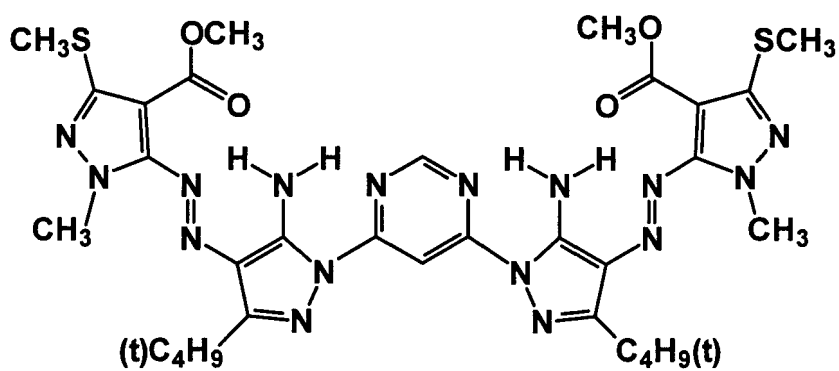
10

P i g . - 8



20

P i g . - 9

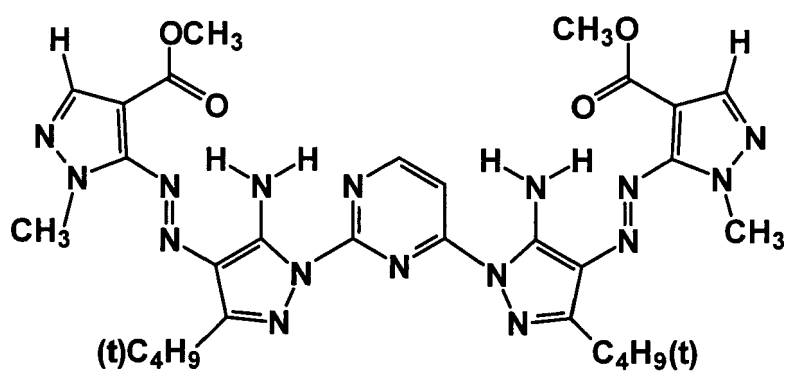


40

【 0 1 0 4】

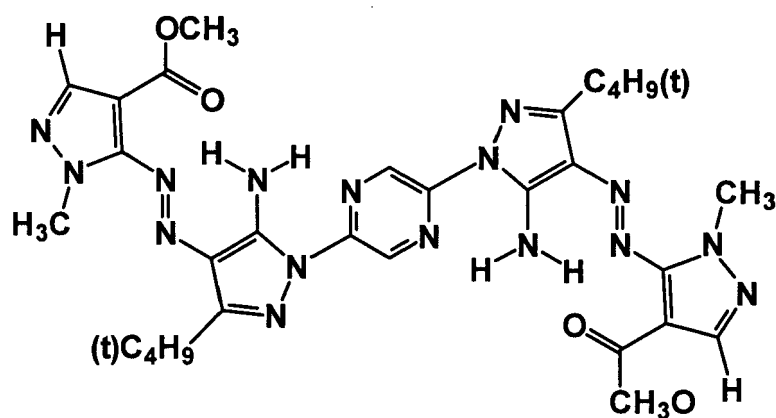
【化 1 7】

P i g . - 1 0



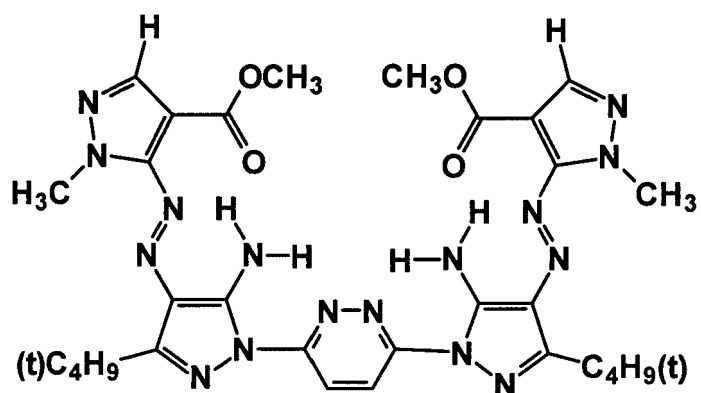
10

P i g . - 1 1



20

P i g . - 1 2

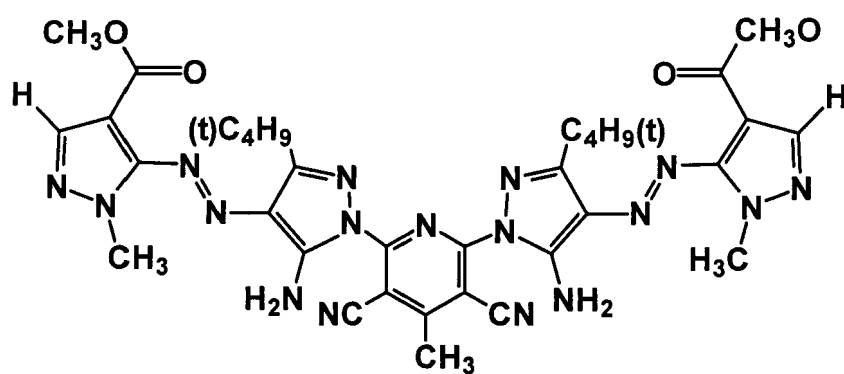


40

【 0 1 0 5 】

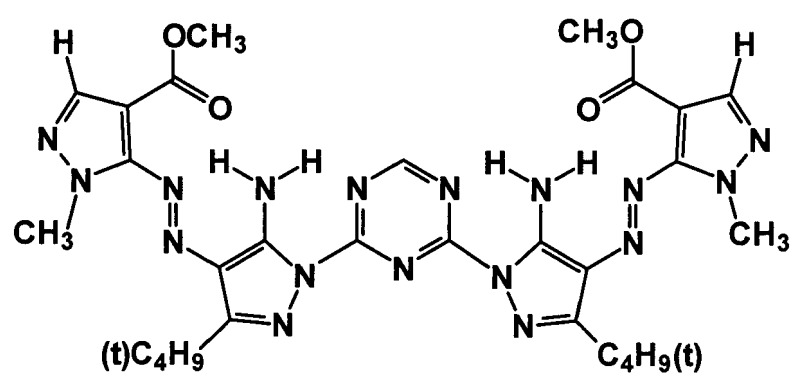
【化 1 8】

P i g . - 1 3



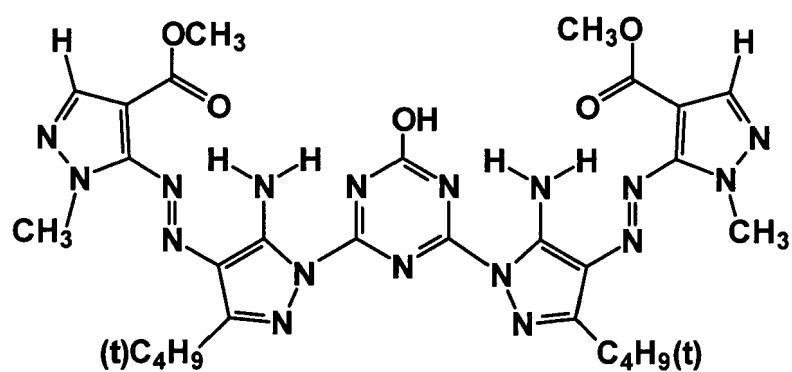
10

P i g . - 1 4



20

P i g . - 1 5

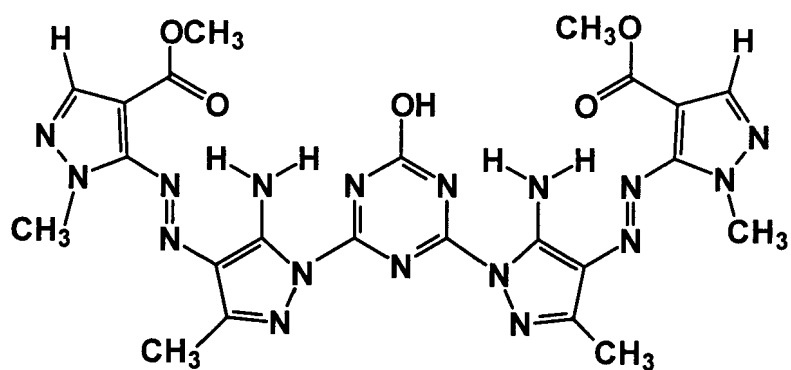


40

【 0 1 0 6】

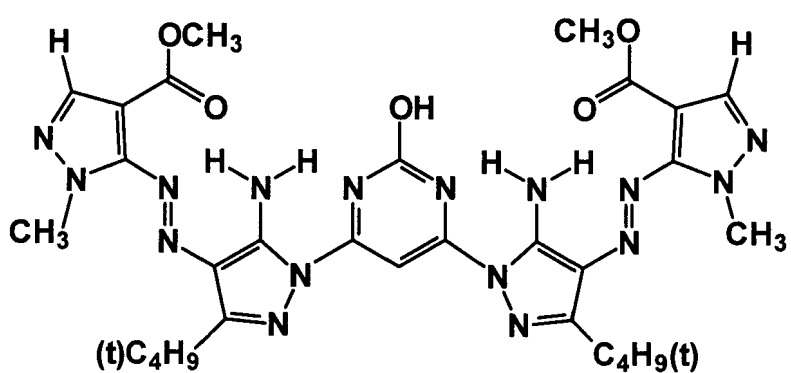
【化 1 9】

P i g . - 1 6



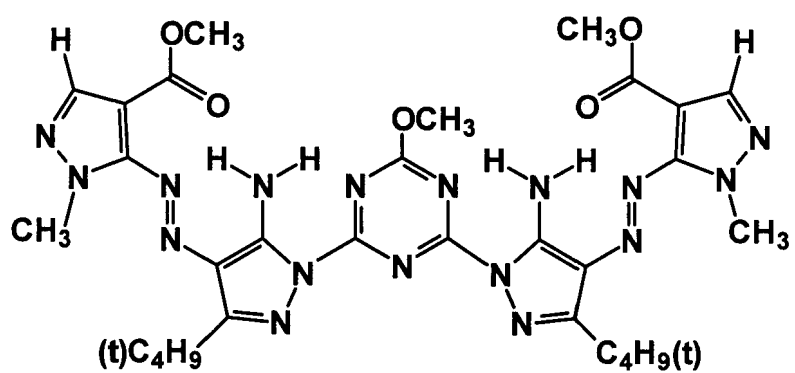
10

P i g . - 1 7



20

P i g . - 1 8



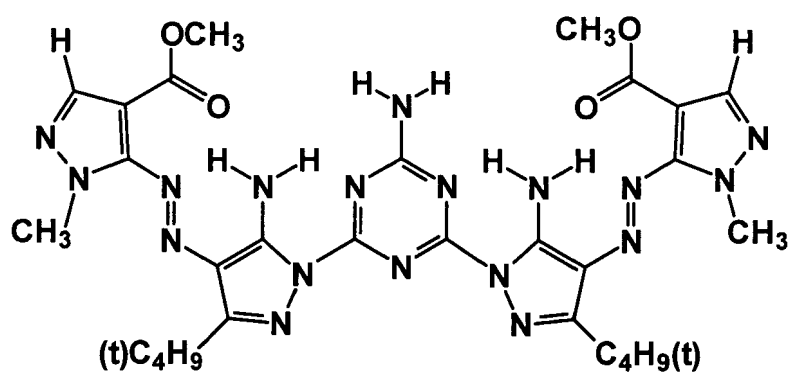
30

【 0 1 0 7 】

40

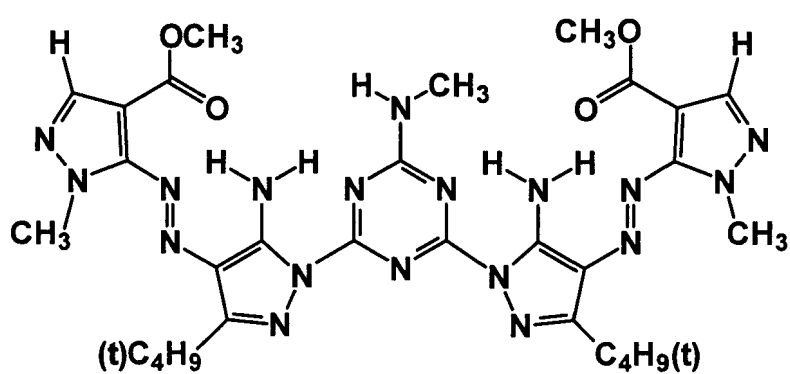
【化 2 0】

P i g . - 1 9



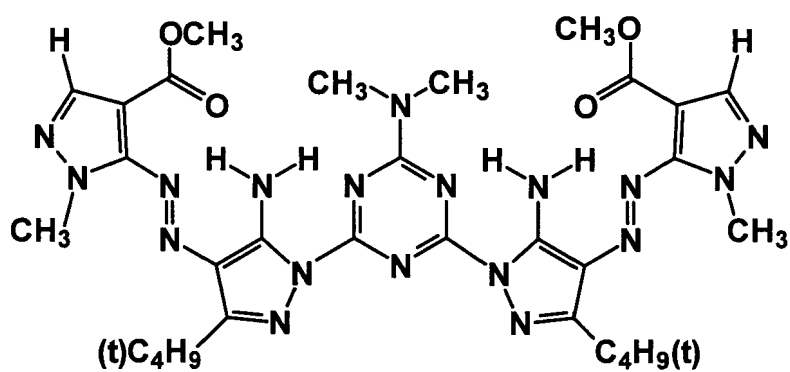
10

P i g . - 2 0



20

P i g . - 2 1



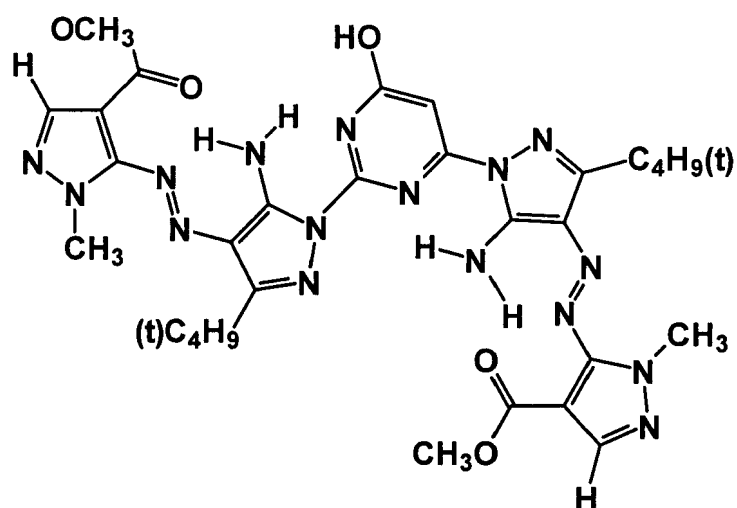
30

40

【 0 1 0 8】

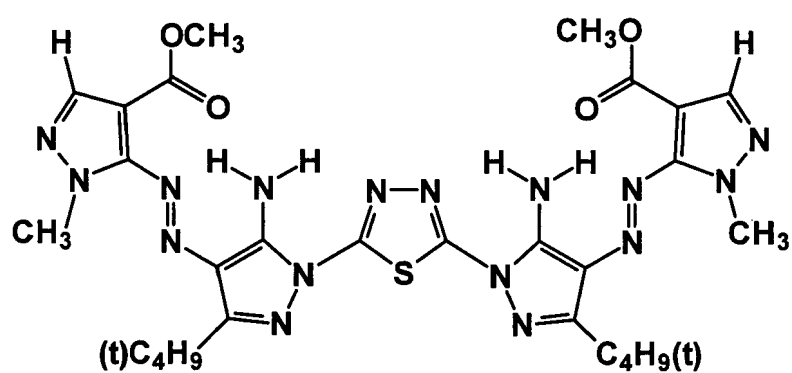
【化 2 1】

P i g . - 2 2



10

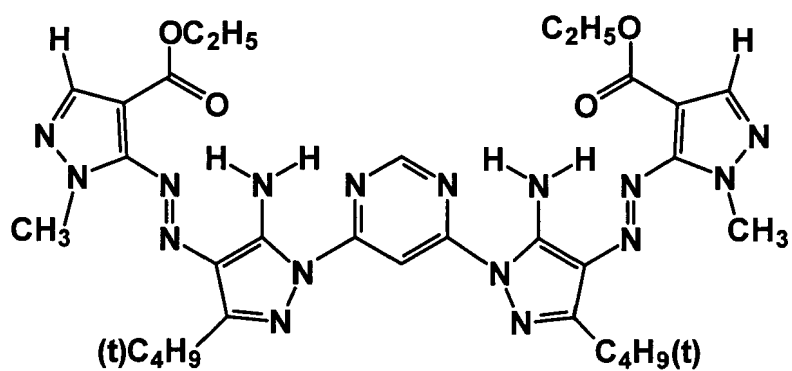
P i g . - 2 3



20

30

P i g . - 2 4

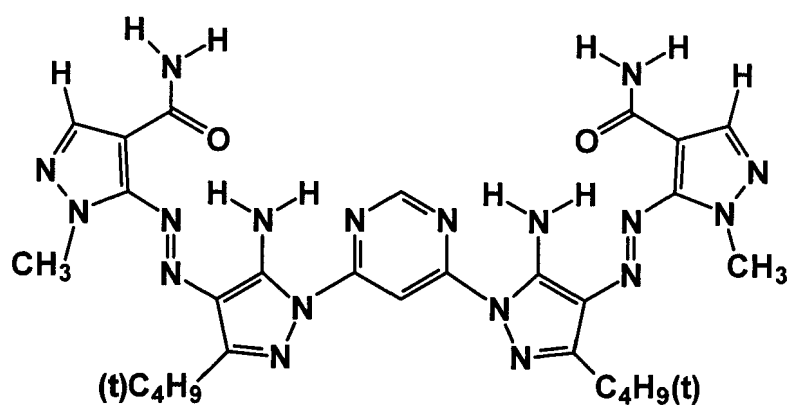


40

【 0 1 0 9】

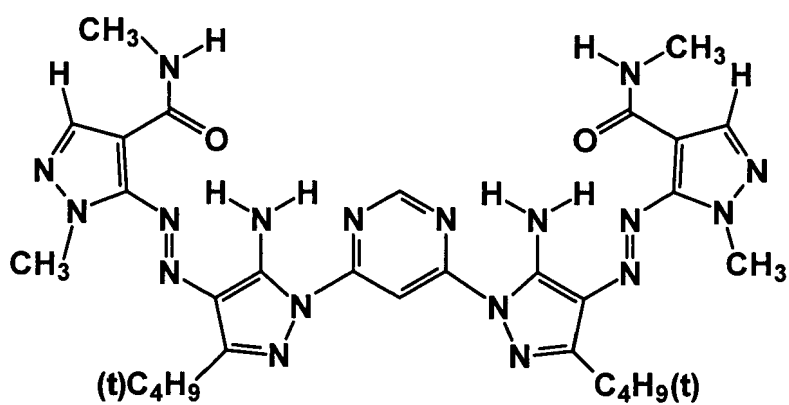
【化 2 2】

P i g . - 2 5



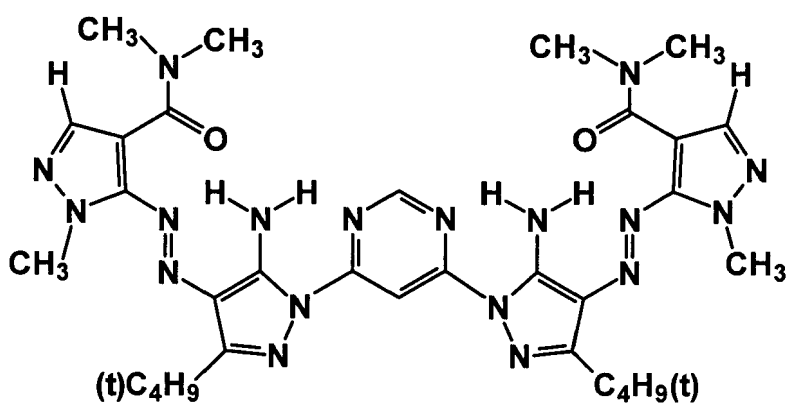
10

P i g . - 2 6



20

P i g . - 2 7

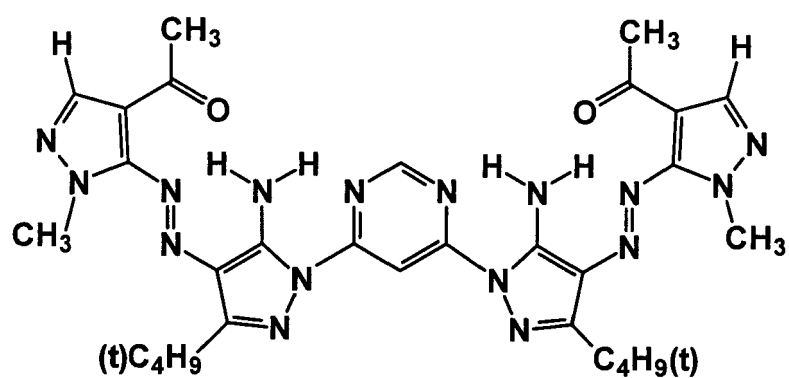


40

【 0 1 1 0 】

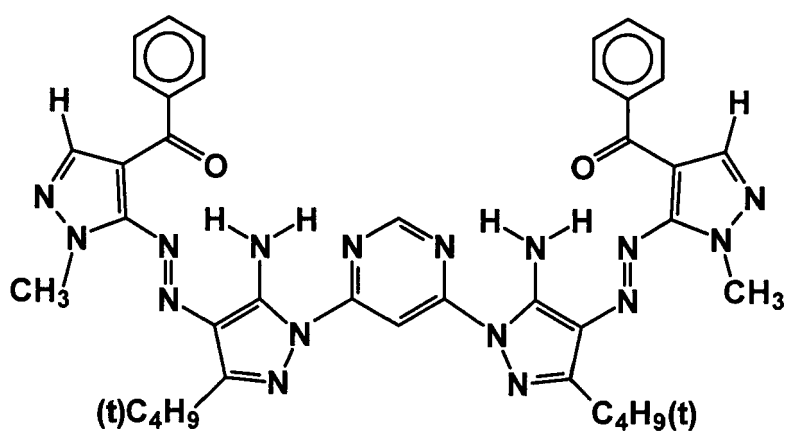
【化 2 3】

P i g . - 2 8



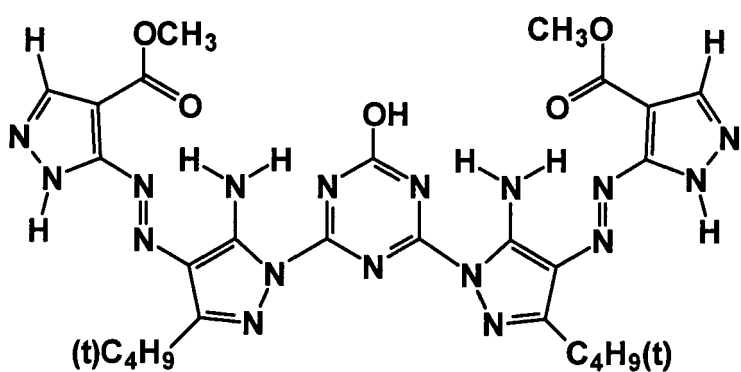
10

P i g . - 2 9



20

P i g . - 3 0

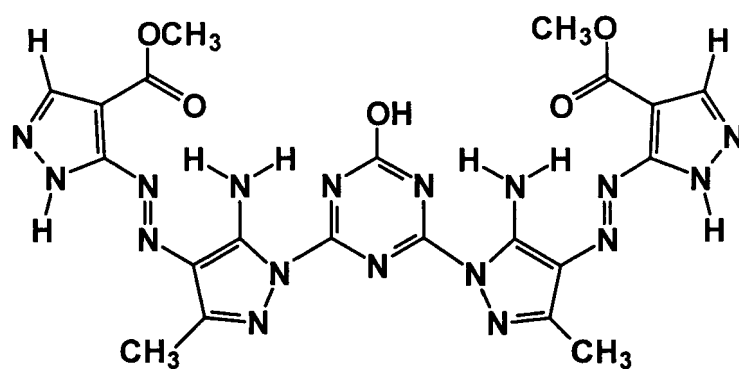


40

【 0 1 1 1 】

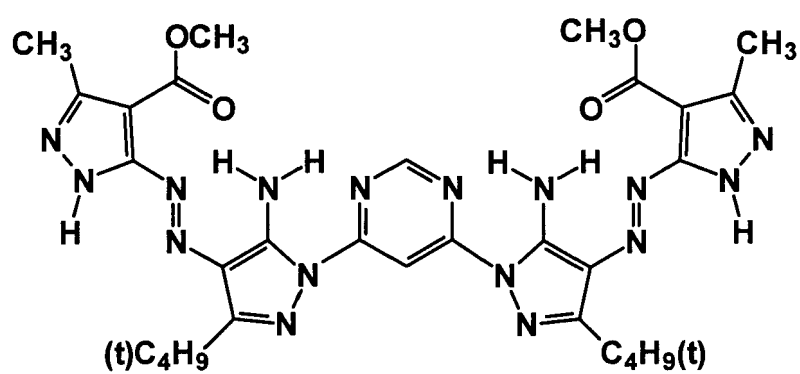
【化 2 4】

P i g . - 3 1



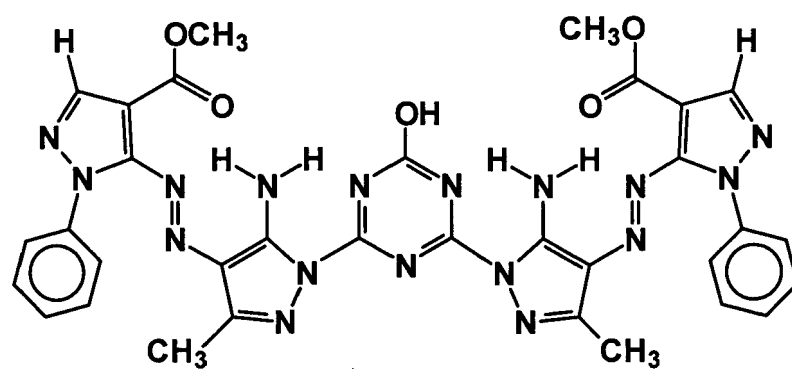
10

P i g . - 3 2



20

P i g . - 3 3

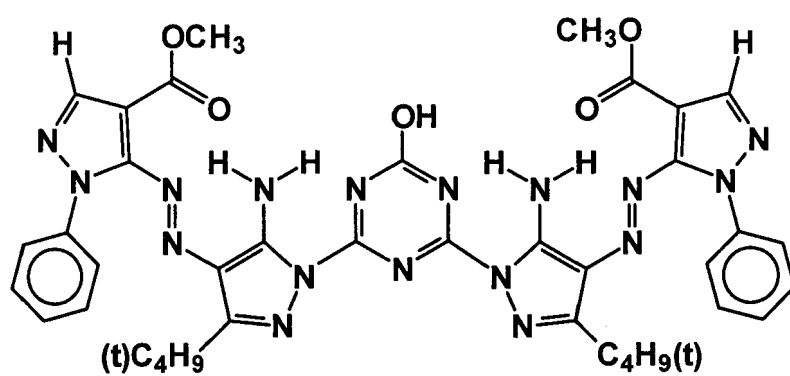


40

【 0 1 1 2 】

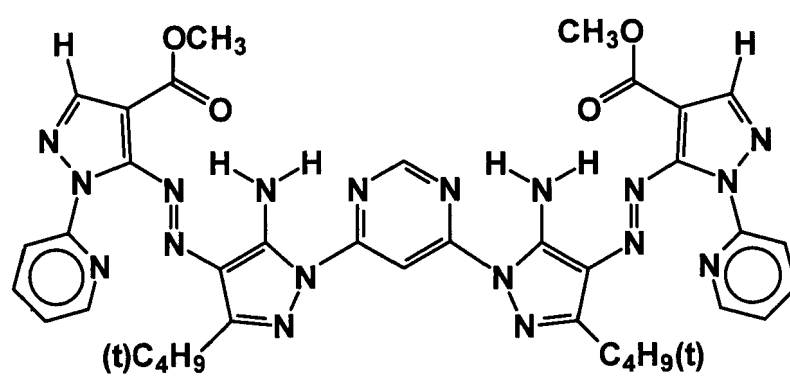
【化 2 5】

P i g . - 3 4



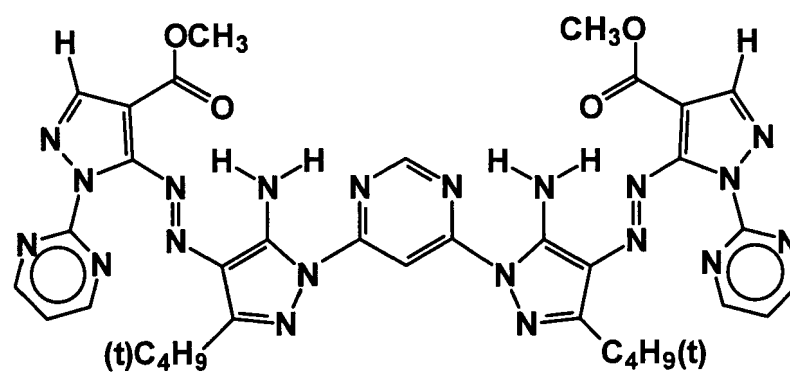
10

P i g . - 3 5



20

P i g . - 3 6



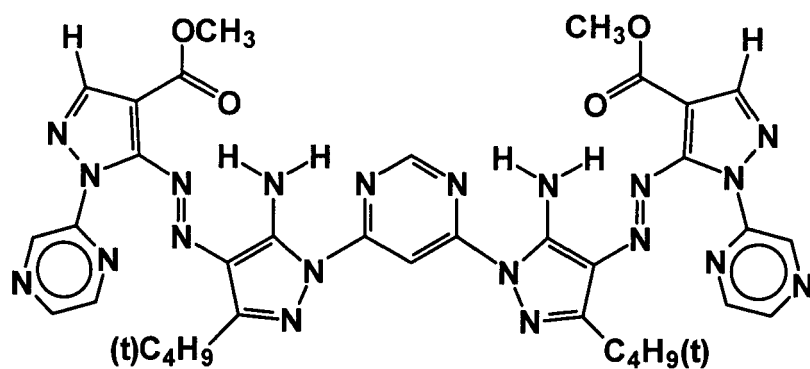
30

40

【 0 1 1 3 】

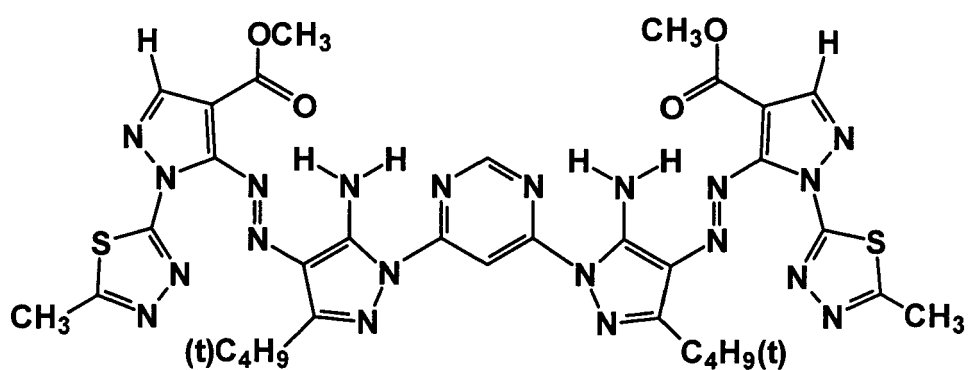
【化 2 6】

P i g . - 3 7



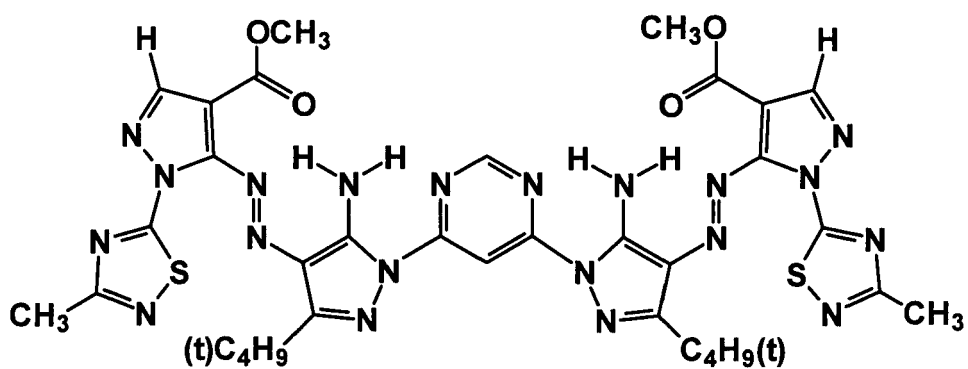
10

P i g . - 3 8



20

P i g . - 3 9



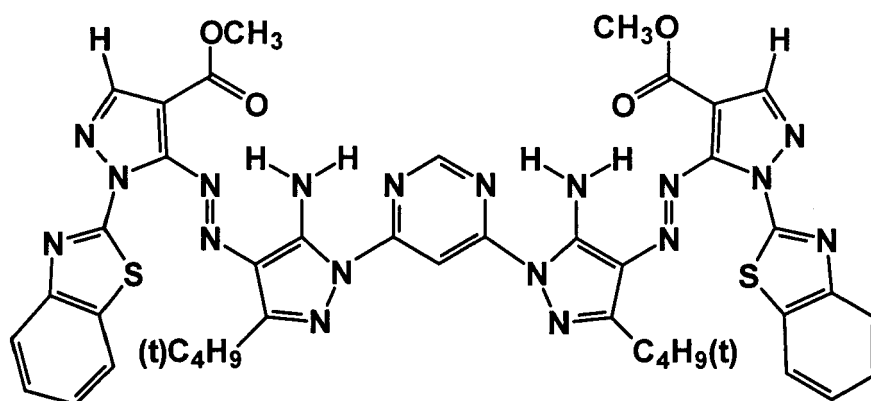
30

40

【 0 1 1 4】

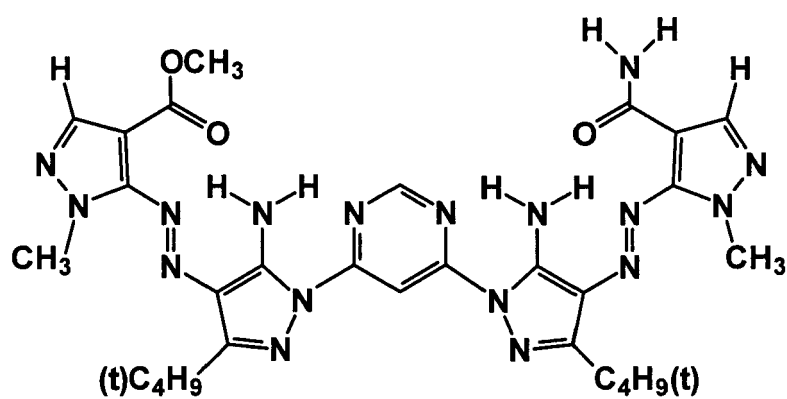
【化 2 7】

P i g . - 4 0



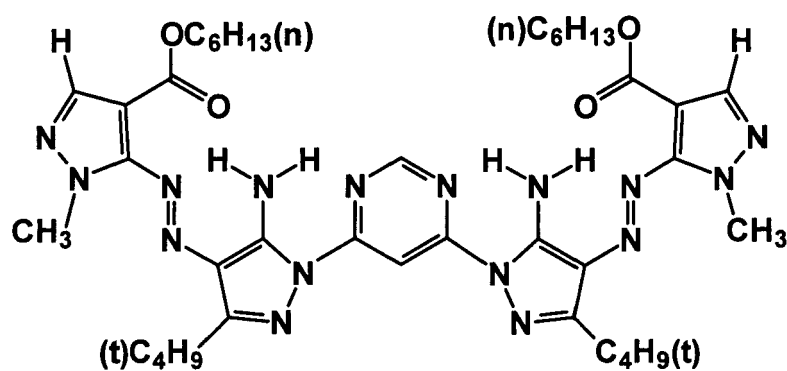
10

P i g . - 4 1



20

P i g . - 4 2

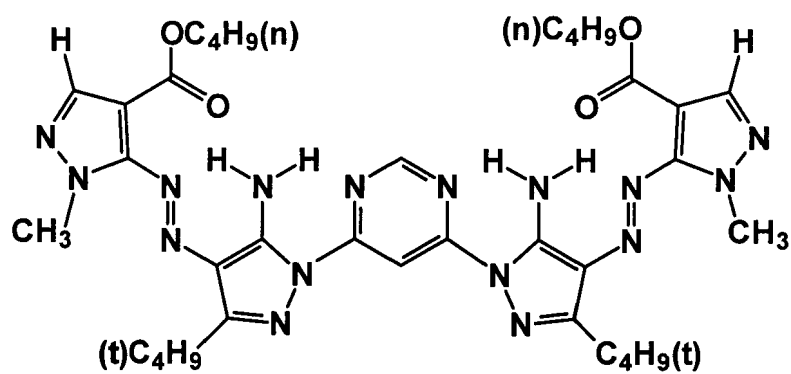


40

【 0 1 1 5 】

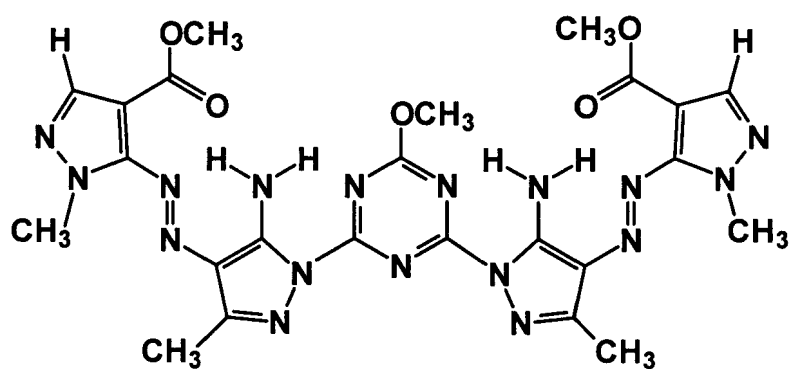
【化 2 8】

P i g . - 4 3



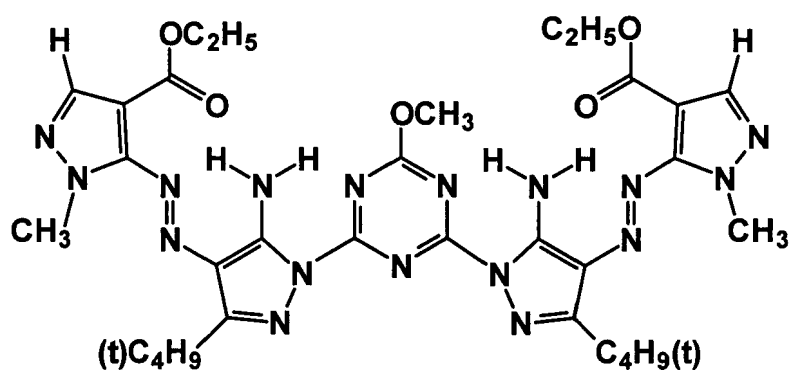
10

P i g . - 4 4



20

P i g . - 4 5

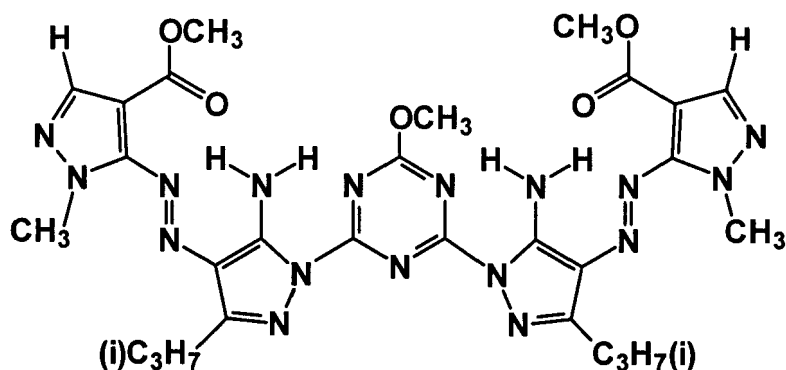


40

【 0 1 1 6 】

【化 29】

P i g . - 4 6



10

【0117】

上記の中でも、本発明の効果の点から、P i g . - 1 , P i g . - 1 8 , P i g . - 2 5 が好ましい。

本発明では、化合物の構造によって互変異性体が存在する場合においても、本発明においては代表的な形の一つで記載しているが、本発明の記述と異なる互変異性体も本発明のアゾ顔料に含まれる。また、本発明のアゾ顔料の塩、水和物も本発明のアゾ顔料に含まれる。

20

【0118】

本発明の一般式（1）で表される顔料は、化学構造式が一般式（1）又はその互変異性体であれば良く、多形とも呼ばれるいかなる結晶形態の顔料であっても良い。

【0119】

結晶多形は、同じ化学組成を有するが、結晶中におけるビルディングブロック（分子又はイオン）の配置が異なることを言う。結晶構造によって化学的及び物理的性質が決定され、各多形は、レオロジー、色、及び他の色特性によってそれぞれ区別することができる。また、異なる多形は、X-Ray Diffraction（粉末X線回折測定結果）やX-Ray Analysis（X線結晶構造解析結果）によって確認することもできる。

30

本発明の一般式（1）で表される顔料に結晶多形が存在する場合、どの多形であってもよく、また2種以上の多形の混合物であっても良いが、結晶型が単一のものを主成分とすることが好ましい。すなわち結晶多が混入していないものが好ましく、単一の結晶型を有するアゾ顔料の含有量はアゾ顔料全体に対し70%～100%、好ましくは80%～100%、より好ましくは90%～100%、更に好ましくは95%～100%、特に好ましくは100%である。単一の結晶型を有するアゾ顔料を主成分とすることで、色素分子の配列に対して規則性が向上し、分子内・分子間相互作用が強まり高次元3次元ネットワークを形成しやすくなる。その結果として色相の向上・光堅牢性・熱堅牢性・湿度堅牢性・酸化性ガス堅牢性及び耐溶剤性等、顔料に要求される性能の点で好ましい。

40

アゾ顔料における結晶多形の混合比は、単結晶X線結晶構造解析、粉末X線回折（XRD）、結晶の顕微鏡写真（TEM）、IR（KBr法）等の固体の物理化学的測定値から確認できる。

【0120】

本発明において、一般式（1）で表されるアゾ顔料は、酸基のある場合には、酸基の一部あるいは全部が塩型のものであってもよく、塩型の顔料と遊離酸型の顔料が混在していてもよい。上記の塩型の例としてNa、Li、K等のアルカリ金属の塩、アルキル基若しくはヒドロキシアルキル基で置換されていてもよいアンモニウム塩、又は有機アミンの塩が挙げられる。有機アミンの例として、低級アルキルアミン、ヒドロキシ置換低級アルキルアミン、カルボキシ置換低級アルキルアミン及び炭素数2～4のアルキレンイミン単

50

位を2～10個有するポリアミン等が挙げられる。これらの塩型の場合、その種類は1種類に限られず複数種混在していてもよい。

【0121】

更に、本発明で使用する顔料の構造において、その1分子中に酸基が複数個含まれる場合は、その複数の酸基は塩型あるいは酸型であり互いに異なるものであってもよい。

【0122】

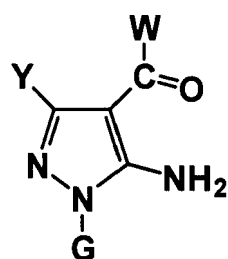
本発明において、前記一般式(1)で表されるアゾ顔料は、結晶中に水分子を含む水和物であっても良い。

【0123】

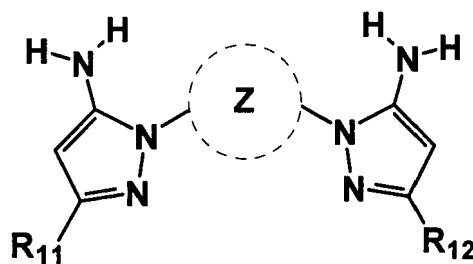
次に上記一般式(1)で表されるアゾ顔料の製造方法の一例について説明する。例えば、下記一般式(A)で表されるヘテロ環アミンを酸性条件でジアゾニウム化し、下記一般式(B)で表される化合物とカップリング反応を行い、常法による後処理を行って上記一般式(1)で表されるアゾ顔料を製造することができる。

【0124】

【化30】



(A)



(B)

【0125】

(一般式(A)及び(B)中、G、Y、W、 R_{11} 、 R_{12} 、Zは一般式(1)中の対応する G_1 (又は G_2)、 Y_1 (又は Y_2)、(W_1 又は W_2)、 R_{11} 、 R_{12} 、Zと同義である。)

【0126】

上記一般式(A)で表されるヘテロ環アミンは、一般的には公知慣用の方法、例えば、Helv. Chim. Acta, 41, 1958, 1052～1056やHelv. Chim. Acta, 42, 1959, 349～352等に記載の方法、及び、それに準じた方法で製造することができる。

上記一般式(B)で表される化合物は、国際公開第06/082669号や特開2006-57076号公報に記載の方法、及び、それに準じた方法で製造することができる。

上記一般式(A)で表されるヘテロ環アミンのジアゾニウム化反応は、例えば、硫酸、リン酸、酢酸、塩酸、メタンスルホン酸などの酸性溶媒中、亜硝酸ナトリウム、ニトロシル硫酸、亜硝酸イソamil等の試薬を15℃以下の温度で10分～6時間程度反応させることで行うことができる。

カップリング反応は、上述の方法で得られたジアゾニウム塩と上記一般式(B)で表される化合物とを40℃以下、好ましくは、25℃以下で10分～12時間程度反応させることで行うことができる。

このようにして反応させたものは、結晶が析出しているものもあるが、一般的には反応液に水、あるいはアルコール系溶媒を添加し、結晶を析出させ、結晶を濾取することができる。また、反応液にアルコール系溶媒、水等を添加して結晶を析出させて、析出した結晶を濾取することができる。濾取した結晶を必要に応じて洗浄・乾燥して、一般式(1)で表されるアゾ顔料を得ることができる。

【0127】

10

20

30

40

50

上記の製造方法によって、上記一般式(1)で表される化合物は粗アゾ顔料(クルード)として得られるが、本発明の顔料として用いる場合、後処理を行うことが望ましい。この後処理の方法としては、例えば、ソルベントソルトミリング、ソルトミリング、ドライミリング、ソルベントミリング、アシッドペースティング等の磨砕処理を行うことが好ましい。なかでもソルベントソルトミリングが好ましい。

また、その他の後処理として、溶媒加熱処理などによる顔料粒子制御工程、樹脂、界面活性剤及び分散剤等による表面処理工程が挙げられる。

【0128】

溶媒加熱処理に使用される溶媒としては、例えば、水、トルエン、キシレン等の芳香族炭化水素系溶媒、クロロベンゼン、*o*-ジクロロベンゼン等のハロゲン化炭化水素系溶媒、イソプロパノール、イソブタノール等のアルコール系溶媒、N,N-ジメチルホルムアミド、N,N-ジメチルアセトアミド、N-メチル-2-ピロリドン等の極性非プロトン性有機溶媒、氷酢酸、ピリジン、又はこれらの混合物等が挙げられる。上記で挙げた溶媒に、更に無機又は有機の酸又は塩基を加えても良い。溶媒加熱処理の温度は所望する顔料の一次粒子径の大きさによって異なるが、40~150℃が好ましく、60~100℃が更に好ましい。また、処理時間は、30分~24時間が好ましい。

【0129】

ソルベントソルトミリングは、例えば、アゾ顔料、その互変異性体、それらの塩及び水和物からなる群より選択される少なくとも1種(以下、「アゾ顔料等」という場合がある)と、水溶性無機塩と、水溶性有機溶剤とを含む混合物を混練機に仕込み、その中で混練する磨砕工程である。

上記水溶性無機塩としては、通常用いられる水溶性無機塩を特に制限なく用いることができる。具体的には、例えば塩化ナトリウム、塩化カリウム、硫酸ナトリウム、硫酸カリウム等の無機塩を用いることが好ましい。また、使用する水溶性無機塩の平均粒子径は、0.5~50μmが好ましく、1~20μmがより好ましく、1~10μmが更に好ましい。当該無機塩の使用量は、アゾ顔料等に対して1~30質量倍とすることができ、生産性の観点から3~20質量倍とするのが好ましく、5~15質量倍とするのがより好ましい。

水溶性有機溶剤としては、水に溶解し、アゾ顔料等と上記水溶性無機塩を実質的に溶解しないものが好ましく、混練時の温度上昇により溶剤が蒸発し易い状態になるため、安全性の点から高沸点溶剤が好ましい。水溶性有機溶剤は粗アゾ顔料と水溶性無機塩とを含む混合物を混練に適用可能な硬さに調整するために用いることができる。このような水溶性有機溶剤としては、例えばジエチレングリコール、グリセリン、エチレングリコール、プロピレングリコール、液体ポリエチレングリコール、液体ポリプロピレングリコール、2-(メトキシメトキシ)エタノール、2-ブトキシエタノール、2-(イソペンチルオキシ)エタノール、2-(ヘキシルオキシ)エタノール、ジエチレングリコールモノメチルエーテル、ジエチレングリコールモノエチルエーテル、ジエチレングリコールモノブチルエーテル、トリエチレングリコール、トリエチレングリコールモノメチルエーテル、1-メトキシ-2-プロパノール、1-エトキシ-2-プロパノール、ジプロピレングリコール、ジプロピレングリコールモノメチルエーテル、ジプロピレングリコールモノメチルエーテル、ジプロピレングリコール又はこれらの混合物が挙げられる。当該水溶性有機溶剤の使用量は、アゾ顔料等に対して0.1~5質量倍が好ましい。混練温度は、20~130℃が好ましく、40~110℃が特に好ましい。混練機としては、例えばニーダーやミックスマラー等が使用できる。

【0130】

<ビニルポリマー>

本発明に用いられるビニルポリマーは、下記一般式(I)で表される疎水性構造単位(a)と、親水性構造単位(b)とを含む。

【0131】

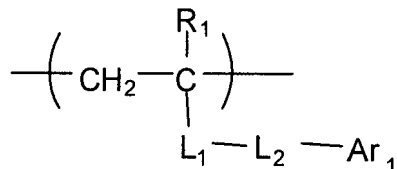
(一般式(I)で表される疎水性構造単位(a))

一般式（I）で表される疎水性構造単位（a）（以下単に「疎水性構造単位（a）」と称する場合がある。）の含有量は、顔料の分散安定性、吐出精度、洗浄性の観点から、前記ビニルポリマーの全質量のうち10質量%以上75質量%未満であることが好ましく、20質量%以上70質量%未満であることがより好ましく、30質量%以上60質量%未満であることが特に好ましい。

【0132】

【化31】

一般式（I）：



10

【0133】

一般式（I）中、 R_1 は水素原子、メチル基、又はハロゲン原子を表し、 L_1 は $-\text{COO}-$ 、 $-\text{OCO}-$ 、 $-\text{CONR}_2-$ 、 $-\text{O}-$ 、又は置換若しくは無置換のフェニレン基を表し、 R_2 は水素原子、アルキル基を表す。 L_2 は単結合又は、2価の連結基を表す。 Ar_1 は芳香環から誘導される1価の基を表す。

20

【0134】

R_1 は水素原子、メチル基、又はハロゲン原子を表し、水素原子又はメチル基がより好ましく、メチル基が更に好ましい。

【0135】

R_2 が表すアルキル基としては、好ましくは炭素数1～10のアルキル基であり、例えば、メチル基、エチル基、*n*-プロピル基、イソ*i*-プロピル基、*t*-ブチル基等を挙げることができる。

ここで、前記置換基としては、ハロゲン原子、アルキル基、アルコキシ基、水酸基等、シアノ基等が挙げられるが、特に限定されない。

【0136】

30

L_1 は $-\text{COO}-$ 、 $-\text{OCO}-$ 、 $-\text{CONR}_2-$ 、 $-\text{O}-$ 、又は置換若しくは無置換のフェニレン基を表し、 $-\text{COO}-$ が好ましい。

L_2 が2価の連結基である場合、好ましくは炭素数1～30の連結基であり、より好ましくは炭素数1～25の連結基であり、更に好ましくは炭素数1～20の連結基である。中でもアルキレンオキシ基及びアルキレン基より選択される少なくとも一つを含む炭素数1～25の2価の連結基であることが好ましく、 $-(\text{CH}_2 - \text{CH}_2)_n-$ 、 $-(\text{CH}_2\text{O})_n-$ 又は $-(\text{CH}_2 - \text{CH}_2 - \text{O})_n-$ （ n は平均の繰り返し単位数を表し、 $n=1\sim6$ であり、 n は1又は2が好ましく、1がより好ましい）であることが好ましい。

【0137】

40

Ar_1 における芳香環としては、特に限定されないが、ベンゼン環、炭素数8以上炭素数18以下の縮環型芳香環、芳香環が縮環したヘテロ環、又は二個以上連結したベンゼン環が挙げられる。

【0138】

前記炭素数8以上の縮環型芳香環とは、少なくとも二個以上のベンゼン環が縮環した芳香環、及び／又は、少なくとも一種以上の芳香環と該芳香環に縮環した脂環式炭化水素で環が構成される、炭素数8以上の芳香族化合物である。具体的な例としては、ナフタレン環、アントラセン環、フルオレン環、フェナントレン環、アセナフテン環などが挙げられる。

【0139】

前記芳香環が縮環したヘテロ環とは、ヘテロ原子を含まない芳香族化合物（好ましくは

50

ベンゼン環)と、ヘテロ原子を有する環状化合物とが少なくとも縮環した化合物である。ここで、ヘテロ原子を有する環状化合物は5員環又は6員環であることが好ましい。ヘテロ原子としては、窒素原子、酸素原子、又は硫黄原子が好ましい。ヘテロ原子を有する環状化合物は複数のヘテロ原子を有していても良く、この場合、ヘテロ原子は互いに同じでも異なってもよい。芳香環が縮環したヘテロ環の具体例としては、フタルイミド環、アクリドン環、カルバゾール環、ベンゾオキサゾール環、ベンゾチアゾール環などが挙げられる。

【0140】

一般式(I)で表される疎水性構造単位(a)はアクリレート及び(メタ)アクリレートに由来の構造単位より選択される少なくとも一つであることが好ましい。アクリレート及び(メタ)アクリレートに由来の構造単位より選択される少なくとも一つであれば、主鎖に対して芳香環をエステル結合を介して結合することができ、顔料に対して吸着性などの相互作用が期待できる芳香環が主鎖から自由度を持った立体構造をとることができる。

また、一般式(I)で表される疎水性構造単位(a)はベンゼン環、炭素数8以上の縮環型芳香環、芳香環が縮環したヘテロ環、又は二個以上連結したベンゼン環から誘導される1価の基を含むことが好ましい。前記の芳香環を採用することで顔料との吸着性などの相互作用が発揮できるからである。

【0141】

Ar_1 としては、ベンゼン環、ナフタレン環、アントラセン環、フルオレン環、フェナントレン環、アセナフテン環、フタルイミド環、アクリドン環、カルバゾール環、ベンゾオキサゾール環又はベンゾチアゾール環が好ましく、ベンゼン環、ナフタレン環、アクリドン環がより好ましく、ベンゼン環が更に好ましい。

【0142】

上記一般式(I)の中でも、 R_1 が水素原子又はメチル基であり、 L_1 が(主鎖側) $-COO-$ であり、 L_2 がアルキレンオキシ基及びアルキレン基より選択される少なくとも一つを含む炭素数1~25の2価の連結基であり、 Ar_1 がアリール環である構造単位の組合せが好ましく、より好ましくは、 R_1 が水素原子又はメチル基であり、 L_1 が(主鎖側) $-COO-$ であり、 L_2 が(主鎖側) $-(CH_2-CH_2-O)_n-$ であり(n は平均の繰り返し単位数をあらわし、 $n=1\sim6$ であり、 n は1又は2が好ましく、1がより好ましい)、 Ar_1 がベンゼン環である構造単位の組合せである。

【0143】

以下に、一般式(I)で表される疎水性構造単位(a)を形成しうるモノマーの具体例を挙げるが、本発明は以下の具体例に制限されるものではない。

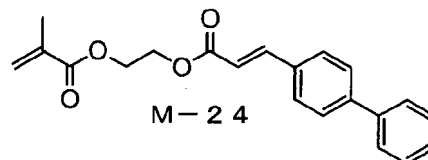
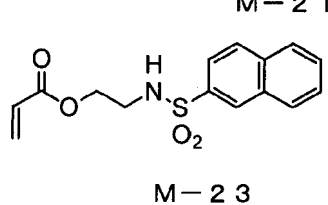
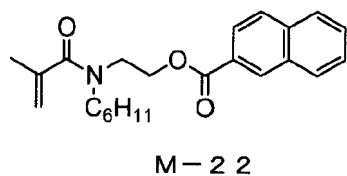
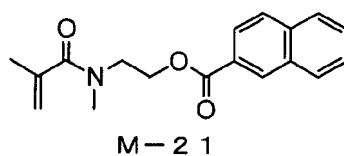
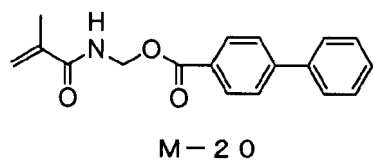
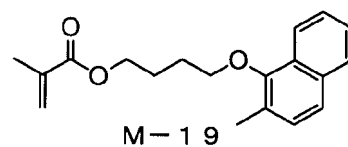
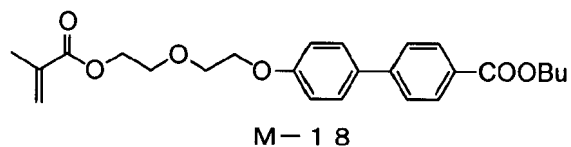
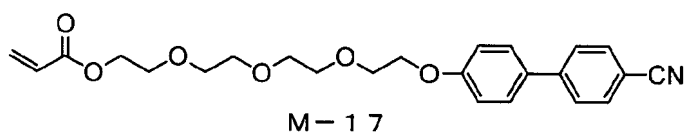
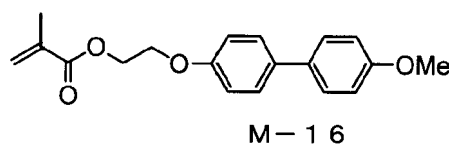
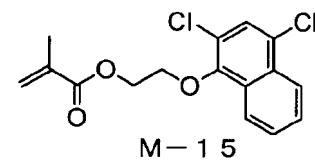
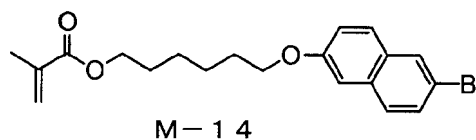
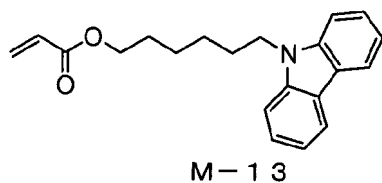
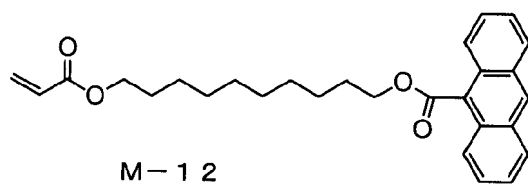
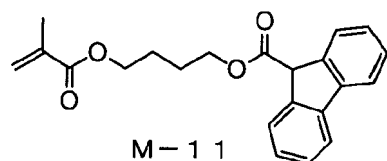
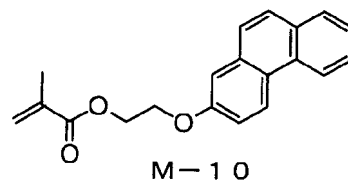
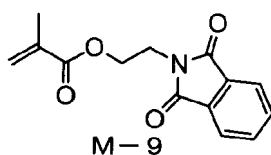
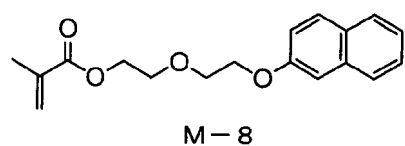
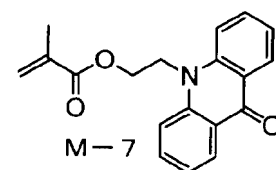
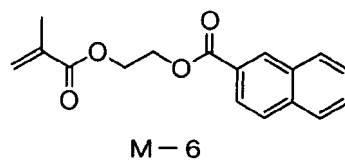
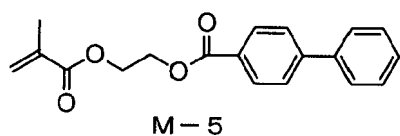
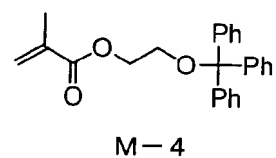
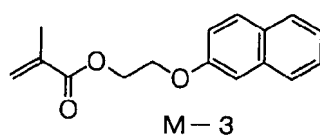
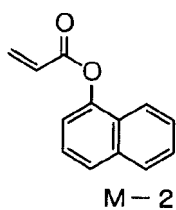
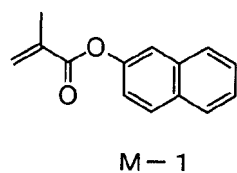
【0144】

10

20

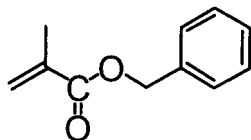
30

【化 3 2】

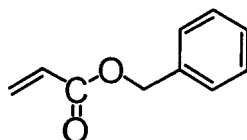


【0145】

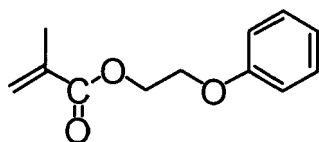
【化 3 3】



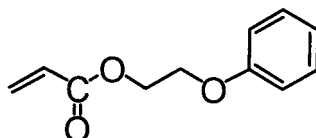
M-25



M-26



M-27



M-28

10

【0146】

本発明において、一般式（I）で表される疎水性構造単位（a）のなかでも、分散安定性の観点から、ベンジルアクリレート、ベンジルメタアクリレート、フェノキシエチルアクリレート、及びフェノキシエチルメタアクリレートのいずれかより選択される少なくとも一つに由来する構造単位であることが好ましく、フェノキシエチルメタアクリレート、ベン

20

ジルアクリレート及びベンジルメタアクリレートより選択される少なくとも一つを含むことがより好ましい。

本発明においては、前記疎水性構造単位（a）がフェノキシエチル（メタ）アクリレートに由来の構造単位を総量でビニルポリマー全質量に対して20質量%以上含むことがより好ましく、20～80質量%含むことが更に好ましい。

【0147】

（アクリル酸又はメタクリル酸の、アルキルエステルに由来する疎水性構造単位（a2））

本発明に用いられるビニルポリマーは、疎水性構造単位として、上記疎水性構造単位（a）のほかに、アクリル酸又はメタクリル酸の、アルキルエステルに由来する疎水性構造単位（a2）を含有してもよい。

30

アルキルエステルの炭素数は炭素数1～18が好ましく、炭素数1～8がより好ましく、炭素数1～4が更に好ましく、炭素数1～2が特に好ましい。

疎水性構造単位（a2）の含有量は高分子ビニルポリマー中に好ましくは5質量%以上70質量%以下、更に好ましくは、20質量%以上60質量%以下である。

疎水性構造単位（a2）の具体例としては、メチル（メタ）アクリレート、エチル（メタ）アクリレート、（イソ）プロピル（メタ）アクリレート、（イソ又はターシャリー）ブチル（メタ）アクリレート、シクロヘキシル（メタ）アクリレート、ドデシル（メタ）アクリレート、ステアシル（メタ）アクリレート等の（メタ）アクリレート類が挙げられる。

40

中でもメチル（メタ）アクリレート、エチル（メタ）アクリレート、シクロヘキシル（メタ）アクリレートが好ましい。

【0148】

（親水性構造単位（b））

本発明におけるビニルポリマーに含まれる親水性構造単位（b）について説明する。

親水性構造単位（b）の例として、カルボン酸を有するアクリル酸、メタクリル酸を挙げることができる。また、非イオン性の親水性基を含有する親水性構造単位を挙げることができる。

【0149】

前記親水性構造単位（b）の例として、親水性の官能基を有する（メタ）アクリレート

50

類、(メタ)アクリルアミド類、ビニルエステル類が挙げられる。

親水性の官能基としては、水酸基、アミノ基、(窒素原子が無置換の)アミド基及び、後述するようなポリエチレンオキシド、ポリプロピレンオキシド等のアルキレンオキシド重合体が挙げられる。

これらのうち、ヒドロキシエチル(メタ)アクリレート、ヒドロキシブチル(メタ)アクリレート、(メタ)アクリルアミド、アミノエチルアクリレート、アミノプロピルアクリレート、アルキレンオキシド重合体を含有する(メタ)アクリレートが特に好ましい。

【0150】

前記親水性構造単位(b)の例として、アルキレンオキシド重合体構造を有する親水性の構造単位を挙げることができる。

前記アルキレンオキシド重合体のアルキレンとしては、親水性の観点から炭素数1~6が好ましく、炭素数2~6がより好ましく、炭素数2~4が特に好ましい。

また、前記アルキレンオキシド重合体の重合度としては、1~120が好ましく、1~60がより好ましく、1~30が特に好ましい。

【0151】

前記親水性構造単位(b)の例として、水酸基を含む親水性の構造単位を挙げることができる。水酸基数としては、特に限定されず、ビニルポリマーの親水性、重合時の溶媒や他のモノマーとの相溶性の観点から、1~4が好ましく、1~3がより好ましく、1~2が特に好ましい。

【0152】

親水性構造単位(b)の好ましい例として、アクリル酸、メタクリル酸を挙げることができる。

【0153】

前記親水性構造単位(b)の含有量は、ビニルポリマー全質量に対して、4質量%以上40質量%以下が好ましく、6質量%以上25質量%以下が好ましく、8質量%以上15質量%以下がより好ましい。

【0154】

(構造単位(c))

本発明におけるビニルポリマーは、前述の通り、前記疎水性構造単位(a)、前記疎水性構造単位(a2)、及び前記親水性構造単位(b)とは異なる構造を有する構造単位(c)(以下、単に「構造単位(c)」という。)を含有することでもできる。

前記構造単位(c)の含有量は、ビニルポリマー全質量に対して、15質量%以上80質量%以下が好ましく、25質量%以上70質量%以下が好ましく、40質量%以上60質量%以下がより好ましい。

【0155】

前記構造単位(c)が疎水性の構造単位である場合のモノマーは、重合体を形成しうる官能基と疎水性の官能基とを有していれば特に制限はなく、公知の如何なるモノマー類をも用いることができる。

前記疎水性の構造単位を形成しうるモノマーとしては、入手性、取り扱い性、汎用性の観点から、ビニルモノマー類、((メタ)アクリルアミド類、スチレン類、ビニルエステル類等)が好ましい。

【0156】

(メタ)アクリルアミド類としては、N-シクロヘキシル(メタ)アクリルアミド、N-(2-メトキシエチル)(メタ)アクリルアミド、N,N-ジアリル(メタ)アクリルアミド、N-アリル(メタ)アクリルアミドなどの(メタ)アクリルアミド類が挙げられる。

【0157】

スチレン類としては、スチレン、メチルスチレン、ジメチルスチレン、トリメチルスチレン、エチルスチレン、イソイプロピルスチレン、n-ブチルスチレン、tert-ブチルスチレン、メトキシスチレン、ブトキシスチレン、アセトキシスチレン、クロロスチ

10

20

30

40

50

レン、ジクロロスチレン、ブロモスチレン、クロロメチルスチレン、ビニル安息香酸メチル、及び α -メチルスチレン、ビニルナフタレン等などが挙げられ、スチレン、 α -メチルスチレンが好ましい。

【0158】

ビニルエステル類としては、ビニルアセテート、ビニルクロロアセテート、ビニルプロピオネート、ビニルブチレート、ビニルメトキシアセテート、及び安息香酸ビニルなどのビニルエステル類が挙げられ、中でも、ビニルアセテートが好ましい。

これらは、それぞれ単独で又は2種以上を混合して用いることができる。

【0159】

ビニルポリマーは疎水性構造単位(a)、親水性構造単位(b)のみから構成されることも可能である。

インクジェット記録用水性インクとしてより好ましくは、前記ビニルポリマーの前記疎水性構造単位(a)がフェノキシエチル(メタ)アクリレートに由来の構造単位及びベンジル(メタ)アクリレートに由来の構造単位より選択される少なくとも一つを総量でビニルポリマー全質量に対して20質量%以上(好ましくは20~80質量%)含み、前記親水性構造単位(b)がアクリル酸及びメタクリル酸に由来の構造単位より選択される少なくとも一つを総量でビニルポリマー全質量に対して30質量%以下(好ましくは8~30質量%)含むものがより好ましい。

【0160】

本発明のビニルポリマーの酸価は、顔料分散性、保存安定性の観点から、30mg KOH/g以上300mg KOH/g以下であることが好ましく、40mg KOH/g以上150mg KOH/g未満であることがより好ましく、50mg KOH/g以上100mg KOH/gであることが特に好ましい。

なお、ここでいう酸価とは、ビニルポリマーの1gを完全に中和するのに要するKOHの質量(mg)で定義され、JIS規格(JISK0070、1992)記載の方法により測定することができる。

【0161】

本発明におけるビニルポリマーは、各構造単位が不規則的に導入されたランダム共重合体であっても、規則的に導入されたブロック共重合体であっても良く、ブロック共重合体である場合の各構造単位は、如何なる導入順序で合成されたものであっても良く、同一の構成成分を2度以上用いてもよいが、ランダム共重合体であることが汎用性、製造性の点で好ましい。

【0162】

更に、本発明で用いるビニルポリマーの分子量範囲は、質量平均分子量(Mw)で、好ましくは3万~15万であり、より好ましくは3万~10万であり、更に好ましくは3万~8万である。

前記分子量を上記範囲とすることにより、分散剤としての立体反発効果が良好な傾向となり、また立体効果により顔料への吸着に時間がかからなくなる傾向の観点から好ましい。

また、本発明で用いるビニルポリマーの分子量分布(質量平均分子量値/数平均分子量値で表される)は、1~6であることが好ましく、1~4であることがより好ましい。

前記分子量分布を上記範囲とすることは、インクの分散安定性、吐出安定性の観点から好ましい。ここで数平均分子量及び、質量平均分子量は、TSKg e l G M H x L、TSKg e l G 4 0 0 0 H x L、TSKg e l G 2 0 0 0 H x L(何れも東ソー(株)製の商品名)のカラムを使用したGPC分析装置により、溶媒THF、示差屈折計により検出し、標準物質としてポリスチレンを用い換算して表した分子量である。

【0163】

本発明に用いられるビニルポリマーは、種々の重合方法、例えば溶液重合、沈澱重合、懸濁重合、沈殿重合、塊状重合、乳化重合により合成することができる。重合反応は回分式、半連続式、連続式等の公知の操作で行うことができる。

重合の開始方法はラジカル開始剤を用いる方法、光又は放射線を照射する方法等がある。これらの重合方法、重合の開始方法は、例えば鶴田禎二「高分子合成方法」改定版（日刊工業新聞社刊、1971）や大津隆行、木下雅悦共著「高分子合成の実験法」化学同人、昭和47年刊、124～154頁に記載されている。

上記重合方法のうち、特にラジカル開始剤を用いた溶液重合法が好ましい。溶液重合法で用いられる溶剤は、例えば酢酸エチル、酢酸ブチル、アセトン、メチルエチルケトン、メチルイソブチルケトン、シクロヘキサノン、テトラヒドロフラン、ジオキサン、N,N-ジメチルホルムアミド、N,N-ジメチルアセトアミド、ベンゼン、トルエン、アセトニトリル、塩化メチレン、クロロホルム、ジクロロエタン、メタノール、エタノール、1-プロパノール、2-プロパノール、1-ブタノールのような種々の有機溶剤の単独あるいは2種以上の混合物でも良いし、水との混合溶媒としても良い。

重合温度は生成するポリマーの分子量、開始剤の種類などに関連して設定する必要があるが、通常、0℃～100℃程度であるが、50～100℃の範囲で重合を行うことが好ましい。

反応圧力は、適宜選定可能であるが、通常は、1～100kg/cm²、特に、1～30kg/cm²程度が好ましい。反応時間は、5～30時間程度である。得られた樹脂は再沈殿などの精製を行っても良い。

【0164】

本発明における前記ビニルポリマーの添加量比率は、分散安定性の観点から、顔料に対して質量基準で、10%以上100%以下の範囲が好ましく、30%以上60%以下がより好ましい。

【0165】

＜アセチレングリコール系界面活性剤＞

本発明に用いられるアセチレングリコール系界面活性剤について説明する。

アセチレングリコール系界面活性剤は、他の界面活性剤と比較して、表面張力及び界面張力を適正に保つ能力に優れており、かつ起泡性がほとんどないという特性を有する。これにより、アセチレングリコール系界面活性剤を含有するインクは、表面張力やヘッドノズル面などインクと接触するプリンター部材との界面張力を適正に保つことができる。またアセチレングリコール系界面活性剤によって、インクの液物性を好適に調整することもできる。更に、上記アゾ顔料及び上記ビニルポリマーとアセチレングリコール系界面活性剤を組み合わせることで、インクの加温保存安定性を向上させることができる。

【0166】

アセチレングリコール系界面活性剤としては、例えば、2,4,7,9-テトラメチル-5-デシン-4,7-ジオール、3,6-ジメチル-4-オクチン-3,6-ジオール、3,5-ジメチル-1-ヘキシン-3オール、2,4-ジメチル-5-ヘキシン-3オールなどが挙げられる。

また、市販品としても入手可能であり、例えば、サーフィノール104、104E、104H、104A、104BC、104DPM、104PA、104PG-50、104S、420、440、465、485、SE、SE-F、504、61、82、DF37、DF110D、CT111、CT121、CT131、CT136、TG、GA（以上全て商品名、日信化学工業（株）社製）、オルフィンB、Y、P、A、STG、SPC、E1004、E1010、PD-001、PD-002W、PD-003、PD-004、EXP.4001、EXP.4036、EXP.4051、AF-103、AF-104、AK-02、SK-14、AE-3（以上全て商品名、日信化学工業（株）社製）、アセチレノールE00、E13T、E40、E60、E81、E100、E200（以上全て商品名、川研ファインケミカル（株）社製）等が挙げられ、なかでもサーフィノール465、オルフィンE1010、アセチレノールE100、E200が好適である。

【0167】

本発明におけるアセチレングリコール系界面活性剤の添加量は、インクの吐出精度、インクの加温保存安定性、コゲーション防止、メンテナンス性の観点から、インク全量に対

して質量基準で、0.5%～10%の範囲が好ましく、1%～5%の範囲がより好ましい。

【0168】

<多価アルコール>

本発明に用いられる多価アルコールについて説明する。

本発明に用いられる多価アルコールは、ポリグリセリン及び下記一般式(3)で示される化合物から選ばれる。多価アルコールと、上記アゾ顔料及び上記ビニルポリマーを組み合わせる使用することにより、理由は明確ではないが、発熱素子表面への堆積が抑制され、分散性に優れていて、凝集が抑制されるため、従来から問題となっているコゲーション、加温インク保存性、メンテナンス性についての改善が認められる。

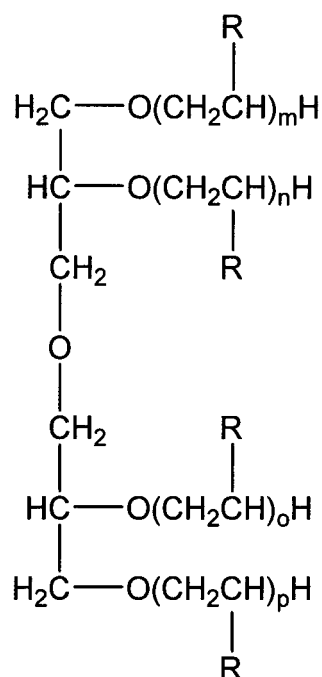
10

これらの多価アルコールは、1種のみを単独で使用してもよいし、2種以上を組み合わせ使用してもよい。また本発明の効果の観点から、なかでも下記一般式(3)で示される化合物(以下、「化合物(3)」という場合がある。)を使用することが好ましい。

【0169】

【化34】

一般式(3)：



20

30

【0170】

一般式(3)中、Rは、それぞれ独立に、水素原子又は炭素数1～5のアルキル基を示し、m、n、o及びpは、いずれも整数であり、かつ、m+n+o+pは0～200である。

40

Rで表されるアルキル基としては、炭素原子数1～3のメチル基、エチル基又はプロピル基であることが好ましい。炭素原子数が6以上の化合物では、インクへの溶解が困難となる。

m、n、o及びpは、いずれも「CH₂CHRO」で示される構造単位の繰り返し数を示す整数である。m+n+o+pの合計値は、0～200の範囲の整数であり、好ましくは0～150の範囲、より好ましくは1～130の範囲である。これらの合計値が200より大きい化合物では、インクの粘度が極めて高くなり、目詰まりを発生し易くなる。

一般式(3)で表される化合物としては、例えば、SC-E450(Rが水素原子、m+n+o+pの合計値が約6)、SC-E750(Rが水素原子、m+n+o+pの合計値が約13)、SC-E1000、SC-E1500、SC-E2000、SC-P40

50

0 (Rがメチル基、 $m+n+o+p$ の合計値が約4)、SC-P750、SC-P1000、SC-P1200、SC-P1600、SY-DP20、SY-DP14、SY-DP14T、SY-DP9、SY-DP4 (以上全て商品名、坂本薬品社製) が市販品として入手可能である。

【0171】

ポリグリセリンとしては、特に限定はされないが、重合度が2~30 (分子量: 166~2500) の範囲のものが好ましい。ポリグリセリンは公知の合成方法により合成することができるが、市販品として、例えば、坂本薬品工業株式会社のポリグリセリン#310、ポリグリセリン#500、ポリグリセリン#750 (商品名) として入手することもできる。

10

【0172】

本発明における多価アルコールの添加量は、インクの吐出精度、インクの加温保存安定性、コゲーション防止、メンテナンス性の観点から、インク全量に対して質量基準で、0.01%~20%の範囲が好ましく、0.05%~15%の範囲がより好ましい。

【0173】

<着色剤>

本発明における顔料分散体は、(A) 前記一般式(1)で表されるアゾ顔料、その互変異性体、それらの塩又は水和物、及び(B) 前記一般式(I)で表される疎水性構造単位(a)と親水性構造単位(b)とを含むビニルポリマー (以下、「樹脂」又は「特定樹脂」ともいう) を含有する。好ましくは、前記(A) 及び(B) を含有するビニルポリマー粒子である。

20

本発明における顔料を含有するビニルポリマー粒子は、特定樹脂及び顔料等を用いて従来の物理的、化学的方法によって製造することができる。例えば、特開平9-151342号、特開平10-140065号、特開平11-209672号、特開平11-172180号、特開平10-25440号、又は特開平11-43636号の各公報に記載の方法により製造することができる。具体的には、特開平9-151342号及び特開平10-140065号の各公報に記載の転相法と酸析法等が挙げられ、中でも、分散安定性の点で転相法が好ましい。

【0174】

a) 転相法

30

転相法は、基本的には、自己分散能又は溶解能を有する樹脂と顔料との混合溶融物を水に分散させる自己分散 (転相乳化) させる方法であり、ビニルポリマー粒子を得ることができる。ここで、混合溶融物とは、溶解せず混合した状態、溶解して混合した状態、又はこれら両者の状態のいずれの状態を含むものをいう。「転相法」のより具体的な製造方法は、特開平10-140065号に記載の方法が挙げられる。

b) 酸析法

酸析法は、樹脂と顔料とからなる含水ケーキを用意し、その含水ケーキ中の、樹脂が有するアニオン性基の一部又は全部を、塩基性化合物を用いて中和することによって、ビニルポリマー粒子を製造する方法である。

酸析法は、具体的には、(1) 樹脂と顔料とをアルカリ性水性媒体中に分散し、必要に応じて加熱処理を行なって樹脂のゲル化を図る工程と、(2) pHを中性又は酸性にすることによって樹脂を疎水化して、樹脂を顔料に強く固着する工程と、(3) 必要に応じて、濾過及び水洗を行って含水ケーキを得る工程と、(4) 含水ケーキを中の、樹脂が有するアニオン性基の一部又は全部を、塩基性化合物を用いて中和し、その後、水性媒体中に再分散する工程と、(5) 必要に応じて加熱処理を行い、樹脂のゲル化を図る工程と、を含む方法がある。

40

【0175】

上記の転相法及び酸析法のより具体的な製造方法は、特開平9-151342号、特開平10-140065号の各公報に記載の方法が挙げられる。

【0176】

50

本発明のインクジェット記録用水性インクにおいて、ビニルポリマー粒子は、特定樹脂を水性分散物として得る工程、具体的には下記の工程（１）及び工程（２）を含む方法によりビニルポリマー粒子の分散物を調製する調製工程を設けて得ることができ、また、本発明のインクジェット記録用水性インクの製造は、この調製工程を設け、得られたビニルポリマー粒子の分散物を水と水溶性有機溶媒と共に用いて水性インクとする方法により好適に行なえる。

工程（１）：既述の本発明における特定樹脂、有機溶媒、中和剤、顔料及び水を含有する混合物を攪拌等により分散して分散物を得る工程

工程（２）：前記分散物から前記有機溶媒を除去する工程

【０１７７】

攪拌方法には特に制限はなく、一般に用いられる混合攪拌装置や、必要に応じて超音波分散機や高圧ホモジナイザー、ビーズミル等の分散機を用いることができる。本発明において、分散処理は、例えば、ボールミル、ロールミル、ビーズミル、高圧ホモジナイザー、高速攪拌型分散機、超音波ホモジナイザーなどを用いて行なうことができる。

分散方法としては、メディアレス分散及びメディア分散のいずれでも構わないが、メディアレス分散が好ましい。

【０１７８】

メディアレス分散としては、高圧ホモジナイザーによる分散処理が好ましい。

高圧ホモジナイザー処理について、従来の顔料を用いた高圧ホモジナイザーによる分散処理では、分散性を上げるために最初にジルコニアビーズ等の分散メディアを用いたビーズミルなどによる分散が行われてきた。通常の顔料の分散適性では所望の粒度分布を有する顔料分散体を得るために、強いせん断力を必要とするからである。

一方、本発明で使用する一般式（１）で表されるアゾ顔料は、分散性に優れるため、分散メディアを使用しない高圧ホモジナイザーによる分散で、所望の粒度分布と粗大粒子数を有する顔料分散体を得ることができる。

本発明において使用される高圧ホモジナイザーとしては、特に制限はないが、具体的な市販装置としてはゴーリンホモジナイザー、マイクロフルイダイザー、スターバースト、DeBEE 2000等を挙げることができる。

【０１７９】

高圧ホモジナイザーの処理圧力は100～150Mpaであることが好ましく、120～150Mpaであることがより好ましい。また高圧ホモジナイザー処理のパス回数は1～10パスであることが好ましく、2～6パスであることがより好ましく、2～4パスであることが更に好ましい。高圧ホモジナイザーを用いた従来の顔料の分散では、事前に分散メディア分散処理を行った場合であっても、処理圧力は150Mpa以上必要であり、パス回数も6パス以上必要であるところ、本発明においては、処理圧力もパス回数も小さい値に抑えることができるので、製造工程を簡略化できるという付随効果を有する。

【０１８０】

上記工程（１）において用いる有機溶媒としては、アルコール系溶媒、ケトン系溶媒、及びエーテル系溶媒が好ましく挙げられる。

前記アルコール系溶媒としては、イソ i ープロピルアルコール、n ーブタノール、t ーブタノール、エタノール等が挙げられる。前記ケトン系溶媒としては、アセトン、メチルエチルケトン、ジエチルケトン、メチルイソブチルケトン等が挙げられる。前記エーテル系溶媒としては、ジブチルエーテル、ジオキサン等が挙げられる。これらの溶媒の中では、メチルエチルケトン等のケトン系溶媒とイソ i ープロピルアルコール等のアルコール系溶媒が好ましく、メチルエチルケトンが最も好ましい。

【０１８１】

上記工程（１）において用いる中和剤は、解離性基の一部又は全部が中和され、特定樹脂が水中で安定した乳化又は分散状態を形成するために用いられる。特定樹脂が解離性基としてアニオン性の解離基を有

10

20

30

40

50

する場合、用いられる中和剤としては有機アミン化合物、アンモニア、アルカリ金属の水酸化物等の塩基性化合物が挙げられる。前記有機アミン化合物の例としては、モノメチルアミン、ジメチルアミン、トリメチルアミン、モノエチルアミン、ジエチルアミン、トリエチルアミン、モノプロピルアミン、ジプロピルアミン、モノエタノールアミン、ジエタノールアミン、トリエタノールアミン、N，N－ジメチル－エタノールアミン、N，N－ジエチル－エタノールアミン、2－ジメチルアミノ－2－メチル－1－プロパノール、2－アミノ－2－メチル－1－プロパノール、N－メチルジエタノールアミン、N－エチルジエタノールアミン、モノイソプロパノールアミン、ジイソプロパノールアミン、トリイソプロパノールアミン等が挙げられる。前記アルカリ金属の水酸化物としては、水酸化リチウム、水酸化ナトリウム、水酸化カリウム等が挙げられる。中でも、水中での分散安定化の観点から、水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、トリエチルアミン、トリエタノールアミンが好ましく、特に水酸化ナトリウム、水酸化カリウムが好ましい。

10

【0182】

前記塩基性化合物の含有量は、解離性基100モル%に対して、5～120モル%の範囲が好ましく、10～120モル%の範囲がより好ましく、80～120モル%の範囲が更に好ましい。該含有量は、5モル%以上であると水中での分散安定化に効果的であり、120モル%以下であると水溶性成分を低下させる効果がある。

【0183】

前記工程(2)では、前記工程(1)で得られた分散物から、減圧蒸留等の常法により有機溶剤を留去して水系へと転相することで、顔料の粒子表面が前記樹脂で被覆された顔料を含有するビニルポリマー粒子の分散物を得ることができる。得られた分散物中の有機溶媒は実質的に除去されており、ここでの有機溶媒の量は、好ましくは0.2質量%以下であり、更に好ましくは0.1質量%以下である。

20

【0184】

より具体的には、例えば、(1)アニオン性基を有する、本発明における特定樹脂を有機溶剤に溶解した溶液と塩基性化合物(中和剤)と水とを混合して中和する工程と、(2)得られた混合液に顔料を混合して懸濁液とした後に、分散機等で顔料を分散して顔料分散液を得る工程と、(3)有機溶剤を例えば蒸留して除去することによって、顔料を、アニオン性基を有する特定樹脂で被覆し、水性媒体中に分散させて水性分散体とする工程と、を設けて、インクジェット記録用水性インクを製造することができる。

30

なお、より具体的には、特開平11-2096722号公報及び特開平11-172180号の記載を参照することができる。

【0185】

本発明のインクジェット記録用水性インク中に含まれるビニルポリマー粒子の平均粒子径は、10～400nmの範囲であることが好ましく、10～200nmの範囲がより好ましく、50～150nmの範囲が更に好ましい。平均粒子径は、10nm以上であると製造適性が向上し、400nm以下であると保存安定性が良好になる。なお、ビニルポリマー粒子の粒径分布に関しては、特に制限はなく、広い粒径分布を持つもの、又は単分散の粒径分布を持つもののいずれでもよい。

ビニルポリマー粒子の平均粒子径及び粒径分布は、ナノトラック粒度分布測定装置UPA-EX150(日機装(株)製)を用いて、動的光散乱法により体積平均粒径を測定することにより求められるものである。

40

【0186】

本発明において、分散処理は、例えば、ボールミル、ロールミル、ビーズミル、高圧ホモジナイザー、高速攪拌型分散機、超音波ホモジナイザーなどを用いて行なうことができる。

【0187】

本発明におけるビニルポリマー粒子のインクジェット記録用水性インク中における含有量としては、インクジェット記録用水性インクの分散安定性、濃度の観点から、1～10質量%が好ましく、2～8質量%がより好ましく、2～6質量%が特に好ましい。

50

また、インク組成物中、前記一般式(1)で表されるアゾ顔料の含有量が2～10質量%であることが好ましく、3～8質量%であることがより好ましい。

【0188】

<水溶性溶媒>

本発明のインクジェット記録用水性インクは水溶性溶媒を必須成分として含む。水溶性溶媒としては、水溶性有機溶剤が挙げられる。水溶性有機溶剤は乾燥防止剤、湿潤剤あるいは浸透促進剤の目的で使用される。

ノズルのインク噴射口において該インクジェット用インクが乾燥することによる目詰まりを防止する目的で乾燥防止剤が用いられ、乾燥防止剤や湿潤剤としては、水より蒸気圧の低い水溶性有機溶剤が好ましい。また、インクジェット用インクを紙により良く浸透させる目的で浸透促進剤として、水溶性有機溶剤が好適に使用される。

10

【0189】

水溶性有機溶媒の例として、グリセリン、1, 2, 6-ヘキサントリオール、トリメチロールプロパン、エチレングリコール、プロピレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、テトラエチレングリコール、ペンタエチレングリコール、ジブピレングリコール、ポリオキシエチレングリセリルエーテル、ポリオキシプロピレングリセリルエーテル、2-ブテン-1, 4-ジオール、2-エチル-1, 3-ヘキサンジオール、2-メチル-2, 4-ペンタンジオール、1, 2-オクタンジオール、1, 2-ヘキサンジオール、1, 2-ペンタンジオール、4-メチル-1, 2-ペンタンジオール等のアルカンジオール(多価アルコール類)；ヴルコース、マンノース、フルクトース、リボース、キシロース、アラビノース、ガラクトース、アルドン酸、グルシトール、(ソルビット)、マルトース、セロビオース、ラクトース、スクロース、トレハロース、マルトリオース等の糖類；糖アルコール類；ピアルロン酸類；尿素類等のいわゆる固体湿潤剤；エタノール、メタノール、ブタノール、プロパノール、イソプロパノールなどの炭素数1～4のアルキルアルコール類；エチレングリコールモノメチルエーテル、エチレングリコールモノエチルエーテル、エチレングリコールモノブチルエーテル、エチレングリコールモノメチルエーテルアセテート、ジエチレングリコールモノメチルエーテル、ジエチレングリコールモノエチルエーテル、ジエチレングリコールモノ-n-プロピルエーテル、エチレングリコールモノ-isopropylエーテル、ジエチレングリコールモノ-isopropylエーテル、エチレングリコールモノ-n-ブチルエーテル、エチレングリコールモノ-tert-butylエーテル、ジエチレングリコールモノ-tert-butylエーテル、プロピレングリコールモノメチルエーテル、プロピレングリコールモノエチルエーテル、プロピレングリコールモノ-tert-butylエーテル、プロピレングリコールモノ-n-プロピルエーテル、プロピレングリコールモノ-isopropylエーテル、ジプロピレングリコールモノメチルエーテル、ジプロピレングリコールモノエチルエーテル、ジプロピレングリコールモノ-n-プロピルエーテル、ジプロピレングリコールモノ-isopropylエーテルなどのグリコールエーテル類；2-ピロリドン、N-メチル-2-ピロリドン、1, 3-ジメチル-2-イミダゾリジノン、ホルムアミド、アセトアミド、ジメチルスルホキシド、ソルビット、ソルビタン、アセチン、ジアセチン、トリアセチン、スルホラン等が挙げられ、これらの1種又は2種以上を用いることができる。

20

30

40

【0190】

乾燥防止剤や湿潤剤の目的としては、ポリオール化合物が有用であり、例えば、グリセリン、エチレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、プロピレングリコール、ジプロピレングリコール、トリプロピレングリコール、1, 3-ブタンジオール、2, 3-ブタンジオール、1, 4-ブタンジオール、3-メチル-1, 3-ブタンジオール、1, 5-ペンタンジオール、テトラエチレングリコール、1, 6-ヘキサンジオール、2-メチル-2, 4-ペンタンジオール、ポリエチレングリコール、1, 2, 4-ブタントリオール、1, 2, 6-ヘキサントリオール、などが挙げられる。これらは、1種単独で使用してもよいし、2種以上を併用してもよい。

【0191】

50

浸透剤の目的としては、ポリオール化合物が好ましく、脂肪族ジオールとしては、例えば、2-エチル-2-メチル-1, 3-プロパンジオール、3, 3-ジメチル-1, 2-ブタンジオール、2, 2-ジエチル-1, 3-プロパンジオール、2-メチル-2-プロピル-1, 3-プロパンジオール、2, 4-ジメチル-2, 4-ペンタンジオール、2, 5-ジメチル-2, 5-ヘキサジオール、5-ヘキセン-1, 2-ジオール、2-エチル-1, 3-ヘキサジオールなどが挙げられる。これらの中でも、2-エチル-1, 3-ヘキサジオール、2, 2, 4-トリメチル-1, 3-ペンタンジオールが好ましい例として挙げるができる。

【0192】

本発明に使用される水溶性溶媒は、単独で使用しても、2種類以上混合して使用しても構わない。水溶性溶媒の好ましい例として、グリセリン、ジプロピレングリコール、ポリオキシエチレングリセリルエーテル、ポリオキシプロピレングリセリルエーテルを挙げるができる。

水溶性有機溶媒の含有量としては、インク的全質量に対して5質量%以上60質量%以下、好ましくは、10質量%以上40質量%以下で使用される。

本発明に使用される水の添加量は特に制限は無いが、インク的全質量に対して好ましくは、10質量%以上99質量%以下であり、より好ましくは、30質量%以上80質量%以下である。更に好ましくは、50質量%以上70質量%以下である。

【0193】

<界面活性剤>

本発明のインクには、表面張力調整剤として、アセチレングリコール系界面活性剤に加え、更に界面活性剤を含有しても好ましい。界面活性剤としてはノニオン、カチオン、アニオン、ベタイン界面活性剤が挙げられる。表面張力の調整剤の添加量は、インクジェットで良好に打滴するために、本発明のインクの表面張力を20~60mN/mに調整する量が好ましく、より好ましくは20~45mN/m、更に好ましくは25~40mN/mに調整できる量である。

本発明における界面活性剤としては、分子内に親水部と疎水部を合わせ持つ構造を有する化合物等が有効に使用することができ、アニオン性界面活性剤、カチオン性界面活性剤、両性界面活性剤、ノニオン性界面活性剤のいずれも使用することができる。更には、上記高分子物質（高分子分散剤）を界面活性剤としても使用することもできる。

【0194】

アニオン系界面活性剤の具体例としては、例えば、ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム、ラウリル硫酸ナトリウム、アルキルジフェニルエーテルジスルホン酸ナトリウム、アルキルナフタレンスルホン酸ナトリウム、ジアルキルスルボコハク酸ナトリウム、ステアリン酸ナトリウム、オレイン酸カリウム、ナトリウムジオクチルスルホサクシネート、ポリオキシエチレンアルキルエーテル硫酸ナトリウム、ポリオキシエチレンアルキルエーテル硫酸ナトリウム、ポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテル硫酸ナトリウム、ジアルキルスルボコハク酸ナトリウム、ステアリン酸ナトリウム、オレイン酸ナトリウム、ト-オクチルフェノキシエトキシポリエトキシエチル硫酸ナトリウム塩等が挙げられ、これらの1種、又は2種以上を選択することができる。

ノニオン性界面活性剤の具体例としては、例えば、ポリオキシエチレンラウリルエーテル、ポリオキシエチレンオクチルフェニルエーテル、ポリオキシエチレンオレイルフェニルエーテル、ポリオキシエチレンニルフェニルエーテル、オキシエチレン・オキシプロピレンブロックコポリマー、ト-オクチルフェノキシエチルポリエトキシエタノール、ニルフェノキシエチルポリエトキシエタノール等が挙げられ、これらの1種、又は2種以上を選択することができる。

カチオン性界面活性剤としては、テトラアルキルアンモニウム塩、アルキルアミン塩、ベンザルコニウム塩、アルキルピリジウム塩、イミダゾリウム塩等が挙げられ、具体的には、例えば、ジヒドロキシエチルステアリルアミン、2-ヘプタデセニル-ヒドロキシエチルイミダゾリン、ラウリルジメチルベンジルアンモニウムクロライド、セチルピリジニ

10

20

30

40

50

ウムクロライド、ステアラミドメチルピリジウムクロライド等が挙げられる。

本発明におけるインクジェット用水性インクに添加するアセチレングリコール系界面活性剤以外の界面活性剤の量は、特に限定されるものではないが、0.1質量%以上であることが好ましく、より好ましくは0.1～10質量%、更に好ましくは0.1～3質量%である。

【0195】

<その他成分>

本発明のインクには、その他の添加剤を含有してもよい。その他の添加剤としては、例えば、紫外線吸収剤、褪色防止剤、防黴剤、pH調整剤、防錆剤、酸化防止剤、乳化安定剤、防腐剤、消泡剤、粘度調整剤、分散安定剤、キレート剤等の公知の添加剤が挙げられる。

10

【0196】

紫外線吸収剤としては、例えば、ベンゾフェノン系紫外線吸収剤、ベンゾトリアゾール系紫外線吸収剤、サリチレート系紫外線吸収剤、シアノアクリレート系紫外線吸収剤、ニッケル錯塩系紫外線吸収剤、などが挙げられる。

【0197】

褪色防止剤としては、各種の有機系及び金属錯体系の褪色防止剤を使用することができる。有機の褪色防止剤としてはヒドロキノン類、アルコキシフェノール類、ジアルコキシフェノール類、フェノール類、アニリン類、アミン類、インダン類、クロマン類、アルコキシアニリン類、ヘテロ環類などがあり、金属錯体としてはニッケル錯体、亜鉛錯体などがある。

20

【0198】

防黴剤としてはデヒドロ酢酸ナトリウム、安息香酸ナトリウム、ナトリウムピリジンチオン-1-オキシド、p-ヒドロキシ安息香酸エチルエステル、1,2-ベンズイソチアゾリン-3-オン、ソルビン酸ナトリウム、ペンタクロロフェノールナトリウムなどが挙げられる。これらはインク中に0.02～1.00質量%使用するのが好ましい。

【0199】

pH調整剤としては、調合される記録用インクに悪影響を及ぼさずにpHを所望の値に調整できるものであれば特に制限はなく、目的に応じて適宜選択することができるが、例えば、アルコールアミン類（例えば、ジエタノールアミン、トリエタノールアミン、2-アミノ-2-エチル-1,3-プロパンジオールなど）、アルカリ金属水酸化物（例えば、水酸化リチウム、水酸化ナトリウム、水酸化カリウムなど）、アンモニウム水酸化物（例えば、水酸化アンモニウム、第4級アンモニウム水酸化物）、ホスホニウム水酸化物、アルカリ金属炭酸塩などが挙げられる。

30

【0200】

防錆剤としては、例えば、酸性亜硫酸塩、チオ硫酸ナトリウム、チオジグリコール酸アンモン、ジ-プロピルアンモニウムニトライト、四硝酸ペンタエリスリトール、ジシクロヘキシルアンモニウムニトライトなどが挙げられる。

【0201】

酸化防止剤としては、例えば、フェノール系酸化防止剤（ヒンダードフェノール系酸化防止剤を含む）、アミン系酸化防止剤、硫黄系酸化防止剤、りん系酸化防止剤などが挙げられる。

40

【0202】

キレート剤としては、例えば、エチレンジアミン四酢酸ナトリウム、ニトリロ三酢酸ナトリウム、ヒドロキシエチルエチレンジアミン三酢酸ナトリウム、ジエチレントリアミン五酢酸ナトリウム、ウラミル二酢酸ナトリウムなどが挙げられる。

【0203】

<樹脂微粒子>

本発明のインクには樹脂微粒子あるいはポリマーラテックスを含有してもよい。樹脂微粒子あるいはポリマーラテックスとしては、アクリル系樹脂、酢酸ビニル系樹脂、スチレ

50

ンブタジエン系樹脂、塩化ビニル系樹脂、アクリルースチレン系樹脂、ブタジエン系樹脂、スチレン系樹脂、架橋アクリル樹脂、架橋スチレン系樹脂、ベンゾグアナミン樹脂、フェノール樹脂、シリコーン樹脂、エポキシ樹脂、ウレタン系樹脂、パラフィン系樹脂、フッ素系樹脂等を用いることができる。アクリル系樹脂、アクリルースチレン系樹脂、スチレン系樹脂、架橋アクリル樹脂、架橋スチレン系樹脂を好ましい例として挙げるができる。

樹脂微粒子の好ましい例として、自己分散性ポリマー微粒子を挙げるができる。自己分散性ポリマー微粒子とは、他の界面活性剤の不存在下に、ポリマー自身が有する官能基（特に、酸性基又はその塩）によって、水性媒体中で分散状態となりうる高分子ポリマーであって、遊離の乳化剤を含有しない高分子ポリマーの微粒子を意味する。ここで分散状態とは、水性媒体中に高分子ポリマーが液体状態で分散された乳化状態（エマルジョン）、及び、水性媒体中に高分子ポリマーが固体状態で分散された分散状態（サスペンション）の両方の状態を含むものである。本発明では高分子ポリマーが固体状態で分散された分散状態となりうる高分子ポリマーであることが好ましい。

本発明で好ましく用いられる自己分散性ポリマー微粒子は、自己分散性の観点から、親水性の構成単位と芳香族基含有モノマーに由来する構成単位とを含む高分子ポリマーを含むことが好ましい。

【0204】

前記親水性の構成単位は、親水性基含有モノマーに由来するものであれば特に制限はなく、1種の親水性基含有モノマーに由来するものであっても、2種以上の親水性基含有モノマーに由来するものであってもよい。前記親水性基としては、特に制限はなく、解離性基であってもノニオン性親水性基であってもよい。前記親水性基は、自己分散促進の観点、形成された乳化又は分散状態の安定性の観点から、解離性基であることが好ましく、アニオン性の解離基であることがより好ましい。前記解離性基としては、カルボキシル基、リン酸基、スルホン酸基などが挙げられ、中でも、インク組成物を構成した場合の定着性の観点から、カルボキシル基が好ましい。解離性基含有モノマーとしては、例えば、不飽和カルボン酸モノマー、不飽和スルホン酸モノマー、不飽和リン酸モノマー等が挙げられる。

不飽和カルボン酸モノマーとして具体的には、アクリル酸、メタクリル酸、クロトン酸、イタコン酸、マレイン酸、フマル酸、シトラコン酸、2-メタクリロイルオキシメチルコハク酸等が挙げられる。不飽和スルホン酸モノマーとして具体的には、スチレンスルホン酸、2-アクリルアミド-2-メチルプロパンスルホン酸、3-スルホプロピル（メタ）アクリレート、ビス（3-スルホプロピル）-イタコン酸エステル等が挙げられる。不飽和リン酸モノマーとして具体的には、ビニルホスホン酸、ビニルホスフェート、ビス（メタクリロキシエチル）ホスフェート、ジフェニル-2-アクリロイルオキシエチルホスフェート、ジブチル-2-アクリロイルオキシエチルホスフェート等が挙げられる。分散安定性、吐出安定性の観点から、不飽和カルボン酸モノマーが好ましく、アクリル酸及びメタクリル酸がより好ましい。

【0205】

前記芳香族基含有モノマーは、芳香族基と重合性基とを含む化合物であれば特に制限はない。前記芳香族基は芳香族炭化水素に由来する基であっても、芳香族複素環に由来する基であってもよい。水性媒体中での粒子形状安定性の観点から、芳香族炭化水素に由来する芳香族基であることが好ましい。また前記重合性基は、縮重合性の重合性基であっても、付加重合性の重合性基であってもよい。本発明においては水性媒体中での粒子形状安定性の観点から、付加重合性の重合性基であることが好ましく、エチレン性不飽和結合を含む基であることがより好ましい。

芳香族基含有モノマーは、芳香族炭化水素に由来する芳香族基とエチレン性不飽和結合とを有するモノマーであることが好ましく、芳香族基含有（メタ）アクリレートモノマーであることがより好ましい。前記芳香族基含有モノマーとしては、例えば、フェノキシエチル（メタ）アクリレート、ベンジル（メタ）アクリレート、フェニル（メタ）アクリレ

10

20

30

40

50

ート、スチレン系モノマー等が挙げられる。中でも、ポリマー鎖の親水性と疎水性のバランスとインク定着性の観点から、フェノキシエチル（メタ）アクリレート、ベンジル（メタ）アクリレート、及びフェニル（メタ）アクリレートから選ばれる少なくとも１種であることが好ましく、フェノキシエチル（メタ）アクリレートであることがより好ましく、フェノキシエチルアクリレートであることが特に好ましい。

【０２０６】

なお、「（メタ）アクリレート」は、アクリレート又はメタクリレートを意味する。自己分散性ポリマー微粒子は、芳香族基含有（メタ）アクリレートモノマーに由来する構成単位を含み、その含有量が１０質量％～９５質量％であることが好ましい。芳香族基含有（メタ）アクリレートモノマーの含有量が１０質量％～９５質量％であることで、自己乳10
化又は分散状態の安定性が向上し、更にインク粘度の上昇を抑制することができる。自己分散状態の安定性、芳香環同士の疎水性相互作用による水性媒体中での粒子形状の安定化、粒子の適度な疎水化による水溶性成分量の低下の観点から、１５質量％～９０質量％であることがより好ましく、１５質量％～８０質量％であることがより好ましく、２５質量％～７０質量％であることが特に好ましい。

自己分散性ポリマー微粒子は、例えば、芳香族基含有モノマーからなる構成単位と、解離性基含有モノマーからなる構成単位とから構成することができるが、必要に応じて、その他の構成単位を更に含んで構成することができる。

【０２０７】

前記その他の構成単位を形成するモノマーとしては、前記芳香族基含有モノマーと解離性基含有モノマーと共重合可能なモノマーであれば特に制限はない。中でも、ポリマー骨格の柔軟性やガラス転移温度（ T_g ）制御の容易さの観点から、アルキル基含有モノマー20
であることが好ましい。

前記アルキル基含有モノマーとしては、例えば、メチル（メタ）アクリレート、エチル（メタ）アクリレート、イソ*i*-プロピル（メタ）アクリレート、*n*-プロピル（メタ）アクリレート、*n*-ブチル（メタ）アクリレート、イソブチル（メタ）アクリレート、*t*-ブチル（メタ）アクリレート、ヘキシル（メタ）アクリレート、エチルヘキシル（メタ）アクリレート等のアルキル（メタ）アクリレート；ヒドロキシメチル（メタ）アクリレート、２-ヒドロキシエチル（メタ）アクリレート、２-ヒドロキシプロピル（メタ）アクリレート、４-ヒドロキシブチル（メタ）アクリレート、ヒドロキシペンチル（メタ）30
アクリレート、ヒドロキシヘキシル（メタ）アクリレート等の水酸基を有するエチレン性不飽和モノマー；ジメチルアミノエチル（メタ）アクリレート等のジアルキルアミノアルキル（メタ）アクリレート；*N*-ヒドロキシメチル（メタ）アクリルアミド、*N*-ヒドロキシエチル（メタ）アクリルアミド、*N*-ヒドロキシブチル（メタ）アクリルアミド等の*N*-ヒドロキシアルキル（メタ）アクリルアミド；*N*-メトキシメチル（メタ）アクリルアミド、*N*-エトキシメチル（メタ）アクリルアミド、*N*-（*n*-, イソ）ブトキシメチル（メタ）アクリルアミド、*N*-メトキシエチル（メタ）アクリルアミド、*N*-エトキシエチル（メタ）アクリルアミド、*N*-（*n*-, イソ）ブトキシエチル（メタ）アクリルアミド等の*N*-アルコキシアルキル（メタ）アクリルアミド等の（メタ）アクリルアミド等40
が挙げられる。

本発明における自己分散性ポリマー微粒子を構成する高分子ポリマーの分子量範囲は、質量平均分子量で、３０００～２０万であることが好ましく、５０００～１５万であることがより好ましく、１００００～１０万であることが更に好ましい。質量平均分子量を３０００以上とすることで水溶性成分量を効果的に抑制することができる。また、質量平均分子量を２０万以下とすることで、自己分散安定性を高めることができる。

【０２０８】

なお、質量平均分子量は、ゲル透過クロマトグラフ（GPC）によって測定することができる。

自己分散性ポリマー微粒子を構成する高分子ポリマーは、ポリマーの親疎水性制御の観点から、芳香族基含有（メタ）アクリレートモノマーを共重合比率として１５～９０質量50

%とカルボキシル基含有モノマーとアルキル基含有モノマーとを含み、酸価が25～100であって、質量平均分子量が3000～20万であることが好ましく、芳香族基含有(メタ)アクリレートモノマーを共重合比率として15～80質量%とカルボキシル基含有モノマーとアルキル基含有モノマーとを含み、酸価が25～95であって、質量平均分子量が5000～15万であることがより好ましい。

自己分散性ポリマー微粒子の平均粒径は、10nm～1μmの範囲が好ましく、10～200nmの範囲がより好ましく、20～100nmの範囲が更に好ましく、20～50nmの範囲が特に好ましい。

自己分散性ポリマー微粒子の添加量はインクに対して、0.5～20質量%が好ましく、3～20質量%がより好ましく、5～15質量%が更に好ましい。

自己分散性ポリマー微粒子のガラス転移温度T_gは30℃以上であることが好ましく、40℃以上がより好ましく、50℃以上が更に好ましい。

また、ポリマー粒子の粒径分布に関しては、特に制限は無く、広い粒径分布を持つもの、又は単分散の粒径分布を持つもの、いずれでもよい。また、単分散の粒径分布を持つポリマー微粒子を、2種以上混合して使用してもよい。

【0209】

<プリント性を向上させる液体組成物>

本発明には、プリント性を向上させる液体組成物を印字媒体に付与することが好ましい例として挙げることができる。

本発明に用いることができるプリント性を向上させる液体組成物の好ましい一例として、インクのpHを変化させることにより凝集物を生じさせる液体組成物を挙げることができる。このとき、液体組成物のpHは1～6であることが好ましく、pHは2～5であることがより好ましく、pHは3～5であることが更に好ましい。液体組成物の成分として、ポリアクリル酸、酢酸、グリコール酸、マロン酸、リンゴ酸、マレイン酸、アスコルビン酸、コハク酸、グルタル酸、フマル酸、クエン酸、酒石酸、乳酸、スルホン酸、オルトリン酸、ピロリドンカルボン酸、ピロンカルボン酸、ピロールカルボン酸、フランカルボン酸、ビリジンカルボン酸、クマリン酸、チオフェンカルボン酸、ニコチン酸、若しくはこれらの化合物の誘導体、又はこれらの塩等の中から選ばれることが好ましい。これらの化合物は、1種類で使用されてもよく、2種類以上併用されてもよい。

【0210】

また、本発明に用いることができるプリント性を向上させる液体組成物の好ましい一例として、多価金属塩あるいはポリアリルアミンを添加した処理液を挙げることができる。液体組成物の成分として、多価金属塩として周期表の2A属のアルカリ土類金属(例えば、マグネシウムとカルシウム)；周期表の3B属の遷移金属(例えば、ランタン)；周期表の3A属からのカチオン(例えば、アルミニウム)；ランタニド類(例えば、ネオジム)；及びポリアリルアミン、ポリアリルアミン誘導体、を挙げることができる。好ましい例として、カルシウムとマグネシウムを挙げることができる。カルシウム又はマグネシウムの対塩として好ましく採用されるアニオンは、カルボン酸塩(蟻酸、酢酸、安息香酸塩など)、硝酸塩、塩化物、及びチオシアン酸塩を挙げることができる。処理液への添加量として、当該塩は約1～約10質量%、好ましくは約1.5～約7質量%、より好ましくは約2～約6質量%の範囲の量で処理液中に存在させることができる。

【0211】

<インク物性>

本発明のインクの表面張力は、20mN/m以上60mN/m以下であることが好ましい。より好ましくは、20mN以上45mN/m以下であり、更に好ましくは、25mN/m以上40mN/m以下である。

本発明のインクの20℃での粘度は、1.2mPa・s以上15.0mPa・s以下であることが好ましく、より好ましくは2mPa・s以上13mPa・s未満、更に好ましくは2.5mPa・s以上10mPa・s未満である。

【0212】

<インクジェット記録方法>

本発明に好ましいインクジェット記録方法として、インクジェット記録用インクにエネルギーを供与して、公知の受像材料、即ち普通紙、樹脂コート紙、例えば特開平 8-169172 号公報、同 8-27693 号公報、同 2-276670 号公報、同 7-276789 号公報、同 9-323475 号公報、特開昭 62-238783 号公報、特開平 10-153989 号公報、同 10-217473 号公報、同 10-235995 号公報、同 10-337947 号公報、同 10-217597 号公報、同 10-337947 号公報等に記載されているインクジェット専用紙、フィルム、電子写真共用紙、布帛、ガラス、金属、陶磁器等に画像を形成する。本発明に好ましいインクジェット記録方法として特開 2003-306623 号公報の段落番号 0093~0105 の記載が適用できる。

10

特に、本発明のインクジェット記録用顔料インクは、サーマルインクジェット記録用として用いられることが、本願発明の効果を十分発揮する上で好ましい。

【0213】

画像を形成する際に、光沢性や耐水性を与えたり耐候性を改善する目的からポリマーラテックス化合物を併用してもよい。ラテックス化合物を受像材料に付与する時期については、着色剤を付与する前であっても、後であっても、また同時であってもよく、したがって添加する場所も受像紙中であっても、インク中であってもよく、あるいはポリマーラテックス単独の液状物として使用しても良い。具体的には、特開 2002-166638 (特願 2000-363090)、特開 2002-121440 (特願 2000-315231)、特開 2002-154201 (特願 2000-354380)、特開 2002-144696 (特願 2000-343944)、特開 2002-080759 (特願 2000-268952) に記載された方法を好ましく用いることができる。

20

【0214】

本発明に好ましい画像形成方式の一例として、

第一の工程：プリント性を向上させる液体組成物を記録媒体に付与する工程。

第二の工程：前記液体組成物が付与された記録媒体にインク組成物を付与する工程。

その他の工程：その他の工程としては、特に制限はなく、目的に応じて適宜選択することができ、例えば、乾燥除去工程、加熱定着工程等が挙げられる。前記乾燥除去工程としては、記録媒体に付与されたインク組成物におけるインク溶媒を乾燥除去する以外は特に制限はなく、目的に応じて適宜選択することができる。前記加熱定着工程としては、前記インクジェット記録方法で用いられるインク中に含まれるラテックス粒子を溶融定着する以外は特に制限はなく、目的に応じて適宜選択することができる。

30

【0215】

本発明に好ましい画像形成方式のもう一つの例として、

第一の工程：プリント性を向上させる液体組成物を中間転写体に付与する工程。

第二の工程：前記液体組成物が付与された中間転写体にインク組成物を付与する工程。

第三の工程：前記中間転写体に形成されたインク画像を記録媒体に転写する工程。

その他の工程：その他の工程としては、特に制限はなく、目的に応じて適宜選択することができ、例えば、乾燥除去工程、加熱定着工程等が挙げられる。

【実施例】

40

【0216】

以下、本発明を実施例に基づき更に詳細に説明するが、本発明はこれらの実施例に何ら限定されるものではない。なお、実施例中、「部」とは質量部を表す。

本発明のアゾ顔料は、下記顔料の合成例 1 で説明する Pig. -1 の合成方法に準じて合成することが可能である。

【0217】

[合成例 1]

(顔料の合成)

例示化合物 (Pig. -1) の合成

例示化合物 (Pig. -1) の合成スキームを下記に示す。

50

【 0 2 1 8 】

【 化 3 5 】

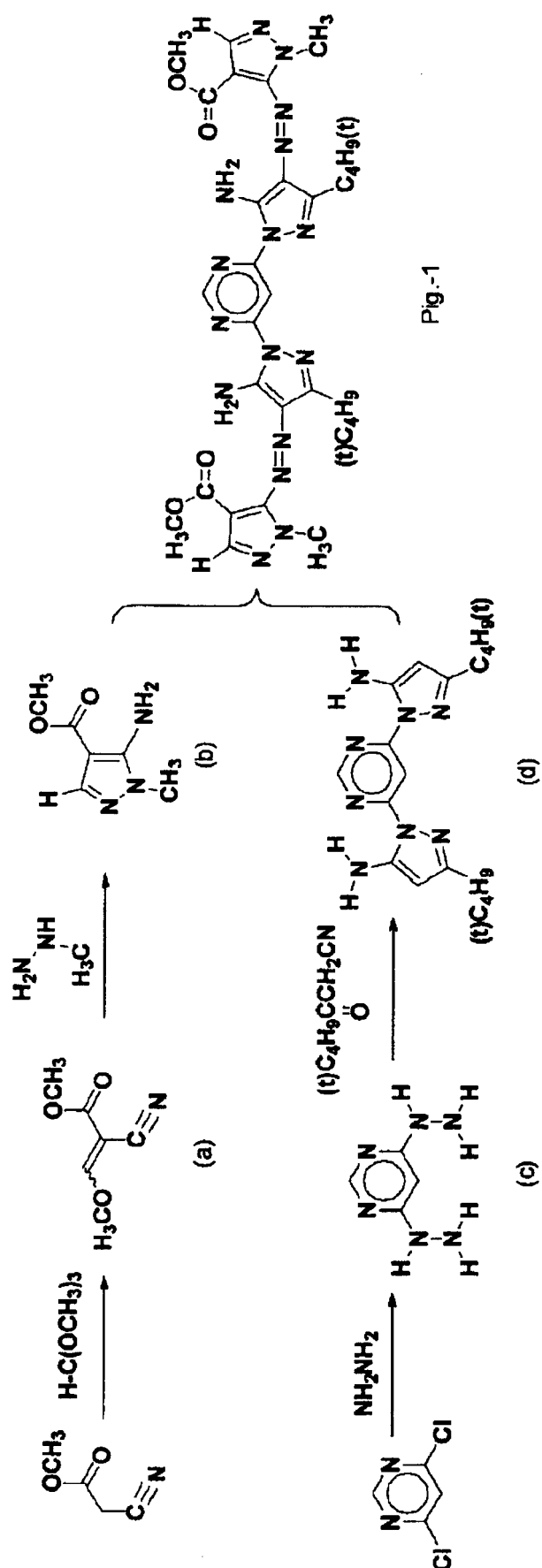


Fig.-1

10

20

30

40

【 0 2 1 9 】

(1) 中間体 (a) の合成

50

シアノ酢酸メチル 29.7 g (0.3 モル) にオルトギ酸トリメチル 42.4 g (0.4 モル)、無水酢酸 20.4 g (0.2 モル)、p-トルエンスルホン酸 0.5 g を加えて 110 °C (外温) に加熱し、反応系から生じる低沸点成分を留去しながら 20 時間攪拌した。この反応液を減圧濃縮した後、シリカゲルカラム精製を行い前記中間体 (a) を 14.1 g (黄色粉末、収率 30 %) で得た。得られた中間体 (a) の NMR 測定結果は以下の通りである。

$^1\text{H-NMR}$ (300 MHz、 CDCl_3) 7.96 (s, 1H), 4.15 (s, 3H), 3.81 (s, 3H)

【0220】

(2) 中間体 (b) の合成

メチルヒドラジン 7.4 mL (141 ミリモル) にイソプロパノール 150 mL を加えて 15 °C (内温) に冷却し、この混合液に中間体 (a) 7.0 g (49.6 ミリモル) を徐々に添加した後、50 °C に加熱して 1 時間 40 分攪拌した。この反応液を減圧濃縮した後、シリカゲルカラム精製を行い前記中間体 (b) を 10.5 g (白色粉末、収率 50 %) で得た。得られた中間体 (b) の NMR 測定結果は以下の通りである。

$^1\text{H-NMR}$ (300 MHz、 CDCl_3) 7.60 (s, 1H), 4.95 (br s, 2H), 3.80 (s, 3H) 3.60 (s, 3H)

【0221】

(3) 中間体 (c) の合成

ヒドラジン 1 水和物 130 mL にメタノール 100 mL を加えて 10 °C (内温) に冷却し、この混合液に 4,6-ジクロロピリミジン 50.0 g (336 ミリモル) を徐々に添加 (内温 20 °C 以下) した後、50 °C に加熱して 4 時間 30 分攪拌した。反応液から析出した結晶をろ取、イソプロパノールでかけ洗い後、乾燥を行い前記中間体 (c) を 43.1 g (白色粉末、収率 92 %) で得た。得られた中間体 (c) の NMR 測定結果は以下の通りである。

$^1\text{H-NMR}$ (300 MHz、 $d\text{-DMSO}$) 7.82 (s, 1H), 7.55 (s, 2H), 5.96 (s, 1H), 4.12 (s, 4H)

【0222】

(4) 中間体 (d) の合成

中間体 (c) 35.0 g (0.25 モル)、ピバロイルアセトニトリル 68.8 g (0.55 モル) に水 900 mL を加えて室温で攪拌した。この懸濁液に 1 M 塩酸水を pH 3 になるように滴下した後、50 °C に加熱して 8 時間攪拌した。この反応液に 8 M 水酸化カリウム水溶液を滴下して pH 8 に調整して、更に 1 M 塩酸水を滴下して pH 6 に調整して析出した結晶をろ取、イソプロパノールでかけ洗い後、乾燥を行い前記中間体 (d) を 83.0 g (白色粉末、収率 94 %) で得た。得られた中間体 (d) の NMR 測定結果は以下の通りである。

$^1\text{H-NMR}$ (300 MHz、 $d\text{-DMSO}$) 8.73 (s, 1H), 7.97 (s, 1H), 6.88 (s, 4H), 5.35 (s, 2H), 1.22 (s, 18H)

【0223】

(5) 例示化合物 (Fig. -1) の合成

濃硫酸 4.1 mL に酢酸 18.5 mL を加えて氷冷で攪拌し、40 % ニトロシル硫酸 3.85 g (12.1 ミリモル) を滴下した。この混合液に中間体 (b) 1.71 g (11.0 ミリモル) を徐々に添加 (内温 0 °C 以下) した後、0 °C で 2 時間攪拌した。この反応液に尿素 150 mg を添加し、更に 0 °C で 15 分攪拌して、ジアゾ液 A を調製した。

中間体 (d) にメタノール 50 mL を加えて加熱溶解させた後、氷冷で攪拌した混合液に前記ジアゾ液 A をゆっくり滴下した (内温 10 °C 以下)。この反応液を室温で 2 時間攪拌した後、析出した結晶をろ取、メタノールでかけ洗いして前記例示化合物 (Fig. -1) の粗結晶を得た。更に前記粗結晶に水を加えて攪拌した後、この懸濁液を水酸化ナトリウム水溶液で pH 7 に調整し、更にジメチルアセトアミド 20 mL を加えて、80 °C で 2 時間攪拌した。析出した結晶をろ取、更にメタノールで懸濁洗浄し得られた結晶をろ取

10

20

30

40

50

、乾燥して例示化合物（P i g．－ 1）を 2． 0 g（黄色粉末、収率 7 9 %）で得た。

【 0 2 2 4】

[合成例 2]

（顔料の合成）

例示化合物（P i g．－ 1 8）の合成

例示化合物（P i g．－ 1 8）の合成スキームを下記に示す。

【 0 2 2 5】

10



30

40

50

(1) 中間体 (a) の合成

シアノ酢酸メチル 29.7 g (0.3 モル) に オルトギ酸トリメチル 42.4 g (0.4 モル)、無水酢酸 20.4 g (0.2 モル)、p-トルエンスルホン酸 0.5 g を加えて 110 °C (外温) に加熱し、反応系から生じる低沸点成分を留去しながら 20 時間攪拌した。この反応液を減圧濃縮した後、シリカゲルカラム精製を行い前記中間体 (a) を 14.1 g (黄色粉末、収率 30 %) で得た。得られた中間体 (a) の NMR 測定結果は以下の通りである。

$^1\text{H-NMR}$ (300 MHz、 CDCl_3) 7.96 (s, 1H), 4.15 (s, 3H), 3.81 (s, 3H)

【0227】

10

(2) 中間体 (b) の合成

メチルヒドラジン 7.4 mL (141 ミリモル) に イソプロパノール 150 mL を加えて 15 °C (内温) に冷却し、この混合液に中間体 (a) 7.0 g (49.6 ミリモル) を徐々に添加した後、50 °C に加熱して 1 時間 40 分攪拌した。この反応液を減圧濃縮した後、シリカゲルカラム精製を行い前記中間体 (b) を 10.5 g (白色粉末、収率 50 %) で得た。得られた中間体 (b) の NMR 測定結果は以下の通りである。

$^1\text{H-NMR}$ (300 MHz、 CDCl_3) 7.60 (s, 1H), 4.95 (br s, 2H), 3.80 (s, 3H), 3.60 (s, 3H)

【0228】

20

(3) 中間体 (c') の合成

メタノール 1.1 L に水 136 mL を加えて、炭酸水素ナトリウム 182 g (2.17 モル) を添加し、室温にて攪拌した。同温度にて塩化シアヌル 200 g (1.08 モル) を分割添加した。添加終了後、内温を 30 °C まで昇温した。同温度にて 30 分間攪拌した後、水 500 mL を加え、析出した固体を濾別し、水 500 mL、メタノール 300 mL でかけ洗い後、乾燥を行い、前記中間体 (c') を 168 g (白色粉末、収率 86.2 %) で得た。得られた中間体 (c') の NMR 測定結果は以下の通りである。

$^1\text{H-NMR}$ (300 MHz、 CDCl_3) 4.14 (s, 3H)

【0229】

(4) 中間体 (d') の合成

ヒドラジン 1 水和物 363 mL (7.46 モル) に水 673 mL を加えて 10 °C (内温) に冷却し、この混合液に中間体 (c') 168 g (934 ミリモル) を徐々に添加 (内温 20 °C 以下) した後、氷浴をはずし、室温まで昇温し、同温度にて 30 分攪拌した。反応液から析出した結晶をろ取、水 700 mL、アセトニトリル 1 L でかけ洗い後、乾燥を行い前記中間体 (d') の疎精製物 (白色粉末) を得た。

30

【0230】

(5) 中間体 (e) の合成

中間体 (d') の疎精製物に、エチレングリコール 480 mL を加えて室温で攪拌した。この懸濁液にピバロイルアセトニトリル 257 g (2.06 モル) を加え、内温が 50 °C になるまで加熱した。同温度にて 12 M 塩酸水を pH 3 になるように滴下した後、内温が 80 °C になるまで加熱して 3 時間攪拌した。反応終了後、氷冷し内温が 8 °C になるまで冷却し、析出した結晶をろ取、水でかけ洗い後、シリカゲルカラム精製を行い、前記中間体 (e) を 105 g (白色粉末、2 工程収率 29.2 %) で得た。得られた中間体 (e) の NMR 測定結果は以下の通りである。

40

$^1\text{H-NMR}$ (300 MHz、 $d\text{-DMSO}$) 7.00 (s, 4H), 5.35 (s, 2H), 4.05 (s, 3H), 5.35 (s, 2H), 1.22 (s, 18H)

【0231】

(6) 例示化合物 (Fig. -18) の合成

酢酸 125 mL と硫酸 24 mL の混合液を氷冷し、内温を 3 °C まで冷却した。同温度にてニトロシル硫酸 26.4 g を添加し、続いて、同温度にて中間体 (b) 11.6 g を分割添加して溶解させた。同温度にて 1 時間攪拌した後、同温度にて尿素 1.2 g を分割添

50

加し、同温度にて15分間攪拌し、ジアゾニウム塩溶液を得た。別に、中間体(e) 11.6 gをメタノール405 mLに室温にて完溶させ、氷冷して内温を-3℃に冷却した。同温にて、上述のジアゾニウム塩溶液を内温が3℃以下になるように分割添加し、添加終了後、2時間攪拌した。氷浴をはずし、室温にて10分間攪拌した後、析出した結晶を濾別し、メタノール150 mLでかけ洗いし、更に水100 mLでかけ洗いした。得られた結晶を乾燥せずに水750 mLに懸濁させ、8規定の水酸化カリウム水溶液を添加して、pHを5.7にした。室温にて20分間攪拌した後、得られた結晶を濾別し、水で十分にかけ洗いしたのち、メタノール80 mLでかけ洗いした。得られた結晶を室温にて、12時間乾燥させ、例示化合物(Pig. -18)を20.3 g得た。収率94.0%。

得られた例示化合物(Pig. -18)をエタノール/水になじませ、透過型顕微鏡TEM(日本電子製1200EX)にて一次粒子径を測定したところ1100 nmであった。

10

【0232】

[合成例3]

(ビニルポリマー(P-1)の合成)

下記モノマー組成の成分を全量が100質量部になるように混合し、更に重合開始剤として2,2'-アゾビス(2,4-ジメチルバレロニトリル)1質量部添加し、窒素ガス置換を十分にを行い、合成混合液を得た。

【0233】

フェノキシエチルメタクリレート	55質量部	20
メチルメタクリレート	35質量部	
メタクリル酸	10質量部	
2-メルカプトエタノール	0.1質量部	

【0234】

次に、メチルエチルケトン100質量部を窒素雰囲気下で攪拌しながら75℃まで昇温させた。75℃、攪拌状態で上記合成混合液を3時間にわたって滴下した。更に75℃、攪拌状態で5時間反応を続けた。その後、反応合成物を25℃まで自然冷却した後、固形分が50%になるようにメチルエチルケトンを加えて希釈し、質量平均分子量41000のビニルポリマー溶液を得た。

【0235】

30

[合成例4]

(ビニルポリマー(P-2)の合成)

合成例1におけるモノマー組成を下記モノマー組成に変えた以外は合成例1と同様にしてビニルポリマー(P-2)の溶液を得た。GPCより求めた質量平均分子量(Mw)が42000であった。

【0236】

フェノキシエチルメタクリレート	50質量部	
メチルメタクリレート	35質量部	
メタクリル酸	15質量部	
2-メルカプトエタノール	0.1質量部	40

【0237】

[実施例1]

1. 顔料平均一次粒子径の調製

(例示化合物Pig. -1の溶剤ソルトミリング処理)

以下の組成となるように、スーパーミキサーに粗アゾ顔料及び食塩を投入して混合した。スーパーミキサーを回転させながらジエチレングリコールを少しずつ添加してPig. -1の混合物(以下、「予備混合物」ということがある)を調製した。

【0238】

<微細化黄色顔料(Pig-Y1)の組成>

例示化合物(Pig. -1)	100質量部	50
----------------	--------	----

食塩（ナクルUM-5、ナйка塩業（株）製、粒子径 $5\ \mu\text{m}$ ） 1500質量部
ジエチレングリコール（DEG） 300質量部

【0239】

続いて、連続式1軸混練機（浅田鉄工（株）製、ミラクルCKK-L）の磨砕部及び押出部の5箇所の温度を $15\sim 20\ ^\circ\text{C}$ に、軸回転数 $40\ \text{rpm}$ に設定し、上記で得られた予備混合物を投入し、混練物を得た。この時、電流値（負荷）は約 $5\ \text{A}$ で、吐出量は $45\ \text{g}/\text{分}$ 、吐出物の温度は $17\ ^\circ\text{C}$ であった。

こうして得られた混練物1,000質量部を $80\ ^\circ\text{C}$ に加温した純水5,000質量部へ投入してクリアミックスを用いて攪拌処理を行った後、濾過及び十分に水洗をして食塩及びジエチレングリコールを除去し、固形分量が25質量%になるように調製した微細化黄色顔料のウェットケーキ（Pig-Y1、アゾ顔料磨砕物）を得た。

【0240】

（透過型電子顕微鏡（TEM）観察による平均一次粒子径の測定）

更に、透過型電子顕微鏡（TEM）観察による平均粒径評価は、カーボン膜を貼り付けたCu200メッシュに希釈した分散体を滴下した後乾燥させ、TEM（日本電子製1200EX）で10万倍に拡大した画像から、重なっていない独立した粒子300個の長径を測定して平均値を平均粒径として算出した（以下、TEM観察により算出した平均粒径を単に平均一次粒子径と記述する。）。

得られた顔料の平均一次粒子径を測定したところ $60\ \text{nm}$ であった。

【0241】

2. 水系顔料分散体の調製

（15質量%例示化合物Pig.-1含有ビニルポリマー粒子の水系分散体（1）の調製）

上記の溶剤ソルトミリング処理後のPig-Y1を用い、以下の組成の各成分を混合し、クレアミックス（MTECHNIQUE社製；CLM-0.8S、 $10000\ \text{rpm}$ ）で5分間予備分散し、更に高圧ホモジナイザー（（株）スギノマシン社製；スターバースト）の処理条件を $150\ \text{MPa}$ の圧力、パス回数を4パスで分散処理を行った。続いて、得られた分散物を減圧下、 $56\ ^\circ\text{C}$ でメチルエチルケトンを除去し、イオン交換水を加え、例示化合物（Pig.-1）の濃度が15.0質量%となるよう顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体（1）を調製した。

【0242】

<顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体（1）の組成>

アゾ顔料磨砕物（Pig-Y1）	60.0質量部
ビニルポリマー（P-1）	5.3質量部
メチルエチルケトン	9.4質量部
$1\ \text{mol}/\text{L}$ NaOH水溶液	5.5質量部
イオン交換水	19.8質量部

【0243】

得られた顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体（1）について、ナノトラック粒度分布測定装置UPA-EX150（日機装（株）製）を用い、動的光散乱法により平均粒子径を測定した。顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体 $30\ \mu\text{l}$ に対してイオン交換水 $10\ \text{ml}$ を加えて測定用サンプル液を調製し、これを $25\ ^\circ\text{C}$ に調温して測定したところ、体積平均粒子径Mvが $100\ \text{nm}$ であった。

得られた顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体（1）について、東亜DKK（株）製pHメーターWM-50EGを用い、 $25\ ^\circ\text{C}$ で測定したところ、8.8であった。

【0244】

3. インクジェット記録用水性インクの調製

（インクジェット記録用水性インク組成物（1）の調製）

次に、得られた顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体（1）を用い、以下の組成にて水性インク組成物（1）を調製した。東亜DKK（株）製pHメーターWM-50EGに

て、水性インク組成物（１）のpHを25℃で測定したところ、8.9であった。

【0245】

<水性インク組成物（１）の組成>

顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体（１）	33質量部
1,6-ヘキサジオール	3質量部
グリセリン	9質量部
2-ピロリドン	3質量部
ポリグリセリン（＃500）（坂本薬品工業株式会社製）	1質量部
サーフィノール465（日信化学工業（株）製）	2質量部
イオン交換水	49質量部

10

【0246】

[実施例2]

1. 顔料平均一次粒子径の調製

（例示化合物Pig. -18のソルベントソルトミリング処理）

実施例1の例示化合物Pig. -1をPig. -18に変えた以外、実施例1と同じ条件で連続式1軸混練機（浅田鉄工（株）製、ミラクルCKK-L）を用いて、混練物を得た。実施例1と同様にして微細化黄色顔料のウェットケーキ（Pig-Y2、アゾ顔料磨砕物、平均一次粒子径20nm）を得た。

【0247】

2. 水系顔料分散体の調製

（15質量%例示化合物Pig. -18含有ビニルポリマー粒子の水分散体（2）の調製）

実施例1の顔料含有ビニルポリマーの水分散体（1）の調製において、Pig-Y1をPig-Y2に、ビニルポリマーP-1をP-2に変え、高圧ホモジナイザーの処理条件を150MPaの圧力、パス回数を5パスに変更した以外は実施例1と同様にして、顔料含有ビニルポリマーの水分散体（2）を調製した。

【0248】

得られた顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体（2）について、実施例1と同様に測定したところ、体積平均粒子径Mvが90nmであった。。実施例1と同様にpHを測定したところ、8.5であった。

30

【0249】

3. インクジェット記録用水性インクの調製

（インクジェット記録用水性インク組成物（2）の調製）

実施例1の水性インク組成物（1）の調製において、水分散体（1）を水分散体（2）に変えた以外は実施例1と同様にして水性インク組成物（2）を調製し、pHを測定したところ、8.8であった。

【0250】

[実施例3]

実施例2の例示化合物Pig. -18のソルベントソルトミリング処理を省いて、水系顔料分散体の調製を以下の手順で行った。

40

1. 水系顔料分散体の調製

（15質量%の顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体（3）の調製）

以下の組成の各成分を混合し、ビーズミルで0.1mmφジルコニアビーズを用いて6時間分散した。続いて、得られた分散物を減圧下、56℃でメチルエチルケトンを除去し、イオン交換水を加え、例示化合物（Pig. -18）の濃度が15.0質量%となるよう顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体を調製した。

【0251】

<水分散体（3）の組成>

例示化合物（Pig. -18）	15.0質量部
ビニルポリマー（P-2）	4.5質量部

50

メチルエチルケトン : 9. 4 質量部
1 mol/L NaOH水溶液 : 5. 5 質量部
イオン交換水 : 65. 6 質量部

得られた分散体について、実施例 2 と同様に、水性インク組成物 (3) を調製し、pH を測定したところ、8. 5 であった。

【0252】

[実施例 4 ~ 6]

実施例 2 のインクジェット記録用水性インクの調製において、界面活性剤、添加物を表 1 に記載の条件に変更した以外は実施例 2 と同様に、インクジェット記録用インク組成物 (4) から (6) を調製した。

10

【0253】

[比較例 1]

1. 顔料平均一次粒子径の調製

(ピグメントイエロー 74 のソルベントソルトミリング処理)

実施例 1 の例示化合物 Pig. - 1 をピグメントイエロー 74 に変えた以外、実施例 1 と同じ条件で連続式 1 軸混練機 (浅田鉄工 (株) 製、ミラクル KCK-L) を用いて、混練物を得た。実施例 2 と同様に、微細化黄色顔料のウェットケーキ (Pig-Y3、平均一次粒子径 40 nm) を得た。

【0254】

2. 水系顔料分散体の調製

20

(15 質量% 例示化合物 Pig-Y3 含有ビニルポリマー粒子の水分散体 (4) の調製)

実施例 1 の顔料含有ビニルポリマーの水分散体 (1) の調製において、Pig-Y1 を Pig-Y3 に変え、ビニルポリマー P-1 を P-2 に変え、高圧ホモジナイザーの処理条件を 150 MPa の圧力、パス回数を 5 パスに変更した以外は実施例 1 と同様に、顔料含有ビニルポリマーの水分散体 (4) を調製した。

【0255】

得られた顔料含有ビニルポリマー粒子の水分散体 (4) について、実施例 1 と同様に測定したところ、体積平均粒子径 M_v が 95 nm であった。実施例 1 と同様に pH を測定したところ、8. 6 であった。

【0256】

30

3. インクジェット記録用水性インクの調製

(インクジェット記録用水性インク組成物 (7) の調製)

実施例 1 の水性インク組成物 (1) の調製において、水分散体 (1) を水分散体 (4) に変えた以外は実施例 1 と同様に、水性インク組成物 (7) を調製し、pH を測定したところ、8. 8 であった。

【0257】

[比較例 2]

実施例 2 のビニルポリマー P-2 を Disperbyk 193 (ビックケミー・ジャパン社製) に変えた以外は実施例 2 と同様に、水性インク組成物 (8) を調製し、pH を測定したところ、8. 6 であった。Disperbyk 193 は、本発明に係る B 成分のビニルポリマーに該当しない。

40

【0258】

[比較例 3、4]

実施例 4 のインクジェット記録用水性インクの調製において、界面活性剤、添加物を表 1 に記載の条件に変更した以外は実施例 4 と同様に、インクジェット記録用インク組成物 (9)、(10) を調製した。

【0259】

得られた各インクジェット記録用水性インク組成物について、以下の評価を行った。結果を表 1 に示す。

【0260】

50

(インク組成物の保存安定性)

作製した水性インク組成物をPET製容器に入れて密栓し、60℃恒温槽中で14日間保存し、保存後の粘度及び平均粒子径を測定した。また、同様の方法で保存前の顔料含有ビニルポリマー粒子水分散体の粘度及び平均粒子径も測定した。粘度は、R100型粘度計(東機産業社製)により25℃、コーンの回転数20~100rpmの条件にて測定した。平均粒子径は、ナノトラック粒度分布測定装置UPA-EX150(日機装(株)製)を用い、動的光散乱法により体積平均粒子径Mvを測定した。

それぞれの測定値を指標にして、下記の評価基準に従って作製した水性インク組成物の安定性評価をした。

【0261】

<評価基準>

A: 粘度及び平均粒子径ともに、保存前の値の±5%未満であった。

B: 粘度及び平均粒子径いずれかの値が、保存前の値の±5%以上であった。

C: 粘度及び平均粒子径ともに、保存前の値の±5%以上であった。

【0262】

(吐出精度評価)

作製した水性インク組成物(1)~(10)について、インクジェット記録装置としてインクジェットプリンターPIXUS-950i(キヤノン(株)製)用のインクカートリッジに充填し、30℃30%RHの環境下にてイエローベタ画像の連続印字を行った。連続印字前にノズルチェックを行い、充填性を確認したあとに評価を開始した。記録媒体として富士ゼロックス社製Xerox4024を用いた。印字中にドット抜け又はインクの飛び散りや曲がり等による乱れが生じた際、回復動作としてクリーニングを都度行った。A4サイズで連続印刷200ページ中に要したクリーニング回数を結果とし、下記の基準に従って評価した。評価結果を表1に示す。

【0263】

<評価基準>

A: クリーニング回数ゼロ~1回。

B: クリーニング回数2~4回。

C: クリーニング回数5回以上。

【0264】

(焦げ(コゲーション)評価)

作製したインク組成物を試作インクカートリッジに充填し、試作インクジェット記録装置を用いて 1×10^8 pulseの条件にて、記録媒体として富士フイルム社製画彩写真仕上げProを用い、吐出初期のベタ画像印字における光学濃度と、インク組成物を250ml吐出した後のベタ画像印字における光学濃度を、X-rite310(X-rite社製)にてそれぞれ測定した。それぞれの測定値を指標にして、下記の評価基準に従ってコゲーション評価をした。

【0265】

<評価基準>

A: 印字前後の光学濃度変化量の割合が±2.5%未満であった。

B: 印字前後の光学濃度変化量の割合が±2.5%以上、±5.0%未満であった。

C: 印字前後の光学濃度変化量の割合が±5.0%以上、±10.0%未満であった。

D: 印字前後の光学濃度変化量の割合が±10.0%以上であった。

【0266】

(メンテナンス性評価)

上記と同様に、作製したインク組成物を試作インクカートリッジに充填し、試作インクジェット記録装置を用いて 1×10^8 pulseの条件にて、インクを下記(1)~(3)の条件で吐出後に、ワイパブレード(水素化NBR)でインクジェットヘッドのノズル面をワイピングし、その後の再吐出性評価の結果より、その合否を判定した。更に下記評価基準に従ってメンテナンス性を評価した。

【0267】

(1) 60分連続吐出終了直後にブレードワイプを1回実施し、その後のインク吐出率が90%以上の場合、合格。

(2) 1分間吐出後30分休止し、休止後にブレードワイプを1回実施し、その後のインク吐出率が90%以上の場合、合格。

(3) 10分間吐出終了直後にブレードワイプを1回実施し、その後に形成された画像に画像ムラが見られない場合、合格。

【0268】

ーインク吐出率の測定法ー

実験開始時に全ノズルが吐出していることを確認し、メンテナンスを含めた実験終了後の吐出ノズル数をカウントして、下記の通り吐出率を算出した。

吐出率(%) = [メンテナンス後の吐出ノズル数] / [全ノズル数] × 100 (%)

【0269】

<評価基準>

A：3項目とも合格の場合

B：2項目が合格の場合

C：1項目のみ合格の場合

D：3項目とも不合格の場合

【0270】

(耐擦性)

作製したインク組成物を、インクジェットプリンターPIXUS-950i (キヤノン(株)製)のインクカートリッジに充填し、このインクジェットプリンターのイエローインクの位置にセットした。記録媒体としてキャノンプラチナグレードペーパーPT-101 (キヤノン製)を用い、ベタ及びODが1.0のイエロー画像を印画した。得られた記録媒体を23℃50%RHで1日放置した後、ベタ画像を、記録媒体の非記録部に傷が付く程の強い圧力を加えてスパチュラの平たい部分で3回引っ掻いた。擦った後の印画面を目視により観察し、予め定めておいた限度見本に照合して、下記評価基準に従って、目視による耐擦性評価を行った。評価結果は下記表に示す。

【0271】

<評価基準>

A：画像の表面に爪跡が残らなかった。

B：画像の表面に爪跡が残るが、記録媒体から色材が削れ落ちなかった。

C：画像の表面に爪跡残り、かつ、記録媒体から色材がわずかに削れ落ちた。

D：記録媒体の表面が露出することはないが、色材が明らかに削れ落ちた。

【0272】

(耐光性)

上記ODが1.0のイエロー画像印字物を、キセノンウェザーメーター(スガ試験機社製)を用いて屋外直接暴露相当条件(9.9kw、フィルタ：#275)で2週間照射し、色素残存率[(照射後濃度/照射前濃度)×100%]を求めて、光堅牢性を評価した。評価結果は下記表に示す。

【0273】

<評価基準>

A：色素残存率が95%以上

B：色素残存率が75%以上95%未満

C：色素残存率が75%未満

【0274】

【表 1】

	インク組成				ソルトミリング	インク 保存安定性	ヘッド適性		描画特性		
	着色剤	ビニル ポリマー	界面活性剤 (質量部)	多価アルコール (質量部)			コゲー ション	メンテ ナンス 性	吐 出 精 度	耐 擦 性	耐 光 性
実施例	1	Pig-1	P-1	サーフェイス465 (2)	ホリグリセリン#500 (1)	有	A	A	A	A	A
	2	Pig-18	P-2	サーフェイス465 (2)	ホリグリセリン#500 (1)	有	A	A	A	A	A
	3	Pig-18	P-2	サーフェイス465 (2)	ホリグリセリン#500 (1)	無	B	A	A	A	A
	4	Pig-18	P-2	オルフィンE1010 (1)	SC-E450 (2)	有	A	A	A	A	A
	5	Pig-18	P-2	アセチノール E100(3)	SC-P750 (1)	有	A	A	A	A	A
	6	Pig-18	P-2	アセチノール E200(1)	SC-E750 (3)	有	A	A	A	A	A
比較例	1	ビグメント イエロー74	P-2	サーフェイス465 (2)	ホリグリセリン#500 (1)	有	B	B	B	A	C
	2	Pig-18	Disperby k193	サーフェイス465 (2)	SC-P750 (2)	有	B	B	B	A	B
	3	Pig-18	P-2	なし	SC-E450 (2)	有	B	B	B	B	A
	4	Pig-18	P-2	アセチノール E100(1)	なし	有	B	B	B	B	A

10

20

30

40

フロントページの続き

(72)発明者 山本 宏

神奈川県足柄上郡開成町牛島 5 7 7 番地 富士フイルム株式会社内

Fターム(参考) 2C056 EA13 FA03 FC02

2H186 BA10 BA11 DA12 DA14 FB11 FB15 FB16 FB17 FB22 FB25

FB29 FB30 FB48 FB55

4J039 AD03 AD06 AD08 AD10 AD12 AE07 BC09 BC41 BC50 BC51

BE01 CA06 EA35 EA36 EA44 EA46 GA24